

♥ ネコミミ少女の監禁♥ 孕ませ調教はじめました♥

ぼくちゃん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 登場人物

ネコミミロリケモ娘たちを監禁してえつちな事をしまくるという話。難しい話は一切ナシ！

妹のミイちゃん。姉のミアちゃん。そして二人の母親のエミさん。犯して犯して孕ませる！

もうすぐ全員妊娠胎ボテエンドを迎えそう。

※獣人といつても、世のケモナーが怒るレベルでケモ度は低いです。

20200612改題しました。

# 目 次

## ネコミミ少女 ミイ

01	ネコミミ少女を拾いました	1
02	ネコミミ少女に手を出しました	5
03	ネコミミ少女を汚しました	10
04	ネコミミ少女が懐いてきました	17
05	ネコミミ少女が求めてきました	22
06	ネコミミ少女とお昼寝しました	31
07	ネコミミ少女を捕獲しました	41
	その姉、ミア	
08	ネコミミ少女を捕獲しました——02	
09	ネコミミ少女を捕獲しました——03	
10	ネコミミ少女と結婚しました——01	55
11	ネコミミ少女と結婚しました——02	61
12	ミアちゃん、おしつこ調教♥	67
13	ミア、肉体調教。精神はそのままに。	76
14	ミアちゃんとミイちゃん仲良し姉妹	83
	第三の少女、エミ	
15	白いネコちゃん	92
16	♥種付けラブラブ姉妹姦♥	108
17	白猫ちゃんのお腹に宿る新しい命	120
18	姉のミアちゃん妊娠録	134
19	ミイちゃん孕ませツクスレイプ！	147
		158

## ネコミニ少女 ミイ

### 01 ネコミニ少女を拾いました

ぷにぷにしててやわらかくてやわらかな女の子のくちびるから、自身の口を静かに離す。唾液で出来た濡れて光る糸だけが、互いの口を結んでいた。

頭がくらくらする。キスがこんなにも気持ちがいいものだつたなんて……。

勃起が収まらない。このまま自身で扱いて射精してしまいたい程だが、なけなしの理性をフル動員して思いとどまる。

こんなチャンスが訪れる事なんて、金輪際無いだろうな……。

名前も知らないネコミニ少女からはなんの反応も無い。僕のベッドに横たえたまま眠っているのと同じように目を閉じ、静かに呼吸を繰り返しているだけだ。

ちからの入っていない柔らかな手を、指を絡ませながら勝手に握る。ちいさなくちびるのそれだけでなく、指の一本一本の柔らかさにすら驚かされる。太ももやお尻なんかも柔らかいんだろう。もちろん、この控えめな胸のふくらみも。

次に少女の体に跨り、無遠慮にもその首筋に顔をうずめて少女の体臭を鼻腔いっぱいに吸い込む。ほんのりとした汗と獣臭を含んだそれがまた、雄の情欲を一層刺激してくる。

キスの快楽をまた味わいたくて、再び彼女のくちびるに口を付け る。やつぱりやわらかくて気持ちいい……！呼吸も忘れ、夢中で彼女のくちびるを貪り続ける。

くちびるを貪る行為はエスカレートしてゆき、ついに少女の口の中に舌を入れる。

くちびるの表層だけでは得られなかつた膨大な量の情報が流れ込んでくる。

少女の口内を潤している唾液の味やカタチの凹凸、そして小さく幼い舌の弾力を楽しみながら互いの唾液を交換して喉を潤す。

同時に、眠る少女の胸元を飾るリボンをほどく。次いで、ブラウスのボタンをひとつずつ外してゆくと、解放された胸元から、少女のあまり体臭が立ち上るのを感じた。

この狭い地下室に響き渡る、ちゅぱちゅぱという下品な水音や時折漏れる少女の呼吸音、女の子の口内を、本人の合意なく舌で犯していくという変態的な行為等々が僕の中の獣欲を膨れ上がらせ、最後に残った理性の糸が、ツツリと切れる音を聞いた。

もう誰も、僕を止められない……。

「それじゃあね、ばあちゃん」

魔女然とした曾祖母が営む薬草店から外へ出て空を見上げる。空はいつも通り、零れた溜め息よりも濃い白色の霧で覆われていた。

【スマックの街】……霧すさぶこの巨大な街の人口は、2万とも3万とも言われている。

住民の多くはヒトやエルフ等の人間種で占められているが、道を歩けば獣人種や精霊などの超越種もパラパラと視界に入つてくる程度には人種のごつた煮になつていて。

そうなると自然、様々な出来事や衝突が起ころるものだ。

ここは決して治安の良い街ではない。よその街と同様、殺人事件の話が耳に入らない月はないし、詐欺や窃盗、誘拐や暴行なども起きる街だ。

そういえば半年ほど前から、夜な夜な窃盗を繰り返す泥棒猫の噂が定期的に耳に入つてくる。まだ捕まつていなか。それとも別の泥棒の話なのか。

泥棒猫か……。単なる比喩なのかもしそれないけれど、コソ泥の正体はやつぱり猫獣人の女の子なのだろうか。

猫獣人！獣人！ケモノミミ！それは女の子の可愛らしさを何倍にも引き上げてくれる神が作り出した奇跡の装飾物！

人間種がその効果にあやかろうとして作った偽ケモノミミのなんとみすぼらしい事か。……まあ、偽物であろうと、装着すればそれなりに魅力が上昇する事は否定しない。本物には遠く及ばないが。

件の泥棒猫は、物語にててくる怪盗少女のようなりボンとフリルでひらひらの魔法のドレスを身にまとい、その身のこなしで警察隊を手玉をとつてているのだろうか。

年齢は、少女と呼ばれる事が相応しいくらいの10～12歳。髪の色は明るめで、長さはちよつと短めなミディアムくらいがいいだろうか。

身長は低め・おっぱいのふくらみは歳相応に。肉付きはガリガリでなく、それなりにある方が健康的で好みだ。掴めば指がしつとり沈み込む程度には欲しい。

打てば響く聖鈴のように、指を這わされた先から嬌声を漏らす肉体の感度。もつときもちよくして欲しそうに仔猫のような大きな瞳をうるわせておねだりしてくる愛らしさ。

それでいてしつかりと「メス」の本能は全開させ、「あかちゃんのおねだり」ができるくらいのえつちさが……。

——ツ

欲望含有率240%の妄想は、冷たい夜風によつて引っ込められてしまつた。

少しでも体温を奪われないようにコートの襟を立てる。これから本格的な冬が訪れるのかという思いが、疲れて重くなつた足の進みを更に重くする。

はあ、と、白く靄けたため息を漏らしながら家路を急ぐ。

昼とは打つて変わつて雪の心配をするほど寒さが深くなつたきたころ、ようやく我が家に到着した。

解錠し、ドアを開けると違和感に気付く。

室内から外気と変わらない冷たい風が吹いてきたからだ。

『あれ？ ひよつとして窓を開けっぱなしにしてたのかな』

それとも――

『泥棒？』

スツと血の気が引く想像が頭の中に浮かんだのと同じくして、薄暗い部屋の奥で寝つ転がつて いる「モノ」の存在に気付く。あれは……。

『女の子だ……。しかも、猫獣人の』

## 02 ネコミミ少女に手を出しました

再び眠りについたネコミミ少女を抱きかかえると、改めて驚かされた。

その身体は思つたよりも小さくて、わきの下に手を入れて抱っこをすると両手の中指・薬指同士がくつつきそうな程で、身長は130cmあるかないか。体重は30kgあるかないかだ。

どちらも正確なところは測つてみないと分からぬが、この地下室へ連れて来るのにまるで難にならなかつた。

ぴちやぴちやと水音を立てて眠り姫の舌を舌で弄びながら、ブラウスのボタンを外してゆく。

開いた胸元から覗くのは歳相応なジュニアブラ…ではなく、パステルカラーのストライプがうつすら入つたキャミソールだつた。女児が肌着として着ける可愛らしいアレだ。

がつかりなどしない。むしろこの体形で妖艶なブラジャーナどが出てきたら、それこそ世界を相手に戦う覚悟が僕にはある。

キャミソールと少女の柔肌の間に指を入れ、裾を上にずらしてゆき、胸のふくらみとその頭頂部を顕わにする。途中脇腹に指が触れた際に、眠り姫は愛らしく体をピクッと動かしたが、くすぐつたかったのかもしれない。

キャミソールをまくり上げると、肌の色とあまり変わらない二つの幼い乳首を、指の腹で優しく軽くなでてあげる。

しかしスリスリと指を動かしても反応はない。ねつとりと舌で舐め上げても、吸いついたり唇や歯で甘く挟んであげても少女は反応しなかつた。

意識のない状態では、接触刺激のみで性的興奮を十全に高められるほど、この仔の性感回路は発達していないのだろう。

——ただし彼女の乳首が与えられた刺激に対しても反応はない。生懸命な反応を示した事実に僕は非常に強い興奮を覚えた——  
……であれば、刺激を与えたい部位はおのずと限られてくる。

スカートの前面をほんの少しあげると、少女の秘部をおへその辺り

まで覆い隠す白い厚手のモコモコぱんつが目を引く。赤いリボン紐のワンポイントがぱんつを飾り立てている。

少女の下腹部に鼻先を押し当て、ぱんつに含まれた少女の香りを楽しませてもらう。

汗と猫獣人としての獣臭、そして期待通りの……おしつこの匂い。やはりというか当然というか、元気よくおしつこをするけれど、きちんと拭かずにぱんつを履いてしまう姿が目に浮かぶ。厚手の生地でできているが故か、外側に汚れは見えないが、内側のクロツチ部分に「染み」が出来ていると予想するのは難くない。

その想像上の「染み」がどんなものかという好奇心を覚えながら、ぱんつが裏返るようにゆっくりと腰の部分からモコモコぱんつを下げてゆく。

おへそから下腹部が、そしてに少女の秘部が顕わになり、ぱんつが最後までめくれ、想像上の存在であつたクロツチ部の「染み」の形が確定する。

ぱんつは足をM字に開かせるのに少々邪魔となるので全て脱がし、クロツチ部分がよく見えるよう、少女の傍らに置いておく。

お尻の割れ目からおなかの方にまつすぐ延びる一本の「われめ」と、まるで赤ちゃんのほっぺのように柔らかい、おまたの「ふにふに」の感触を指先で楽しむ。柔らかさと弾力の感触が気持ちがいい。

足を開かせ両の親指で「われめ」を優しく開いた瞬間、少女の腰がびくっと跳ねた。普段はぴつたりと閉じて外気に触れない分、空気につれるだけで反応が出てしまうほど刺激に対しても敏感なのだろう。すこし意地悪をしたくなつたので、優しくふううつと長めに息を吹きかけてあげると

、息が当たつている間、先程と同様に腰を引きつかせて刺激を味わっているようだつた。

次は、たっぷりと時間をかけてキスをしてあげよう。「ふにふに」ちゃんに。

家に帰つてきたら部屋の奥で女の子がうつ伏せ氣味に倒れていた。

短めのスカートと、そこから覗く厚手のぱんつと太ももが彼女の性別を物語っている。あいや、ついているかの確認をしていない以上、男の娘という可能性もくはないが、それは無視しても良いレベルだろう。そのはずだ。お願ひします。

家の天井に開いた穴から降り注ぐ月光が横たわる少女を照らす様はとても神秘的だった。

朝に穴は開いていなかつた事から恐らく、運悪く脆くなつた部分をあの少女が踏み抜いてしまつたのだろう。少女の周囲には、屋根の構成材料と思しき木片や土くれが散乱している。

当たりどころが悪ければヒトを死に至らしめるに十分な高さから落下したものこの少女は、少々の怪我だけで命に別状は無いようだ。グルグルうずまいている目と頭部付近で舞い踊つている星々、そしてピヨピヨという効果音から生存している事が推察できる。

少女は白が眩しいフリル付きのブラウスとスカート、紺のベストと短めのブーツ、薄目のピンク色をした愛らしい大き目のリボンとう、まさに物語に登場する魔法少女のようないでたちをしていた。

そして重要な部分はここだ。頭頂部から飛び出ている、頭髪と同じ淡い青色をしたケモノミミとお尻から垂れ下がつている長細いふわふわのしつぽの形状からして、十中八九、彼女は猫の獣人であろう。この仔は最近噂になつてゐる泥棒猫ちゃんで間違いない……！それを理解した瞬間、心臓が高鳴つた。そして同時に、人生で最も速く頭を回転させた瞬間だつた。

少女の介抱などそつちのけで、部屋の奥から目的のアイテムを選別し調達する。今は時間が敵だ。

おもちゃ箱をひっくり返したような騒音を立てたからか、それとも単なる偶然か。少女が目を覚ましたようだ。

「んん～～～……いたあい……」

思いの外可愛らしい声に驚いて一瞬手を止めてしまつたが、それを

無視して手を動かす。

「……、どこお……？」

少女が上体を起こし、現状を把握しつつある。

——急げ、急げ、急げ——

準備が整い振り返ると、不安から眉根を寄せた少女と目が合う。  
「……おじさん……だあれ……？」

——間に合つ……た！

この仔は多分、現在世間を騒がせている泥棒猫ちゃんだ。

屋根から落下した際に足を痛めた彼女を放つておいたら、まず間違  
いなく警察隊に捕縛されてしまうだろう。

少女をこの家で匿い、優しく介抱してあげた場合は、良くて感謝さ  
れるだけでその後は音信不通。最悪の場合、顔を見られた事の口封じ  
で殺されるかのどっちかだ。

僕がこのネコミミ少女を文字通り「手に入れる」好機に巡り合えた  
のは、まさに千載一遇だつた。残りの人生で、こんな好機は二度と訪  
れないだろう。

少女の発見から目覚めるまでの短い間に麻酔薬を調合し、それを嗅  
がせて少女から意識を奪つたのは、大正解だつたと自負している。

少女に使用した麻酔薬の調合に必要だつた【魔翠草】が手元にあつ  
たのは単なる偶然だつた。

この【魔睡草】は、ポカポカ温まる入浴剤の材料でもあつたため、急  
に冷えてきた最近の寒さ対策として曾祖母からもらつてきたのは全  
くの偶然であつた。

もう一つの幸運——薬品調剤師を生業としている僕の家は、調合  
した薬品とその材料を保存するために地下室が拵えてある。僕の家  
の中で少女を捕まえられた事。誰の目にも止まらずにひつそりと地  
下室での飼育が出来る。

さらにもう一つの重なつた幸運。

時期的にそろそろ降雪期に移行する。降雪期になれば当然人通り

は少なくなる。僕が一日中家に引き籠つて少女の調教に耽っていたとしても、誰も怪しまないだろう。

そして更に、降雪期が終わりに近付くと、獣人種の多くがそうであるように、猫獣人も【発情期】を迎える。

上手い事、降雪期の間に性調教を終わらせられれば、少女が自ら望んで仔を孕むよう仕向けられるだろう。

この眠り姫のおさない口から、いやらしい子種のおねだりが聞けるかと思うと、勃起が治まらない。

どんな仔を孕んでくれるだろう。今から楽しみだ。

### 03 ネコミミ少女を汚しました

ぱんつを脱がせても、女の子の体にはまだ秘密にされている場所がある。

それはぷにぷにの、おまたのお肉が寄り合わさつて作られた「われめ」の中。

眠っている少女のおまたを開かせて、ふにふにとしたふとももの間に顔をうずめると、おさなさの香りがふわり、と僕の鼻腔をくすぐった。そして両の頬に触れるさらさらしつとりとした内またの感触……。触れているだけで気持ちがいい。ああ、ずっとこうしていたい……。

眠り姫のぷにぷにに軽く口づけをした後、指を押し当て、おしりから続く一本すじの末端を優しく左右に開いてあげると、なんとも愛らしい彼女の最後の秘部が顯わになる。

主張の控えめな小さな「おまめさん」と「ぴらぴら」と「おしつこの穴」……。「あかちゃんのおへや」に通じる「いりぐち」……は、ぴつちりと閉じられている。

少女の寝顔とクロツチ部分を交互に鑑賞できるよう、彼女の傍らに置いたモコモコぱんつにできた汚れの原因。眠り姫が幼さから犯してしまった失敗を清拭してあげなくては。おしつこの残滓が感じられなくなるまで、舌を這わせ、丹念に入念に、ねつとりとやさしく清めてあげなくては。どろりとした獸欲を含んだ使命感に突き動かされる。

舌を這わせると、独特な風味が直接舌に伝わってきた。

待ち望んでいた味と香りを愉しむと、まるで酒に酔つたかのように頭の中がくらくらする。

たつぶりと貪り、味わう。無理やりに、薬品で眠らせた、なんの抵抗もできない少女の——

身体を。おさなさを。恥部を。いとおしさを。寝顔を。やわらかさを。性器を。はかなさを。尊厳を——

少女の股ぐらに下品にも頭を突つ込み、鼻を鳴らしながら舌を伸ば

すその姿はきっと、腹をすかせてエサにがつつく野良犬のそれだつたろう。

キスをされても目は覚めず、無反応だつた眠り姫は、おまたに這う舌を動かされると、ぴくつと身体をヒクつかせ、その度に「寝息」を漏らすという反応を示し始めた。

ぴちやぴちや

「ふ……つ ♡」 ぴくつ

ぬちゅぬちゅ

「あ……つ ♡」 ぴくんつ

くちよくちよ

「ん……つ ♡」 ぴくぴくつ

寝息は意味を持たないが、寝息が立つた理由は理解できる。

さつきまでさらさらとした触感だつた肌が汗ばんできた。少女の体温が高まつてきているのが感じられる。心なしか息が浅く荒くなつた。

僕の舌に伝わる少女の性器周辺の収縮する動きも激しくなつてき  
た。

嗜虐心がムクリと沸き上がる。

もはや味も香りも消失して久しいおしつこの穴への刺激を切り上げ、すぐ上にあるおまめさんに吸い付き甘噛みしてあげると――  
「んにゃあああつ ♡ ♡ ♡」

途端ガクンツと――少女が一層強い反応を見せた。

ギュツと僕の頭をふとももで締め付け、ベッドから浮き上がるほどに身体を反らしながら可愛らしい声を発した。

少女の腰が落ち、這わせていた舌から、火照った性器が水糸を引きながら離れてゆく。

――まずい――

少女は腰をヒクつかせ、ベッドのシーツや枕を掴み、息を荒げなが  
ら

――せつかく捕まえたのに――  
ぼんやりと僕の方を見ていた。

逃げられてしまう――

僕の方が速かつた。

寝起き間もない少女の身体を、大人腕力全開で組み伏せ、さきほど薬品を染み込ませた布を少女の鼻と口に押し当てる。

ん？！んん！～！？

あばれるあばれる。獣人つて仔でも、こんなにチカラが強いのか。

猫獣人に限らず、獣人種というのは基本的に僕ら人間種よりも身体能力が高い。

幼く見えようと、この仔が本気を出したのなら——足を負傷して  
いたとしても——僕一人から逃げ切るなんてのは容易だろう。

アツと少女からの抵抗が止む

僕の押しのけようとしていた両腕からチカラが抜け、蕩けた目は虚空を見つめ、半開きになつた口からは涎が垂れている。

首を支えるチガテすら失ってたようで、カクンと落ちそうになつた彼女の頭を、慌てて手で支えてあげる。その姿はまるで、生後間もないあかちゃんのようだつた。

僕の荒ぶつた呼吸音と  
バクバクと激しく脈打つ心臓の鼓動音だけ  
しか耳に入らない。

危なかつた。まさか目を覚ますとは。ちよつと調子に乗つて遊び過ぎたようだ。とつとと目的を果たしてしまおう。

がタラタラと漏れ出ていた。

チカラなく放り出された少女の足の間に割つて入り、そそり立つ才トナ性器を眠り姫のおさな性器にキスをさせる。が

問題発生だ。

少女のおまんこは確かに、僕の唾液と彼女自身のトロみによつて表

層は濡れていたが、オトナ性器の挿入を許せるほど整った状態ではなかった。無理に入れても互いの為にはならないだろう。少女監禁生活の翌日から行動不能になつてしまつたら、せつかく膨らんだワクワクもしほんでしまう。

沿うように横になり、少女の左のおててに、自身の亀頭部分を握らせる。もちろん眠りに落ちている彼女が握り続けていられるわけではないので、ちいさなおてての上から僕自身が握りこみ、チンポを扱く。手コキの疑似的な再現だ。

握つても亀頭の全てを包み隠せない程のちいさくて可愛いおててが一生懸命扱いてくれる様は感動なのだ。

彼女のやわらかなおててが大量のカウパー汁にまみれて、僕の敏感な亀頭を扱くたびに、くちゅつくちゅつという水音を立てる。普段一人でしているオナニーでは、まず耳にしない効果音だ。

チンポを扱く運動が彼女に伝わり、かくんかくんと、あかちゃんのようにならいてしまう頭を僕の左腕で支えてあげる。

顔が近い。

握らせている最中の亀頭から伝わる、やわらかおてて以上にやわらかい彼女の半開きのくちびるを、再びたっぷりと味わわせてもらう。性感帯である口唇と性器への刺激。くちびるからも性器からも発せられる、くちゅくちゅという水音が僕の興奮を更に高め――

――もう射精るツ――

『んんんっ！』

ちいさなおててとやわらかなおなかで挟ませ限界を迎えたオトナ性器から、びゆるるつびゆるるつと緩急をつけながら放出された精液が少女を汚してゆく。

……腰が抜けるような快感がなかなか収まらず、少々面食らつた。こんなにも長く、大量の精液を出したのは初めてだった。

呼吸をするのも忘れるほどの快感から解放され、肩での息を再開する。

眠り姫の腹部が、おへそが見えなくなるほどに欲望粘液でデコレートされている。一部は胸部を超えて、首筋にまで届いていた。

溜りに溜まつた精液を放出したことで、ほんの少し頭が冷えたが、行為をやめるつもりは無い。

少女の片足を抱えて股を開かせ、腹部にまき散らした精液を掬い取り、少女のおさな性器に塗りたくる。

性器への直接的な刺激に、意識のない少女の身体がびくんと跳ねる。その都度、少女の膣口が収縮して閉じてしまうので、少し怖いが药品を嗅がせてさらに意識を封じ込める。

奏功し、膣も弛緩して収縮する頻度と強度が減った。

ちいさく狭い少女の膣に指の先端が入る様になつた。だがまだ足りない。

膣へ多くの精液ローションを送り込めるように少女の上体を起こし、腹部に溜まつた精液を股間へと垂らさせる。膣口マッサージをしている指を伝つて、抜き差しされる度にだんだんと、指が精液が、少女の膣奥へと吸い込まれてゆく。

……  
……  
……

仰向けに寝かせた少女の足を持ち上げ、身体を半分に折り曲げると、とろとろになつた眠り姫のかわいいおさな性器が顯わになる。

もう、結ばれてもいい頃だろう。

すう……すう……という少女の穏やかな寝息が地下室に響きわたらる。

慎ましやかなちいさい膣口に、暴力的なまでに膨れ上がつたオトナ性器の先端を宛がい、ゆっくりと腰を落とす。

入る——入つていく——

药品で意識を奪つた事の弊害か、愛液の分泌が期待できなかつたため、自らの精液を潤滑液にしたのは正解だつた。

眠り姫のおまんこはとても狭い。ゆっくりでしかチンポを侵入させられないが、侵入が進むごとにほんの少し、きゅっと膣を締め付けてくるのだ。その反応がとても愛らしい。

暫くして——少女の最奥に到達した。

オトナ性器は半分ほど収まつていないが、それで良い。挿入できたことに感謝すべきだろう。

そして、これで終わりではない。

ここから先も、意識のない少女の身体を堪能させてもらおう。

腰を動かし、擦り合わせた互いの性器同士が生み出す甘い快楽を享受し合う。

チカラのない腕を取り、やわらかな指に指を絡ませ手をつなぐ。

半開きになつたやわらかなくちびると、その奥のちいさな舌に舌を絡ませ少女の味を愉しむ。

少女の狭いおまんこに愛されたオトナ性器に、すぐに限界が訪れたが、訪れたからなんだというのか。

一瞬だろうと躊躇はしない。

挿入前から少女の膣内は僕の精液に塗れている。何を躊躇う事があるのか。

『——ツ！』

呼吸が止まる。

いわゆる種付けプレスと呼ばれる体位で、眠り姫膣内へ、腰を密着させての無許可射精。

僕のオトナ性器をぴつたりと咥え込む少女のおさな性器内での射精。

先程の腹部へまき散らした時以上の量と勢いを持った射精——。

放出された精液は他に逃げる場所を持たず、少女の最奥の最奥——あかちゃんのおへやへと流し込まれていった。

長い長い射精を終え、僕はまた腰を動かす。まだまだ足らない。こんななんじや全然射精し足りない。この仔の身体を愉しみ尽くしてやる。

明日は——いや、もう日付は変わつた頃か。今日は臨時休業にして、これから準備に充てよう……。

この仔を拘束する道具や抵抗力を奪う薬品の準備とか……。

僕が眠る少女に腰を打ち付け、限界が来たら膣内での射精を繰り返

しながら、これからのことばんやり考えていた頃、将来宿る仔の半分の遺伝子情報をもつ物質で満たされてゆく少女の子宮は、少女の意志に反して喜びを見出だしていた。

「時が来た」と――

## 04 ネコミミ少女が懐いてきました

「んつ ♡ んつ ♡」

ちゅぱちゅぱつ ♡ と鳴る水音と少女の荒い呼吸音を部屋に響かせ、腫れあがつたオトナちんちんに一生懸命お口でご奉仕をしてくる。

「おじさんつ ♡ おちんちん、きもちいーい？」

『うん、とっても気持ちいいよ。ありがとう』

お礼を言うのと共に彼女の頭をなでると、嬉しそうに目を細めながらも舌を伸ばして奉仕を取りやめない。

椅子に座る僕の股に顔を突っ込んで、おしゃぶりに夢中になつているこの仔猫ちゃんは、最近世間を騒がせていた怪盗——猫獣人の雌の仔だ。

お口でのご奉仕とは言つたが、これに堂々とフェラチオだと言える程のテクニックは無い。

程よいチカラ加減でチンポを握り、上下に扱くなんて事は無く、ただやわらかな両手で根元をやさしく包み持つてくれるだけ。

口に咥えて頭を上下させ、上顎と舌を駆使してチンポに刺激を与えてくるなんて事はなく、ちいさな舌で先端をペロペロと舐めたり、竿部分にキスをしてくるだけ。

喉の奥深くにまで飲み込んで刺激を与えてくるでもなく、あかちやんが大好きなおもちやにするように、口に含んでちゅつちゅつと吸いついてくる程度でしかない。

この程度の刺激強度では到底射精にまで届かない。しかし――

『出すよつ』

彼女が持つ健気さと愛らしさが、僕の性感を底上げしてくれるのだ

――  
僕の声を聴くや否や、仔猫ちゃんが亀頭の先端へ吸い付いてきた。射精の開始から終了まで口で離さない猫獣人の少女。その間、少女の瞳は僕の目をまつすぐ捕らえている。じょうずにご奉仕できていたか、健気にも僕の表情から読み取ろうとしているのだろう。

この光景は、母乳をあげながら互いを目を見つめ合う母子のそれと

酷似していた。

めまいがする——この少女が、可愛く思えて仕方ない。

あり得ない程の、この少女に対する愛情で胸がいっぱいになる。

僕は男であるが、子に乳をあげる母の心境とは、こういうもののなのだろうと思えた。

また少女も、吸い付いた亀頭から、あごを使って精液吸い出そうとしていく。

それもやはり、母乳を吸い出す時の子の、あごの動きに他ならない。口内に侵入してきた精液をこくんこくんと飲みほすと、亀頭への長いキスが終わりを迎えるも、オトナちゃんちんに頬ずりをしながら、えへへーと、はにかんだ笑顔を見てくれた。

仔猫ちゃんがくすぐつたそうに笑っている。期待しているのだ。ご奉仕をちゃんと出来たことへのご褒美を。

両のわきの下に手を入れて少女を持ち上げると、少女のおまんこが目に入った。彼女は現在、下着を履いていない。

僕の膝の上に包帯を巻かれた足を置き、おまたを開いて位置を調整している。

なんの調整か。もちろん、先ほどまでご奉仕をしていたおちんちんと、自身のおまんこの位置の、だ。

ところどころに蕩けた仔猫ちゃんのおまんこに、ゆっくりと自前の獣槍を侵入させる。

にゅっふ……っ

「ふあつ♥ふあああ〜〜〜♥♥♥」

ぬるぬると自身のおまんこに侵入してくるオトナちゃんちんの感触を味わいながら、少女が口から甘い喘ぎ声を上げる。

腰を落とし、オトナちゃんちんがあかちゃんのおへやに到達したのを確認すると、少女は手と足を僕の身体に回してギュッと抱きついてきた。対面座位と呼ばれる体位に近い恰好だ。

少女が「はあ……♥」と、気持ちよさそうな溜め息を漏らす。膣全体でオトナちゃんちんに抱きつき、その熱とカタチを堪能しているのだろう。その姿が愛らしくて、彼女の背中と頭をなでなでしてあげる。

落ち着いてきたころに腰を動かして刺激を与えてあげると――

くちゅちゅつ

「やつ♥やああつ♥」

ねつとりとおちんちんの感触を愉しんでいたところに、急激な快感を与えて、反射的におまんこを締め付ける仔猫ちゃん。その締まつたおまんこの中をオトナちゃんに行き来されて、更なる快感に襲われる。

僕の股間と彼女のおしりがぶつかり合う音が部屋に響き渡る。それに合わせて、仔猫ちゃんの甘えた声が、僕の耳朶を痺れさせる。ぬちゅつ♥ぐちゅつ♥じゅぷつ♥ぶちゅつ

「んあつ♥あつ♥やあつ♥やああつ♥」

この仔の処女を奪つて今日で5日目。その間に何度も少女のおまんこを愉しませてもらつて来たが、その中で分かつことがある。

じゅぷつ♥じゅぷつ♥じゅぷつ♥じゅぷつ

「ふつ♥んつ♥んつ♥んつ♥んつ♥んつ♥」

彼女はアクメを迎えること――

じゅぷつ♥じゅぷつ♥じゅぷつ♥じゅぷつ

「あつ♥んつ♥んつ♥んつ♥ぱぱつ♥ぱぱあつ♥」

先程までは僕の事をおじさん呼びしていたのに、アクメを迎えることになると、僕の事を【パパ呼び】してくるのだ。

じゅぷつ♥じゅぷつ♥じゅぷつ♥じゅぷつ

「ぱぱつ♥ぱぱあつ♥いくつ♥いくうつ♥ミイちゃん、イツちゃんうううつ♥」

『うんつパパも、パパもイクねつ♥ミイちゃんと一緒に……いくつ♥』

この瞬間だけは僕も彼女の父親になりきつて、膣内に収まつたオトナちんちんから獣液を放出する――

びゆるつびゆるびゆるうつ○

「んあつ♥♥んあああああああああ――ツ♥♥♥」

♥びくびくびくんつ♥びくんつ♥♥♥

あかちゃんのおへやに注がれた熱に反応し、少女は絶頂を迎えるのだが、そのあとが面白い。

アクメ後の余韻を味わっている時、彼女は指しやぶりを始めるのだ。

ちゅつ ♡ ちゅつ ♡ ちゅつ ♡ ……

「ふーつ ♡ ふーつ ♡ ふーつ ♡ ……」

その姿が愛らしくて暫く眺めているのだが、ここでもまた、イジワルをしたくなってしまう。

彼女の腕を引っ張り、無理やりに指しやぶりをやめさせる。

すると彼女は「いやあ～」という不満げな声を挙げるのだが、キスをして口腔内に舌を入れてあげると、僕の舌を指の代わりにしやぶり出すのだ。

このまま彼女が気絶するまで徹底的に犯しぬいてやりたい衝動に駆られるが、今日はこのあと予定がある。二回戦まででやめておこう。

……

さて、紹介が遅れてしまつたが、あの少女の名はミイちゃんと言う。猫獣人の雌の仔という、個人的な性的嗜好にドストライクな少女が僕の家の中で氣絶していたのをこれ幸いと、自ら調合した眠り薬を駆使し、地下室への監禁と強姦に成功した。のだが……。

ミイちゃんとまぐわつたここは地上階のリビングで、現在ミイちゃんには行動を阻害する装具や、物理的・魔法的な精神支配も施していない。

監禁初日から3日目までは、地下室にて睡眠薬を用いて眠らせた後一方的な行為に及んでいた。

すうすうと寝息を立てる少女の寝顔をオカズにして、数十発膣内射精したものだ。

しかし監禁4日目、転機が訪れた。なんと、少女の方から僕を求めてきたのだ。

睡眠薬を使わない、お互いがお互いを求める情熱的なセックス。最高だった。互いの体液にまみれたまま力尽きて眠ってしまい、5日目、つまり今日を迎えたわけなのだが……。  
なぜこうなったのか、さっぱりわからない。

## 05 ネコミミ少女が求めてきました

『それじゃあ、おやすみ、ミイちゃん』

ベッドに入り添い寝をしながら仔猫ちゃんを寝かしつけようとしたのだが、ちいさな猫獣人の雌の仔からの返事が無い。どうしたのか気になつて顔を覗き見ると……。

「ねえ、おじさん……ミイちゃんね……」

頬を赤らめながらモジモジと、抱いているクマのぬいぐるみに顔を半分埋めているネコミミ少女がそこにいた。

「おしつこしちやつたの……」

え……?

「だからね？　おむつ　キレイキレイにして……♥」

……まさか、ミイちゃんの方から、おねだりされる日が来るとは……！

ネコミミ少女の監禁とは名ばかりの共同生活を始めてから5日目にさしかかろうかという頃、少女に革命的変化が起きた。

あんなに『おむつにおしつこ』する事を嫌がっていたミイちゃんが、今になつて僕におむつの交換を懇願してきたのだ。

一体何が彼女をそこまで変えたのか。彼女に何が起きたのか。

いやいや、今は原因を推測している場合じゃない。むしろ願つたり叶つたりじやないか。

今まででは薬で眠らせた彼女を一方的に弄び辱め、欲望で穢してきたのだが、今は違う。

現在の彼女は薬物の影響下には無い。彼女なりの純然たる明確な意志を持つて僕に訴えているのだ。

ゴクリと生睡を飲み、緊張で振るえる手を、ミイちゃんに着せたクリーム色をしたパジャマのズボンに伸ばす。ベッドに寝ているので脱がしづらいが、ゆつくりと下におろして脱がすと、前開きタイプの使い捨ておむつと少女のすべすべな両脚が顔を出す。

股の縦部分に青いラインが走り、たっぷりと膨らんでいる。おむつがミイちゃんのおしつこを吸い込んだ証拠だ。

荒れそうになる呼吸を整えながら、左右から締め付けるおなかのテープをペリペリと外し、次におむつを縦に開く。すると――

少女の可愛らしいおまたの割れ目が顕わとなり、次いで熱を持ったおしつこの匂いが、ふわり……と眼前に広がる。本当に、いまおしつこしましたという新鮮な……。

問題はここから。個人的には問答無用で2.を選びたいが、相手は僕より力持ちの獣人種だ。さて、正しい行動はどちらだろうか。

1. 己の獸欲を押し殺し、紳士的におむつを取り替えておやすみなさいをする。

2. 本能のまま獸欲を開放し、おむつ交換にかこつけて少女にイタズラをする。

少女のふとももをつかみ足を開かせ、少女が見ている前で、少女のおまたに顔を埋める。

(自分の心臓の鼓動がうるさいくらい耳に響く……)

「……あ……♥」

割れ目の終点にキスをすると、ミイちゃんの歓喜に振るえる声が僕の耳に届いた。

それを皮切りに、するりと舌を割れ目の間に伸ばす。もう遠慮はしなくて良い。ミイちゃん自身がこうされる事を望んでいる。

舌の腹から先端をミイちゃんの割れ目の間に抜き差しする。おしつこの穴をなぞると、監禁初日に堪能した味よりもだいぶ薄目のそれが、僕の鼻腔に広がつた。

ぬちゅ♥ぬるつ♥ぬぷつ♥

「んつ♥ふつ♥……つ♥」

気持ちよさから声が出てしまうのが恥ずかしいのか、一生懸命に身体をこわばらせて耐えている。両手で抱きしめられているクマのぬいぐるみが苦しそうだ。

おまたへ濃厚な愛撫を施しつつ、今度はパジャマの上着のボタンを外してゆく。

ミイちゃんの被服部分は背中と腕だけになり、あとは はだかん  
ぼさんになってしまった。

「んつ♥はあつ……♥ぱぱあ……つ♥パパあ……♥」

性器周りに与えられた快楽によつて朦朧としてきたのか、僕の事をおじさん呼びから【パパ呼び】になつた。幼年生徒が先生をそう呼び間違えるように。

寂しくなつたのか、おまたに顔を埋めている僕に右手を伸ばしてきた。彼女が小さくてのひらで、僕の左手の親指をきゅつと握りこむ。その手を残りの4本で優しく握り返しつつ、ちいさなおまめさんへのアプローチを繰り返すと――

「んつ♥んひつ♥♥あつ♥パパつ♥あつ♥あ―――つ♥♥♥」

ミイちゃんがビクンツ♥と身体をのけ反らせ、気持ちよさが最高潮に達した時、彼女のカワイイおまたから僕の口内に、しゅうつと、ひとくち分の液体が流れ込んできた。

少女からの、無味無臭のご褒美を有難く味わい、頂戴する。

オーガズムの余韻に浸つりながら親指しやぶりを始めた彼女に、ギ

ンギンにそりたつた僕の獣槍を見せつける。  
宙を漂つていたミイちゃんの視線が一点に定まった。オトナちゃんに釘付けだ。それはそうだろう。自分には無い器官だし、実際に見るのは初めてだろうから。

「ちんちん……」

ミイちゃんを、胡坐あぐらをかいだ股の間に座らせる。対面座位のようなカタチだが、挿入はしないので、自然、ガチガチに勃起したオトナちゃんちんが、僕とミイちゃんのおなかの間でそり立つてゐる。

すると興味津々なミイちゃん。指しやぶりを中断してオトナちゃんに両手を伸ばす。

彼女のちいさなてのひらは、亀頭部分を覆い隠すので精一杯の大きさだつた。

ふにふにとしたやわらかなおててで触られるだけで射精してしまふいそうになる。

『ねえミイちゃん、さつきおまたをペロペロされたり触られたりした

時、気持ち良かつた?』

「うん、きもちよかつた♥」

『おじさんもね、おちんちんをペロペロされたり触られると気持ちよくなるんだ。ミイちゃん、おじさんのおちんちん、触つてくれる?』

「うんつ♥いーよ♥」

屈託のない笑顔を浮かべ、少女のおへその位置より上にまで伸びるオトナちんちんを触つてくれた。亀頭部分をにぎにぎしてくる仕草が可愛い。

にぎにぎ さわさわ ごしごし むにゅむにゅ……

皆無といつていいく程のテクニックのなさ。しかし――

『ああ……♥ 気持ちイイよ、ミイちゃん……♥』

実際には、腰がカクつくほどの快感……♥

『ミイちゃんつ射精すよっ!』

僕に気持ち良くなつてほしいという彼女なりの精一杯の愛撫という健気さに心を打たれ、僕は昂り、射精してしまつた。

びゆるつ♥びゆるるるつ♥びゆるるつ♥びゆるううつ♥……

「わ!」

びゆつ♥びゆううううつ♥びゆるるるううう……♥びゆつ……

この仔の身体を使った射精は、自分でも驚くほどの量が出る。

ミイちゃんの胸やお腹、おまたまでもが、僕の漏らした精液でどちらに濡れてしまつた。

びつくりしたようで、ミイちゃんは未だ、射精して敏感になつている亀頭部分を両掌で握つてきた。それがまた気持ちイイ……♥

『ありがとう、ミイちゃん……♥ とつても気持ち良かつたよ♥』

「んつ♥ん♥」ちゅ♥ちゅつ♥

感謝の気持ちを込めて、少女にキスをする。

「おじさん、このしろいどろどろ なあに?」

『これはね、精液つていつて。おちんちんさんが気持ちよくしてくれてありがとう♥て お返事をだしてくれたんだ』

「ざー……?」

『うん♥精液♥ミイちゃんが上手におちんちんさんを気持ち良くしてくれたから、いつぱいでたんだよ♥』

「んぶつ♥んちゅ♥れろつ♥れろれろ♥」

……甘くて心地よいキス……。なにもしないでも、このキスだけでまた射精してしまいそうになる……。

ミイちゃんの身体にかかつた大量の精液が、重力に従つて下に垂れてゆく。

それを掬い取り、少女の閉じたおまんこに塗りたくる。

……これと似たような事を、監禁初日にやつたような気がする。あの時と違うのは、今回はお互い合意の上でというところだ。

ぬちゅつ♥ぐちゅつ♥ぷちゅつ♥ぬりゅつ♥にちゅつ♥

「ふあつ♥あつ♥あんつ♥」

先程いつた膣内を指とぬるぬるの精液で刺激されるたび、可愛い嬌声が上げる。

『これからね、おじさんのおちんちんさんを、ミイちゃんのおまんこに入れてあげるね♥』

「お、まん、こ？」くちゅ♥くちゅつ♥「あつ♥んつ♥」

『そう。いまおじさんの指が入つてる、ミイちゃんのおまたのココおまんこって言うんだよ♥触られると気持ちいいでしょ?』

くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ

「あつ♥あんつ♥うんつ♥おまんこきもちいい……♥」

『この気持ちいいところに、おじさんのおちんちんさんを入れると、今よりもっともつと気持ちよくなるよ♥ミイちゃんは、もつと気持ちよくなりたい?』

くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ

「うんつ♥もつ♥もつときもちよく♥んつ♥なりたい♥あつ♥」

『じゃあ、おじさんのおちんちんを、ミイちゃんのどこに入れて欲しいのか、ちゃんとおじさんに教えてくれる?』

くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ

「んつ♥んあつ♥あつ、あのねつ♥おつ♥おまんこつ♥みつ♥ミイ

ちゃんのつおまたのつ♥おまんこにつ♥んつ♥おちんちんつ♥おじ  
さんのおちんちんさんつ♥いれてつ♥ほつほしいつ♥ひんつ♥」

『上手におねだりできたね♥えらいよミイちゃん♥それじやあ、ミイ  
ちゃんのおまんこに、おじさんのおちんちんさん、入れてあげるね♥』  
くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥……

少女の膣口、膣、子宮口にまで精液をなじませ、濡らす。

愛撫もそこそこに、自分のおまたの部分が良く見えるよう、ミイ  
ちゃんの身体を半分に屈曲させ、ミイちゃん自身に足を抱えさせ、そ  
の上に覆いかぶさる。

『さあて、ミイちゃんのきもちいいところはどこかなう♥』

オトナちゃんちんを少女の性器周りにこすりつける。急に挿入した  
りはしない。彼女自身に、どこにおちんちんが入るのかを理解させる  
必要があるからだ。

「ここお♥」

焦らされた少女は自らおちんちんを掴み、本能で理解しているのだ  
ろう。自分のおまんこのいりぐち——気持ちいいところ——に  
誘導してくれた。

『それじゃあ、おじさんのおちんちん、ミイちゃんのおまんこに入れ  
ちゃうね♥』

「ふー……♥ふー……♥」じーつ……

(ふふふ、見てる見てる。ご要望にお応えして、おまんこに入る様子を  
じっくり観察できるように、たっぷりと時間をかけて挿入してあげる  
からね♥)

ぬ……る……つ♥ぬる……つ♥ぬ……るつ

「んつ……♥ふつ……♥んう……♥」ぴく♥ぴくつ

(初めて味わう、おまんこに入つてくる異物感に戸惑つてるなあ。でも  
ねミイちゃん。ミイちゃんがおじさんとセックスするのは、これが  
初めてじゃないんだよ♥もうミイちゃんのおまんこは、立派なおねえ

さんおまんこになつて、何回も何回もおじさんのオトナちゃんちんとセツクスしてきたんだよ♥眠つていて覚えていないだらうけど♥）にゅ……ふ……つ♥にゅふ♥にゅふふ……つ♥

少女のおまんこは、侵入しようとしてくる大きくて硬い異物を押し出そうと膣を締め付けてくるが、それを無視して膣肉をかきわけ、ようやく奥の子宮口に濃厚なご挨拶のキスができた。

膣内に亀頭が完全に収まつてから数センチで彼女の最奥に到着した。やはりオトナちゃんぽの全ては入らないか。先っぽだけでも十分気持ちイイから別にいいけど。

『ホラ、ミイちゃんの一番奥まで、おじさんのおちんちんが入つたよ♥』

「ふーつ♥ふーつ♥……うん……おちんちん、ミイちゃんのおまたに入つてるう……♥♥♥」

ミイちゃんは息を荒げ、その額には汗がにじんでいた。

相変わらず異物を押し出そうと締め付けてくるおさな膣から少し引き抜き、入り口に戻り、また抵抗を無視して膣内をかきわけてを何度も繰り返すたびに少女が美しい嬌声を奏でてくれる。

にゆるつ♥ぬ……るつ♥にゆるつ♥ぬ……るつ♥にゆるつ♥ぬ……るつ♥

「あつ♥んつ♥にやつ♥ああつ♥……♥」

この4日間、あらゆる凌辱を無反応無抵抗で受け止めていた眠り姫が、薬の抜けた今では、嫌がるどころか自ら腰を振つて、可愛い笑顔と信頼を僕に向けてくれている。

ぱちゅつ♥ぱちゅつ♥ぱちゅつ♥ぱちゅつ♥

「にやつ♥にやつ♥にやつ♥あつ♥あんつ♥パパつ♥パパあ♥」

ミイちゃんがまた、うわごとのように僕をパパと呼びだした。イキそうになるところなるのか。

少女のちいさな膣によつて愛され続けたことで限界が訪れる。排尿感にもにた強烈な射精欲によつて、膨張したチンポが熱くなる。

『ミイちゃん、いくよつ♥』

「イ、いく？」

『気持ちよくなるつて事つ  
♥』

未発達な小さい少女の身体を逃すまいと。全体重をかけてのしかかり、未成熟な膣を無理やりに広げ、その奥の、未だ発情期も迎えていない子宮に、成熟したオトナの精子を注ぎ込む。

ううつ  
♥…  
♥

びゆるつ  
♥ びゆるるつ  
♥ びゆうううつ  
♥ びゆるびゆるつ  
♥ ぶびゆ

A decorative vertical element on the right side of the page. It begins with a small black heart symbol at the top, followed by a vertical line with five solid black dots arranged vertically along its length.

少女が下腹部に流れ込んできた熱を感じ、絶頂を迎える。ビクンと背中をのけぞらせようとすると、それすらも抑え込み、開いた口をこちらの口で無理やり塞ぐ。

射精が止まらない。少女がまだ妊娠できない事などお構いなしに。これは調教だ。お前の子宮も卵巣も卵子でさえも、お前のものではなく、全て俺のモノなのだ。

お前が近い将来身籠る子種はこれだ。発情期を迎える、卵巢が排卵したその瞬間、俺の精子で卵子を犯してやるぞ。子宮に対する征服宣言。射精による、幼い子宮への最低な洗脳調教だ。

おきなう  
幼子の子宮にうす汚れた精液を流し込んでゆくたび、僕の中の獸欲が満たされてゆくのを感じる。

しかしあるだ。まだ射精したりない。

数十分にも感じられた長い長い射精を終え、再び少女の膣を蹂躪しようと身体を起こすと――

汗ばんだマイちゃんは穏やかな笑顔を浮かべ、僕の目をまつすぐ見ながらこう言つてくれた。

——おとーさん、すき！ ——  
と。

彼女はすっと、僕に両手を伸ばしてきた。僕は彼女の腕の間に、頭を埋めて目を閉じる。

ああ……彼女はきっと――

無理やりに監禁なんてしなくとも、隣で一緒に笑ってくれるだろ

う。——僕がそう望むなら。

薬なんて使わなくても、こころよく僕と身体を重ねてくれるだろう。

う。——僕がそう望むなら。

レイプなんてしなくとも、この仔は僕の仔供を宿してくれるだろう。

彼女はきっと、僕の全てを——欲望や穢れですら——受け入れ、<sup>ゆる</sup>淨化してくれるだろう。この穏やかな笑顔を浮かべて——。

——いとおしい——

僕はこの少女を、好きになってしまったようだ。

## 06 ネコミミ少女とお昼寝しました

ネコミミ少女監禁 2日目 午前2時ごろ

ネコミミ少女を監禁し、その幼い肢体<sup>からだ</sup>を欲望のままに穢す下卑<sup>げび</sup>た行為に耽つて数時間。いつの間にやら日付は変わつていたようだ。

この幼い少女の子宮に、一体何度精液を注ぎ込んだのか。10回か、それとも20回か。

回数の正確さに意味は無い。ようやく僕のオトナ棒もズボンのなかで大人しくしている。

未だ意識が戻らない少女から衣服を剥ぎ取る。精液まみれ……という程でもないが、まつたくの無傷というわけでもない。洗つてあげなくちゃ。

すっぽんぽんになつた彼女の身体<sup>せいしき</sup>を清拭する。精液に汚された跡が艶めかしい。

ふと、少女の性器から僕の精液がトロトロと漏れ出てくる光景を目にして。少し興奮したが、拭いても拭いても無くならない精液に、僕の頭の中が冷える。

なんだこれは無限に出てくるのかと思い始めた頃、これはイカント、ひとまずの応急処置として少女に、うちで取り扱つてる使い捨ておむつを履かせる。これで、溢れる精液の処理を後まわしにできるな。

少女の足を清めようとした時、右足首が少し腫れている事に気づいた。

見た感じ、骨折——は、していない。おそらく捻挫だろう。少女から痛みの有無などを聞かないとなんとも言えないが……。

冷えた井戸水で濡らした布巾を当てて患部を冷やす。そののち軟膏を塗つた湿布を貼り、包帯を巻いてあげる。こんなもんだろう。痛かつただろうに……。本来なら、この地下室に運んだ時にすぐ診てあげるべきだったのに、性欲に負けた自分を恥じる。

次に、情事に耽ったベッドのシーツを取り換える。

互いの体液だけでなく、血で随分と汚れていたからだ。

ま、順当に考えて少女の破瓜の血だろう。  
少女が僕のオトナ性器に膣を蹂躪されてもほとんど無反応だったのは、ひとえに嗅がせた薬品の鎮痛効果によるものだろう。  
彼女の意識に痛みが届かなかつたのは幸いだが、それでも傷を負わせてしまつたのは確かだ。

いくら好みの猫獣人の発情期未経験ぶにろり系の雌おんなの仔こだつたとは言え、彼女の意識を奪つて強姦に及んだ自らの罪の重さを測らずにはいられない。

いや、今更だな。

彼女の額にかかる髪の毛を払う。

改めて思うが、この仔はホントに可愛い。きっと将来は美人さんになるだろう。

おつといかんいかん。射精疲れで一息入れたいのは山々だが、またたりしている暇はないぞ。行動に移さねば……。

……  
……  
……  
……

……

ネコミミ少女監禁 2日目・昼すぎ

ここはどこだろう。ミイちゃんがいまいる このおへやは なんだかくらい。

おめめのちからをぬいて、くらいおへやをあかるく みる。

きよろきよろしてまわりをみて、ミアちゃんがいなからちよつとこわくなつてきた。

なんだか からだがだるくておもい。それと、なんだか おまたがズキズキする。あと、おなかもへつてるし おみずがのみたいしおしつこしたい。

このおへやは なんだかさむい。おふとんはあるけど、いまのミイ

ちゃんは はだかんぼさんだつた。

あ、も「もこしたぱんつをはいてる。ちがう、これは ぱんつじや  
なくて おむつだ。

「んつ」

あしがズキつて した。いたい。みぎあしに ほうたいがまいてあ  
る。いつ けがをしたのかな。

ミイちゃんはきのう、どうぼうをして いぬのおまわりさんたちか  
ら にげるために、やねのうえをぴょんぴょんとんでいて…… でも  
そこからやさしがおもいだせない。  
うーん。

とおくから こつんこつんつて いう、ひとのあしおどが キンこえて  
きた。

あのかいだんのうえから おどがきこえてくる。

おとといつしよに、おいしそうなにおいも ちがづいてくる。

こつんこつん。

あしがみえた。

だれかが かいだんをおりてくる。

こつんこつん。

おとなのおとこのひとだ。

おぼんをもつてる。おいしそうなおいは ダはんのにおいかな。  
こつん

おじさんがあるくのをやめてこつちをみた。

おとがしなくなつて、しづかすぎて、おみみがいたい。  
しーーーん……

「あの」

ミイちゃんが しつもんをしようとしたら、おじさんがひとさしゆ  
びを じぶんのくちにあてた。

ミイちゃんもそれをまねして、ひとさしゆびを おくちにあてる。  
するとおじさんは につこりわらつて はなしかけてきた。  
このおじさんは やさしそう。

『こんにちは、どうばうね、こさん』

このおじさんは、みいちゃんのしようたいをしつていたから  
びつくりした。

おじさんは、どうしてミイちゃんが  
ここにいるのかをおしえてくれ  
れた。

ミイちゃんは、このおうちのやねをこわして、したにおちちやつて、  
それだけがをして、おじさんが てあてをしてくれて、ここでねかせ  
てくれたみたい。

それでミイちゃんは どうぼうだから、おまわりさんにつかまらな  
いように、ミイちゃんのことを ひみつにしてくれるんだって！  
あしにけがをしたから、いまおまわりさんがきたら ミイちゃんは  
たぶんつかまっちゃうから、ひみつにしてくれるのは うれしいな。  
このおじさんが いいひとでよかつた。

思つた以上に監禁拘束用の首輪や手枷等々の用意に時間がかかつたので、少女の寝顔をオカズに遅い昼飯を食べようと地下室に戻つてみると、とんでもない事になつていた。

そして目が合う。

僕と少女の距離は5メートルはあるだろうか

兽人と僕の身体能力には、まさに雲泥の差がある。こんなに距離が離れていては、無理やり薬品を嗅がせて気絶させる事なんて不可能

考えろ考えろ考えろ考えろ！頭をフル回転させて、この危機を乗り

「あの」

少女の「ウソ」が矢張り口を開いた  
まだ答えが固まつていないうちに会話を始められたらボロを出し

てしまう！

強制的に会話を終了させるため、少し大げさに、人差し指を口にあてて「静かにしようね」のジエスチャーをする。

功を奏したようで、少女も少し間を空けてから僕と同じジエスチャーをした。

こちらの焦りを気取られないよう、表情に薄つすら笑みを張り付けながら、少女に語り掛ける。

『ここにちは、泥棒猫さん』

僕は――善人を気取る事にした。

シナリオはこうだ。

警察隊から追われていた少女は、逃げる途中、天井に開いた穴から落ちて怪我をして、今まで氣を失っていた。その家の主(僕のこと)が怪我の治療をしてくれて、外の警官隊から少女を匿つてあげていた。コスチュームは泥だらけだつたので現在お洗濯中。

完璧じやない？　ねえ、これ完璧じやない？

少女は「はー……」と溜め息を漏らしながら僕のデマカセを聞いていた。

目をキラキラ輝かせていたから、多分信じ切っているはず。

「でも、なんでミイちゃんは、いま、おむつをつけてるの？　ミイちゃんはもうおねえさんだから、おねしょしないよ？」

へえ、お嬢ちゃんはミイちゃんって言うんだ。

昨晩ミイちゃんの子宮に注ぎ込んだ精液が、拭いても拭いてもあふれてきたからだよ♥　なーんて言えるわけがない。どうしようどうしようどうしよう。

『ミイちゃんがいつ目覚めるか分からなかつたから、おむつをつけてもらつたんだ』

僕グツジョブ！

ミイちゃんは、分かつたような分かつて無いような表情をしている。

「でもミイちゃんはもう　おねえさんだから、おトイレでおしつこする！」

なんでお怒りのご様子のミイちゃん。ほほはだかんばなのを恥じ入るそぶりもみせず、ベッドから飛び降りる。

「わあっ！」

ずてん。勢いよく着地した事で、捻挫した足に激痛が走ったのだろう。その場に尻もちをついて座り込んだ。

「あっ……あっ、あああああ！」

悲しそうな声をあげて泣き出してしまった。そんなに痛かつたのか、それとも怪我が悪化したのか？ と心配になつて少女に駆け寄ると……。

しゅわああああ……という音を背景に、おまたの部分に、おしつこが出たことを示す青いラインが浮かび上がってきた。

一瞬、空気が凍る。

少女は痛みに涙を流したのではないことは分かった。おしつこをおもらしした事がショックだったのだ。しかも己には不要と断じたおむつに救われたことで、どうしようもなく泣けてきたのだろう。えつゝえつゝとぐずる少女を抱っこして、地上へ向かう。ひとまずおむつを取り替えてあげよう。

少女の尊厳を傷つける可能性があるため、おもらししたことには軽々しく触れるのは止めようと思った。

「あっ……あっ、ああああ！」

ベッドからとびおりたら、あしがズキンツつていたくなつて、たてなくなつた。

ころんでおしりから、おちたら、おしつこをおもらししちやつた。とめようとおもつても、おしつこがとめられなくて、はいているおむつのなかに、いっぱいおもらしをしちやつた。

はずかしい。あかちゃんみたい。いやだな。ミイちゃんは、もうおねえさんなのに。

かなしくなつて、なみだがポロポロでてきて、ないてしまつたら、おじさんがミイちゃんをもちあげて、だつこをしてくれた。

おじさんはミイちゃんをだっこしたまま、かいだんをとんとんのぼつて うえのかいにある おトイレにつれてきてくれた。

『それじゃ、おむつ ぬいじやおう』

おじさんは ゼンゼン いやそうなかおをしないで、ミイちゃんがおむつをぬぐのを てつだつてくれた。

おじさんのかたにつかまつて おむつから かたあしづつ ぬいていく。

おしつこをおもらししたミイちゃんのおまたをみられるのはとつてもはずかしかつたけど、おじさんはミイちゃんのことをわらつたりしないでくれた。

おむつをぬいだと、おじさんは おトイレにミイちゃんをすわらせる。

ちよつとおおきめな おトイレに あしをひろげてすわると、ミイちゃんのおまたから、おしつこのこりがでてきた。さつきぜんぶでてなかつたのかな。

『おしつこをしたら、ちゃんとおまたをふこうね』

おじさんがやわらかいかみをとりだして、ミイちゃんのおまたをふきふきしてくれた。

おじさんにやさしく おまたをふきふきしてもらつたら、なんだかおむねがドキドキした。

またおしつこしたら、おじさんにふいてもらえるかな?  
かみを おトイレにポイして、じゃーっとおみずをながすと、おじさんがあたらしいおむつをもつてきた。

『ミイちゃんのぱんつは、いまおせんたくちゅうだから、わるいんだけど このおむつをはいてくれないかな』

あたらしいおむつは サラサラしていて はくと とつてもきもちよかつた。

---

おむつを脱いだ少女を便座に座らせると、大部分はおむつに吸収されたのであろう、昨夜、彼女の子宮に注ぎ込んだ精液の残りが垂れて

きた。

『おしつこをしたら、ちゃんとおまたを拭こうね』

バレない内に、チリ紙を用いて精液をふき取らなくては。

自分の性器から溢れてくる精液の存在に気づかれ、それの存在に言及されたら面倒くさい事になりかねないからな……。

何度も見てカワイイおまんこの周囲をきれいにしてあげる。ぷにぶにしていて、触るだけでも気持ちがいい。

処理を終えると、新しく用意したおむつを彼女にはかせ、さりげなく地下室に戻った。

ベッドに座らせると、ミイちゃんは先ほど僕が持つてきた昼食をじーっとみていた。

動かなかつたとはいえ、昨晩は激しい運動に付き合わされたんだ、時間も時間だしお腹も空いているのだろう。

適当な大きさの台をベッドに近付け、それをテーブルにお盆を置く。

目の前に出された、食べ頃を逸して少々冷えた簡素な料理にわあ、と喜んだと思つたら、途端に黙り込み――

「痛い！」

と、手を抑え始めた。

『…………？』

手にも怪我をしていたのか。くそ、気付かなかつた。

慌てて彼女の手や腕を診てみたが、怪我はしていないようだつた。しかし彼女はしきりに手の痛みを訴え続けている。

動かさなければ痛みは無いそうなので、ひとまず処置は後回しにして、食事を摂らせるすることにする。

少女を僕の膝の上に座らせて、本来僕が自分の為に用意した食事を、彼女に食べさせてあげるのだが、成れていないせいか食事を与えるというのは存外難しかつた。

僕は牛乳を飲むと腹を下してしまって、僕でも飲める獣人用乳は常に備えていた。それが彼女にも良かつた。猫獣人も、牛乳を飲むと腹を下してしまうそุดだから。

ゆつくりとした食事を終えると、ミイちゃんをもう一度トイレに連れてゆくという体で、先ほど地上に出た時に取り忘れていた睡眠薬を調達。彼女にはその後、「お昼寝】をしてもらつた。

僕もまだ昼飯を摂っていなし、昨夜はアレだつたから寝不足だし。拘束具の準備もしなくちゃだし……。

ふわあああと、長い欠伸<sup>あくび</sup>が出た。

---

いぬのおまわりさんからかくれるためのちかしつにもどつてくると、おじさんがおぼんにのせた「はん」をミイちゃんに よういしてくれた。

おじさんは、ミイちゃんのおなかがすいていたのを わかつてくれていたのをしつて、うれしくなつた。

ミイちゃんは あつすぎる「はん」がたべられないけど、この「はん」はそんなにあつくなさそう。

いただきますをしようとしたけど、ミイちゃんはちょっとウソをつこうとおもつた。

「いたい いたい おててが いたいよー」

おじさんがしんぱいして、ミイちゃんのおててに けががないかしらべてくれた。

ウソをついて、ミイちゃんはちょっとわるいこになつちやつたけど、これで、「はん」をたべるのを、おじさんにてつだつてもらえそう。おじさんにだつこしてもらいながら、「はん」をおくちにはこんでもらう。

とつてもおなかがすいていたから、おにくとおやさいのスープとパンをぺろりとたべやつた。

ミルクは うしさんのミルクじゃなくて、ミイちゃんでものめるミルクだったのがうれしかつた。

おひるごはんがおわると、おじさんはミイちゃんをもういちど おトイレにつれていった。

おおきいおトイレにすわつて、おしつこができるまでちょっとじかん

がかかるつた。

おしつこがチヨロチヨロつてでたので、おじさんにおしつこでた一つていつたら、おじさんがやわらかいかみで、ミイちゃんのおまたをふいてくれた。

やっぱりおじさんにおまたをふいてもらうと、おむねがドキドキしてうれしくなる。

ちかしつにもどると、おひるねのじかんになつた。

ベッドにねつこうがると、おじさんがミイちゃんのおなかをポンポンしてくれた。

ポンポンされるとおちつく。おめめをとじると、なんだかいにおいがってきて、ミイちゃんはねむたくなつてきて……。

## 07 ネコミミ少女を捕獲しました

ネコミミ少女を監禁してから6日目・夜

「んちゅ ♥ ちゅつ ♥ ちゅ ♥」

寝室のベッドの中でネコミミ少女に覆いかぶさつて、優しいキスを始めてから何分が経過したろうか。

息苦しさから解放された少女が荒い息をしながら、僕の腕を掴む。誘導された先で僕の手が触れたのは、少女が現在身に着けている、使い捨ておむつだった。

掌に触れているおむつが段々と湿り気を帯び、ゆっくりと膨らんでゆくのを感じる。

彼女はわざわざ、僕に触らせてからおしつこをしたのだ。

ミイちゃんは、おむつを嫌っていた。おむつは赤ちゃんが着けるものだからと。

しかし今は、このおむつという生理用品を、対象者の愛情を確かめる手段——おむつプレイという倒錯した性コミュニケーションの道具——として、見事に扱えている。

この若さですでに、僕を下僕として扱うなんて、未恐ろしいとはこの事だ。

初めてミイちゃんと、身も心も結ばれたあの夜も、おむつ替えから始めるセックスだつたなあ、と思い出す。

蕩けた瞳の奥に はあと を灯させて僕を見つめる少女から【命令】が発せられた。

「ちー、でたあ……♥」

それを耳にした瞬間、心臓が有り得ない速度と強度で脈打ち始めた。

くらくらと眩暈めまいに襲われ息が苦しい。掌がじつとりと汗ばんでゆく。

——僕の首には、見えない【首輪】が着いている——

身をかがめ、いつものように彼女が着けているおむつを外す。

少女のおまたを外気に触れさせ、うやうや恭しく割れ目にキスをし、その先の行為へのお伺いを立てる。

彼女は何も言わない。ただじっと、僕を見下ろしているだけだ。

彼女からの無言——許可——を得た僕は、乱れた呼気が少女にかかるないよう細心の注意を払いながら、舌による清拭あいぶを開始する。一体どれ程の時を費やしたのだろうか。数分？ 数時間？ それとも数秒？

少女の秘所から味がしなくなつた頃、僕のズボンの中は精液とも力ウパー液ともつかない汁氣でドロドロになつていた。

目の前の小さな猫獣人の雌おんなの仔と親密な関係になつてから、まだ1日程度しか経つていなければ、彼女は僕の獸欲を操る術すべに習熟しているように思えた。

——見えない【首輪】から、見えない【鎖】が延びていて——

見上げると、頬を上気させ額に汗した少女は、静かに笑顔を浮かべ、クマのぬいぐるみを抱きしめながら僕を見下ろしていた。

その視線を受け、ゴクリと喉を鳴らす。

僕の全てを見透かされているのではないかという錯覚に陥つたらからだ。

それでも僕は、ミイちゃんにお伺いを立てる。

『ミイちゃん……、コレ……、いいかな？』

震える手で一枚の布を取り出し、それを恐る恐るミイちゃんに見せる。

監禁初日に麻酔薬を染み込ませて、少女から意識を奪つたアレだ。微笑みを浮かべる彼女は、ソレを目にして表情を変えずに言ひ放つた。

「……いいよ……♥」

確信した。ミイちゃんはもう、コレの正体に気付いている。

それどころか、これまでに彼女にしてきた事も、全てバレているのではないだろうか。

少女の見て いる前で、 布に薬品を染み込ませ、 ソレを彼女の鼻と口にあてがう。

するとミイちゃんは、僕の手の上を自身のちいさな両手で覆い—

すううううう  
.....

「……ツ……」  
——と、自分から深く、息を吸い込み始めた。

少女が身体をびく……びく……と震わせてからほどなくして、ミイちゃんの両手からはチカラが抜け、ベッドの上にポスンと投げ出された。

『ミイちゃん?』

あれほど深く薬品を吸い込んだのだが、意図を保つていらざるノア

しかし  
あまりに予想外な出来事に  
おもねる意図の確認をしてし  
まつた。

僕の前で意識を失う事を恐れていなければどう。

それは、僕になら安心して身を預けられるという信頼の証なのか。それとも、お前ごときに何ができるのかという嘲弄と侮蔑なのか。

——見えない【鎖】は、幼い少女に握られていた——

意識を奪われ、おむつを外された少女は、おまたを広げたまま寝息を立てていた。

に動いてもらおう。  
（ミイ らや  
ル）

命ある者をナナホリル扱いして生殖器は快感を生ずる行為は  
感も手伝つて腰が碎けるほど気持ちイイ。

僕の勃起した生殖器を受け入れるには彼女の膣はおさな小さく、薬品によつて弛緩しているとは言え、少なからずダメージを与えてしま

う。

それでも彼女のおさなおまんこは、僕のチンポに快楽を与えてくれる。

快感が最高潮に達し、彼女の子宮を穢す目的で どぶどぶと精液を注ぎ込む。

それでも彼女の子宮は、僕の精子を優しく受け入れてくれる。僕が犯してきた罪も、彼女は笑つて赦してくれる未来が容易に想像できる。

『ごめんねっ ♥ ミイちゃん ♥ ダメなおじさんでゴメンねっ ♥』

それがどうにも申し訳なく感じ、少女の肢体に覆いかぶさり、なお意識を失った少女に謝罪しながら、力任せに腰を振りながら、少女の胎内に自らの遺伝子を漏らし続けた。

……

……

……

少女の膣内で5回ほど欲汁を漏らしたあと、今だ硬度を失わない生殖器を少女のおまんこから引き抜く。

このまま勃たなくなるまで、彼女の膣に遊んでもらいたかつたが、今回はここまでにしておく。

『おやすみ、ミイちゃん ♥』

おまんこから精液が漏れ出る前に、おむつを新しいものに替えてあげたあと、眠り続ける少女に愛情をたっぷり含めたおやすみのキスをして、僕はベッドから離れ、歩き出す。

頑丈に造られた錠を解き、扉を開くと、かつてミイちゃんを監禁していた地下室へとつながる階段が現れる。

そこをぺたぺたと、裸足ならではの足音を響かせながら下つてゆくと、くぐもった小さな声が聞こえてくる。

手枷足枷口枷を掛けられたネコミミ少女が、鎖に繋がれながらも、殺意を込めた瞳で僕を睨んでいた。

『おまたせ、ミアちゃん♥』

ネコミミ少女を監禁してから4日目・深夜

……初めてマイちゃんと、身も心も結ばれた、情熱的な夜を過ごした僕は、火照った体を覚ます為、夜風にあたっている。

ベッドの上では熱されて汗だくだつたこの身体も、降雪期を運んでくる季節の風にあたると、すぐに冷えてしまった。

『うううう……風邪をひくまえに戻ろう……』

身を縮めて、室内へ。

ベッドでイキ疲れて眠り姫になってしまった少女の元へ向かつた

——その時。

「 動くな 」

何者かが、僕の背後に立っていた。

先端部が尖つていて金属質のナニカで、僕の背中を刺している。

ほんの少しの血が垂れる程度で済まさされているのは、これが脅しからだろう。

——この位置……一瞬で僕の腎、臍、肝、をズタズタに出来る場所だ。という事はコイツ……プロフェッショナルか。

命を完全に握られた事実に、全身に冷や汗が滲んできた。

「 そのままゆっくりと歩け 」

くぐもつた声。指示に従つている間は生きていられるだろう。

しかし、コイツを雇つたのは誰だ？

ウチのライバル（笑）である、ぶきつちよハンス調合所か？ それとも教会の薬効否定派か……。カードで有り金巻きあげたプリドンの野郎とかか？

仮に分かつたところでどうしようもない事柄に想いを馳せている

と、進まされている方向に気付く。

「なんでこっちに歩いて行かなきやならないんだ？　こつちはベッドルーム。ミイちゃんが寝てるんだぞ……？」

また少し深く、僕の背中にナイフが差し込まれる。足を止めるなどいう意思表示だろう。

一步一歩、僕とコイツがベッドルームに近付いてゆく。

ベッドルームへのドアを開け、中に入る。すると――

「――！　ミイちゃん！」

侵入者はベッドで寝ているミイちゃんを見やると、僕を放置して駆け寄つていった。

その声に安堵の感情が含まれていたように思えたが、その時の僕にソレを汲み取れる余裕はなかつた。

「ミイちゃん！　わたし・ミアだよ！　おねえちゃん！」

……

「ん～？」

騒ぎに気付いたミイちゃんが目を覚ます。

「どうしたのぉ……？」

おめめをぐしごし擦つて、眠氣を覚まそうとしていた。

『ごめんねミイちゃん。起しちゃつたね』

頭をなでながら、彼女のお腹の辺りを軽くポンポンたたいて、寝かしつける。

『大丈夫だから、おねんね　しようね……♥』

「……？」

おでこにキスをして優しくなでてあげると、ミイちゃんは再び、夢の中へ戻つていった。

ふう……

お互い無事で良かつた……。

不届きな侵入者は今、床の上に寝転がしている。

ミイちゃんを発見した時の侵入者が見せた一瞬の隙。それに合わせて、麻酔薬を嗅がせてやつた。ここ最近活躍しつぱなしにな、麻酔

薬。

量を調節する暇も無かつたので、だいぶ濃いものを吸わせてしまつたが、呼吸音が聞こえる。死んではいないだろう……。

意識を失った侵入者をすっぽり覆っている外套をめくると――

『なんてこつた……』

外套の中から、猫獣人のふにろり系雌の仔おんなこが出てきた。

## その姉、ミア

### 08 ネコミミ少女を捕獲しました——02

ミイちゃんを監禁してから5日目・深夜（日付変更直後）

『んつ ♥ ん……？ ♥』

「あ、起きたかな？ おはようミアちゃん」

『……んん……？』

目が覚めると、薄暗い部屋のなか、ベッドの上でニンゲンのおじさんに後ろから抱っこされ、身体をまさぐられているネコミミの女の子がいた。

あれは、おおきな鏡……？ さわられているのはわたし ミアちゃんだ……。それがこわくて、キモチわるくて、あわてて逃げようとしたり、おまたから突然、ピリツ ♥ というキモチよさがして、動けなくなってしまった。

『あつ ♥』

「ふふつ、おまんこ触られてキモチよかつた？」

履いていたショーツが、ふともものところまで降ろされて、ミイちゃんのおまたが。着ていたハーフトップはめくりあげられて、おっぱいが見えちゃってる。

「ミアちゃんも、おしつこの後、ふきふきするのはあんまり上手じゃないんだね ♥」

ショーツのクロツチ部分についたおしつこの染みを見られて、すごく恥ずかしくなった。

「でも大丈夫だよ ♥ ミアちゃんが寝てる間におじさんがちゃんとキレイにしてあげたからね ♥」

ご馳走様 ♥ と、おじさんはなぜか食事が終わつたあと、場違いな挨拶をした。

「ミアちゃんは、おっぱいとおまんこ、どっちを触られるのが好き？」

『どつちもイヤ！』

イヤと言つているのに、裸になつたおっぱいとおまたを、おじさん

は撫でたり摘まんだりするのをやめてくれない。

おっぱいは触られてもくすぐったいだけだけど、おまたのさきつぽを触られると、声がでちゃうくらいすゞくキモチイくなつてキモチわるい。

ヤだ、こわい、キモチわるい。触られないように足を閉じようとしても、ひざの裏にある棒にひざがくくりつけられていて、閉じられないようにされているからだ。

腕にも枷が掛けられているけれど、片方ずつで互いに接続されない。これじゃ枷の意味がないんじや……。

「ミアちゃんのおまた、もつとキモチよくしてあげるね♥」

おじさんの指が、ミアちゃんのおまたのさきつぽをこねこねといじりまわしていく。

『やつ、やだつ！さわらないでよつ！うーつ』

おじさんの指が動く度、ミイちゃんのおまたのさきつぽがキモチイくなつっていく。どんどん、どんどん。怖いくらいにキモチイイ。

『あつ……んつ……やめてよお……どうしてつ、こんなことするの？』

「ふふふ、それはね、ミアちゃんはもう、おじさんのモノになつたからだよ♥」

『ちがうつ！ミアちゃんはおじさんのモノじゃない！』

抱きかかえられているおじさんを振りほどけない。おかしい。人間種のおじさんより獣人種のミアちゃんの方が強いはずなのに、おじさんの方がミアちゃんよりもチカラが強い。どうして？

べчинつと、なにかがミアちゃんのお尻とおまたにぶつかつた。「コレ、なんだかわかる？　これはね、おじさんのおちんちんだよ♥」

おじさんに抱えられ、ミアちゃんの閉じれないおまたの間から、おじさんのおちんちんが生えてきた。

初めて見るおちんちんは、ミアちゃんの腕くらいの大きさだつた。男の人は、こんなに大きなおちんちんを、いつもズボンのなかに入れてるの？

「ふふ、視線が釘付けだ。興味津々だね♥それじゃあ、ほら、おじさんのおちんちん、触つてごらん？」

おじさんは、ミアちゃんの両腕を持つて、おちんちんに触らせてきた。

『やーーさわらないつー・さわりたくないー。』

「ほら、親指を上にして……そうそう上手♥それじゃ、おじさんと一緒に♪じ♪し♪ししようか♥」

無理やり触られたおちんちんは力チカチに硬くて、熱くて、ごしごしするあいだも、びぐびくと動いていた。

『あつ』

「ほら♥ココを触られるとキモチいいでしょ？　おじさんもね、おちんちんを触つてもらうとキモチいいんだ。一緒にキモチよくなろうね♥」

おじさんは左手でミアちゃんの左手を掴んで動かして、おじさんのおちんちんをごしごしさせる。

おじさんは右手でミアちゃんの右手を掴んで動かして、おまたのさきつぽをくりくりいじらせる。

こりこりこりこりこりこりこりこりこりつ……♥

『おつ……やつ……ひんつ……やだつ……あひつ……んんつ』

「自分で上手にさきつぽクリクリできてるね♥ミアちゃんキモチよさそう♥もうそろそろいくのかな？」

こりこりこりこりこりこりこりつ……♥

『はひつあひつい、いく？　どこつにつ？んつふあつ』

「イクつていうのは、とくつてもキモチよくなるつてことだよ♥」

こりこりこりこりこりこりこりつ……♥

『やめてつー・いじらせないでつー・ミアちゃんのおまたのさきつぽつ！　もういじらせないでえつ！』

こりこりこりこりこりこりこりつ……つ♥

『んつんにやつにやああああつあああああああんつ』ビクツビクンツビ  
クビクツ♥

ぶち——……………ちよろちよろちよろちよろ…………

♥♥♥

「初アクメで初潮吹き♥おめでとうミアちゃん♥きもちよかつたね

♥

『あつ……♥はひつ♥ひつ♥……んひつ♥……』

うう……うう、いやあ、もうイヤだよ…………。キモチよくなりすぎて おしつこのところのチカラが抜けてつて、がまんできなくなつておもらししちやつた……。

さきつぽのキモチいいのがどんどん強くなつてしつぽがピーンツてなつたあと、高いところから飛び降りた時みたいな浮遊感がすごいキモチイかつた。あれがイクつてやつなのかな……。

イツたあとで汗をびっしょりかいて、ぴくつ♥ぴくつ♥と勝手に動いちやつて、自分で思うように身体を動かせなくなつた。するとおじさんが、ミアちゃんの両手を使って自分のおちんちんを「ごしごしだす。触りたくないのに、おちんちんの感触がてのひらに伝わつてくる。

おちんちん……女の子のミアちゃんにはない、男の人のおまたにあら、おしつこを出すところ。

ミアちゃんの腕くらい太くて大きくて硬いソレは、キノコみたいな形をしていて、先つぽの真ん中に開いた穴からは、透明なお水がトロトロ出てきて、「ごしごし」しているミアちゃんの手をどんどんヌルヌルに濡らしてくる。

♥

「ああ♥ミアちゃんに「ゴシゴシ」してもらえて、おじさんもイキそうつでも、かかつたところがあつたかくて、それはキモチイかつた。

「いまおちんちんから出したコレ……精液さめんつていうんだけど、知つてる?」

『……しらない……つ』

「そつかー……♥それじやあミアちゃん、これを見てみて♥」

今度は手鏡を持ち出してきて、ミアちゃんに見えるようにおまたを映し出す。いまのミアちゃんは足が閉じられないので、いつもならぴったり閉じてる割れ目が、ほんの少し開いていて、なかが少し見えていた。

自分でも鏡を使っておまたのなかを見たことが無かつたから、おじさんの「ちょっと開いてみて♥」と言わされて、おまたの割れ目を開いてみる。

するとおじさんは、ミアちゃんの身体にかかつた白いドロドロ——精液を指で掬つて、ミアちゃんのおまたのおしつこのところに塗り付けてくる。さつきよりキモチくなつて、触られると身体がビクつてなつちやつてイヤなのに、おじさんは指を動かすのをやめてくれない。

……あれ？ 違う？ 触られているのは、おしつこのところじやないかもしない。

「ミアちゃん、女の子のおまたには、おしつこの穴じゃない、もう一つの穴が開いてるつて知つてた？」

——知らない……。けど、おじさんと口はきかない。無視しよう。

「鏡を良く見ててね……。その穴はね……こだよー♥」

おじさんがそう言うと、ミアちゃんの開いて見せたおまたの少し下方に、おじさんの精液でぬるぬるに濡らした指が つぶつ……と入つた。

『——つ ♥』 ビクンつ ♥

「ね？ おまたにもう一つ、穴があつたでしょ？」

さつきとは違うキモチよさにびっくりして、足を閉じようとしたり、棒が邪魔をして足を閉じられない。

ホントに入つてる。穴が開いてるんだ。おまたのあそこに。

おまたの穴のなかに指が入つているのを鏡越しに見えて、なんだか急に怖くなってきた。

指が、どんどんミアちゃんのなかに入つてくる……。身体にギュツとチカラを入れて、これから訪れるであろう恐怖に身構える。

『やめてっ！おまたに指、いれないでっ！』

おじさんの指がなかを進んでいくのを感じると、そのたびにキモチイくなつておまたの穴が勝手にキュツ♥つて締まっちゃう。

締まつた穴のなかを指が進んで、またキモチイくなつておまたの穴が勝手にキュツ♥つて締まるのが、一番奥に届くまで続いた。

奥まで入つたら指を引き抜いて、おなかの上にかけられた精液を掬い取つて、またおまたの穴に指を入れて……そうやつて、おじさんはミアちゃんのおまたの穴を、精液<sup>ざいめん</sup>でぬるぬるにしていった。

『…………あ…………♥…………つは…………♥…………ん…………つ…………♥…………』

おなかのうえにかけられた精液<sup>ざいめん</sup>の全部がミアちゃんのおまたのなかに塗り込まれて、やつとおじさんは指を動かすのをやめてくれた。ミアちゃんが何度もやめて！って言つてもやめてくれなかつたのに……。

おまたのさきつぽをいじられた時とは違うキモチよさで、身体がすぐ熱くなつたし、だるく感じる。汗びつしよりだし、息も荒い。

呼吸を整えていたら、ベッドに寝かされた。やつとおじさんのだつこから解放される。

「ど、どうでミアちゃん、どうやつたら赤ちゃんがデキるか、知つてる？」

『…………』

おまたのなかをずつといじくりまわされて、疲れて応えるのも面倒になつてしまつた。

……ミアちゃんは赤ちゃんがどうやつたらできるのかを知らない。ただ、ママは「もうちょっとおねえさんになつて、発情期が来ればわかるわ♪」と言つていた。

ミアちゃんは成長しておねえさんのからだになつた。発情期もうすぐ来るだろうから、そうしたら赤ちゃんがどうやつてできるかかるようになるんだろう。

そんなことを考えていたら、ミアちゃんの上に、おじさんが覆いかぶさってきた。

「おじさんのこのおでてが、ミアちゃんのおまたの穴だとするよ♥」

おじさんは右手で【筒】を作ると、それにおちんちんをあてがつた。

「おちんちんを、ミアちゃんのおまたの穴にいれちゃいまーす♥」

腰を押し込んで、【筒】におちんちんを挿し込んで、そのままゴシゴシと擦り出した。

息を荒くして、ずっと、ゴシゴシゴシ……。そのあいだ、ずっとミアちゃんの事を見てる。

……ミアちゃんのおまたに、おじさんのおちんちんが入るつてこと？ どうして？ なんのために？

「イクよツ！ ミアちゃんのおまたの中にツ精液ツ出すよツ！」

びゅるるるるつびゅるつぶびゅるつびゅるううつ！

『んーっ』

おちんちんの先っぽから精液<sup>ざーめん</sup>が飛び出し、またミアちゃんの身体がびちゃびちゃの精液<sup>ざーめん</sup>まみれになつた。

「はあ……♥はあ……♥……ミアちゃんのおまたの穴の中に、この精液<sup>ざーめん</sup>をプレゼントするとね……♥」

おじさんは人差し指で、ミアちゃんのお腹の下あたりを ぷにつと押し込み――

「ミアちゃんの奥の【おへや】に、【赤ちゃんがデキる】んだよ♥」

「この精液<sup>ざーめん</sup>が、【赤ちゃんのもと】なんだ♥」

…………う、そ……

「それじゃあミアちゃん、おじさんと、赤ちゃんつくろうか♥」

『いや、ヤダつ！ いやああああああああああああああつ！』

## 09 ネコミミ少女を捕獲しました——03

マイちゃんを監禁してから5日目・未明

ミアちゃんを拘束してから数時間——

---

「ミアちゃんの仔供だからきっと、とつてもカワイイあかちゃんが産まれるよ♥」

天井に向かつてそそり立つおじさんのおちんちんが、とつても怖いモノに見えた。

男の人のおちんちんは、おしつこをするためのモノじゃなくて、女の子のおまたの穴に入れるためのモノで、雌ミアちゃんの仔のおまたには、おしつこが出てくる穴のほかに、おちんちんを入れる為の穴があった。

おんなの仔このなかのなかにあかちゃんを作るには、おちんちんから出てくる【あかちゃんのもど】をおまたの奥で受けとめなくてはいけないらしい。

それが怖くて、ミアちゃんのおまたの穴に、キュッテチカラが入る。

ミアちゃんのおまたのなかに塗り込まれたおじさんの精液ざーめんも、おまたを閉じれないように固定されてる両膝の拘束棒も、獣ミアちゃん人種のチカラが二ングンより弱くなってるのも、見せられた手鏡も大きな姿見鏡も、この薄暗い部屋と汚れたベッドも、なにもかも……。

おじさんは、ミアちゃんのおなかにあかちゃんを作る為に、こうしてミアちゃんを捕まえて閉じ込めたんだ。

「さ、それじゃ、記念すべき初交合だ♥ いっぱいおまんこしてあげるからね♥」

そう言うとおじさんはミアちゃんを後ろから抱きかかえ、ぱんぱんに膨れ上がったおちんちんをミアちゃんのおまたにペчинと当てた。

おちんちんを入れられちゃう!

『やつやだつ！離して！離してよおつ！』

怖くなつてバタバタ暴れて逃げようとしたけれど、おじさんにがつちりと抑えられていてダメだつた。

おじさんはミアちゃんに見せつけるために、おまたの割れ目の中身を、姿見鏡にハツキリと映した。触るとキモチいいおまたの先っぽと、ちいさなぴらぴら、おしりの穴が丸見えになつて、すぐ恥ずかしい……//

「おじさんのおちんちんが、ミアちゃんのおまんこ穴に入るところ、良く見てるんだよ♥」

おじさんが腕からチカラを抜いていく。ミアちゃんの身体が下がり、おまたがおちんちんの先っぽに乗つかつて、体重が全部おまたの穴にかかると、おちんちんがめり込むようにおまたに刺さっていく。『いつ、いたいっ、痛い、痛いよお……』

「そんなに痛くないでしょ？ 寝てる間に痛み止めの軟膏を使つておいたし、スムーズに入る様に、おじさんの精液ざいえんをたっぷりと塗り込んでぬるぬるにしたんだし……」

にゆむつ、にゆむつ……にゆむつ、にゆむつと、硬くて太くて大きくてあつたかいモノが少しづつ少しづつ、ミアちゃんのおまたのなかに入つてくる。痛くてキモチイくてキモチわるくて苦しくて、身体を丸めてそれらに耐える。

ミアちゃんは声も出せずに痛いのを我慢しているのに、おじさんはキモチ良さそうな声を出していた。するい。

『ふー……ふー……♥』

ミアちゃんの奥に、おちんちんの先っぽがぶつかつて止まる。……ここが終点？ 姿見鏡を見てみると、おちんちんの半分くらいまで入つたところで止まつていて、赤い——血が出ていた。

「ああ、やつとミアちゃんの中に入れた……♥おまんこ穴から血が出てるね。これは、ミアちゃんのおまんこ穴に初めておちんちんが入つたよ一つという証あかしなんだ。おじさんがミアちゃんの初めての男になれて嬉しいよ♥」

ズキズキと痛むおまたの穴に、傷薬が塗り込まれる。怪我が早く治

りますように、と。それがまたおまたをヌルヌルにした。

ベッドに腰を降ろして少しの間じつとしていたけど、しばらくすると、おじさんのおちんちんが動きだした。

おじさんは自由になつた手で、ミアちゃんのおまたの先っぽをクニクニしてくる。おまたの先っぽはキモチいいのが強すぎて苦しいから止めて欲しいのに、おじさんの腕を掴んでもやめてくれない。

今度は手鏡を使って、おまたにおちんちんが出入りするところを見せつけられる。おちんちんの動きに合わせて、キモチイイのが止まらなくなつてくる。

『……♥やつやめええ♥やめてよおお♥ひつ♥あつ♥』

おじさんがベッドに寝転がると、どんどん強くなるキモチよさに体が動かなくなつて、ミアちゃんもおじさんの上でゴロンして、身動きが取れなくなつた。

おじさんは寝ながら腰をくいつくいと動かし、動けなくなつたミアちゃんの奥を、おちんちんでぎゅううくつと強く押し込んだと思つたら、次はチカラをスツと抜いて、おなかの中身も一緒に引つ張り出すみたいにおちんちんを外に抜いて行つて、そのキモチわるいのがキモチイくて、またおちんちんをぎゅううくつと入れてきて……を何度も何度も繰り返してくる。

それと同時に、さつきまではくすぐつたいだけだつたおっぱいの先っぽへのくにくにが、今は痺れるくらいキモチイく感じて頭がおかしくなりそうだつた。おっぱいへのくにくにをやめて欲しくておじさんの手を掴んでも、やつぱりおじさんはやめてくれなかつた。

『あ……♥や……♥ん……♥やだ……♥はひ……つ♥』

「だいぶキモチよくなつてきたみたいだね……♥おじさんもね、おちんちんが大分キモチよくなつてきたよ♥」

おちんちんの出し入れ、おっぱいへのくにくにを繰り返しながら、おじさんの息が荒くなつていく。

「ミアちゃん、おまんこ穴を使わせてくれてありがとう♥とつてもキモチよかつたよ♥ご褒美に、おじさんの精液ざーめん、奥で受け取つてねつ♥」

その瞬間、キモチいいのよりも、怖いの方が強くなつた。いま精液ざーめん」

を出されたら、あかちゃんができます。

『やだつ！やだやだやだつ！やめてよつ！やめてえつ！ださないでつ！あかちゃんほしくないつ！あかちゃんのもと、ださないでえつ！』

「ダメダメ、出すよ、あかちゃんのもとつ♥ミアちゃんのあかちゃんのおへやにつ♥たくさんつ♥あかちゃんつくるんだよつ！」

——イヤだ。こどもは、結婚する人のあかちゃんを産みたい。ママがむかし、寝るときには聞かせてくれたおとぎ話に出てきた王子様と結婚して、その人のこどもを産むんだから——

『ママー！ママつ、助けてつママああああああツ！』

「ミアちゃんをママにしてあげるからねつ♥ほらつ、イクよつ！ほらつ！」

おじさんがおちんちんをひとつわ強く奥に押し付けてきて——  
びゆるつびゆるつどぷつどぷつびゆるるうつびゆうううつ！

『いつ♥いくつ♥♥♥♥んつ♥♥んにやああああああああああつ♥♥

♥♥♥♥』

ミアちゃんのなかに、あかちゃんのもとをいっぱい注ぎ込んでいつた。

『——あ……あ……つ……い……いや……やあ……』

頭の中が真っ白になるほどの解放感と恍惚感に包まれながら、今まで意識した事の無かつた場所に、たくさんの濃い熱が集まつてくるのを感じた。

女の子には作れない熱たちが目指すここが、女の子だけが持つ【あかちゃんのおへや】なんだと理解できた。

途端、自分の中のとても大切なものが汚されたような気がして、悲しくて涙があふれて、ミアちゃんは泣いてしまった。

『うあつ……うああああああああん……ああああああん……いやだよお……あかちゃん、あかちゃんやだあ……』

「おーよしよし。急に【オンナノコ】になつちやつて、びつくりしちやつたんだね。大丈夫だよー大丈夫……。妊娠する事は無いから、

安心してね♥』

『……ほんと？ あかちゃんできない？』

「うん、ミアちゃんはまだ発情期がきてないから、妊娠したくてもできないんだよ」

それを聞いて、少し救われた気がした。このおじさんにヒドい事をされたけど、最悪な結果にはならないみたいだと分かったから。

いまはとにかく、少しでも早くおうちに帰りたい。ミイちゃんには悪いけど、帰つて布団にもぐりこんで寝てしまいたい。

「——だから、はやく発情期を迎えるように、おじさんとたくさん【仔作りごっこ】しようね♥』

『——え？』

「たくさん【仔作りごっこ】をすれば、オンナノコの機能が集中的に成長するから、すぐに妊娠できる身体になるよ♥ あかちゃん、楽しみだね♥』

——ひょつとして、ミアちゃんは、このおじさんから逃げられないの？

逃げられずに、ずっとここでおじさんと あかちゃんをつくるれんしゅうをしていないといけないの？ ——いやだよ……。いやだ……。そんなのいやだよ……。だれかたすけてよ……。ママ……。ママ……。

この暗いお部屋のように目の前が真っ暗になつて、ミアちゃんはそこから先の事を覚えていられなかつた……。

『……あれ？ ミアちゃん？ どうしたの？ ミアちゃん』

ミアちゃんは、悲しそうな表情をして眠りについた。流石に疲れたんだろう。それはそうだ。今日一日、というか、僕と出会つてから数時間で、たくさん仕事を経験したからね。

初めての異性、初めてのクリいじり、初めての手コキ、初めてのクリイキ、初めての潮吹き、初めての手マン、初めての精液プレイ、初めての性教育、初めてのおまんこ、初めての破瓜、初めての中受け、初めてのアクメ……。これだけの事を短い間に経験したのだ。疲れる

な、と言う方が野暮だろう。

ついでだし、もうひとつ【初めて】を経験させてあげよう。  
僕は眠りに入ったミアちゃんの口にキスをしてあげた。

# 10 ネコミミ少女と結婚しました——01

ミイちゃんと暮らし始めて5日目

ミアちゃんを捕獲してから2日目

ミイちゃんは日中、おむつを履かない。なのでトイレでおしつこをするのだが、足を捻挫しているので必ず僕に抱っこさせ、トイレに連れて行かせる。

僕の診た限りでは足の捻挫は治癒しているはずなのだが、まだ痛いとミイちゃん自身が言うのだからそうなのだろう。毎日きちんときれいな包帯を巻いてあげている。

着ているワンピースをまくり上げてもらい、おへその下まで包み込むモコモコぱんつを脱がすのだが、おまたの可愛い一本すじにクロツチ部分が挟まれて引っ張られ、ぱんつが逆さまに裏返ってしまう可愛いアクシデントもいつもの事だ。

ここ最近のミイちゃんが履くぱんつのクロツチ部分は、おしつこで汚れていない。なぜなら、おトイレの始末は全て僕にさせてくれるから。

足を大きく開かせて便座に座らせ、少し待つ。すると――  
「でるー♥？」

と、にこっと笑つておしつこのでるタイミングを教えてくれるのだ。おしつこをする時は僕もしゃがみ込んで、ミイちゃんのおててを握つてあげる。

ぶし――――――ちやぱちやぱちやぱちやぱ……  
ち一つ、ち一つ、……ちやぱつ……ちやぱちやぱつ……

ワンピースの裾をまくつてお腹を丸出しにしたミイちゃんの可愛い割れ目から、しゅ一つとサラサラしたお水が飛び出す。それをしあがみ込み眼前で拌めるこの幸福感は何物にも代え難い。

「おとーさん♥でたー♥」

『上手におしつこできたねー♥それじゃーふきふきしようねー♥』

おしつこで濡れたおまたの部分を、トイレットペーパーでトントン

して拭いてあげる。この瞬間が大好きなようで、キスをしてミイちゃんの舌をなめながら拭いてあげると、恍惚とした表情を浮かべる。

ミイちゃんは、自分でおまたを拭かない。本人曰く、おててを怪我しているから痛くて上手に拭けないから、僕に拭いてもらっているのだそうだ。

診た限り、彼女の手はなんともないのだが、ミイちゃんがそう言うのならそなたがどう。だからミイちゃんのおててにも包帯を巻いてある。

「おとーさん♥もつと【キレイキレイ】して♥」

最近のミイちゃんはとつてもキレイ好きだ。だから僕も彼女のおまたを一生懸命【キレイキレイ】にしてあげる。

「きや……♥」

ミイちゃんを膝裏から持ち上げて身体を屈曲させ、ひっくり返す。便器の穴に落ちないよう、持つてきた少し大きめなクツショーンで優しく身体を支えてあげる。

僕の目の前に現れた愛らしい一本すじ。それをミイちゃん自身が左右に広げてなかを見せてくれる。あとはおしつこで濡れた部分を清めてゆくだけだ。

仔猫のおしりをぺろぺろしてあげるお母さん猫のようにたっぷりの愛情をもつて、ミイちゃんのおまたを清めてあげる。

ちゅちゅ♥ちゅつ♥ちゅうつ♥れろれろ♥ちゅ♥ペちゃペちゃつ  
ちゅつ♥」  
「は……♥はーつ♥はーつ♥んつ♥お、とーさん♥あつ♥あんつ♥」  
ぺろぺろ♥ちゅぱちゅぱつ♥れろれろつ♥くにゅっくにゅつ♥  
「あつ♥あんつ♥……パパつ♥ぱぱあ……♥んーつ♥ちゅつ♥ちゅつ  
ちゅつ♥」

ミイちゃんがうわごとのように僕を呼ぶ。指しやぶりも始めた。もうすぐ【キレイ】になりそうだ。

おしつこで濡れているかもしないと思い、ミイちゃんのおまたの先っぽに吸い付いて、丹念に丹念に舌を這わせて清めてあげると——



を促すために牝の粘膜に牡の体液を摂取させ、未だ知らぬ牝の本懐を自覚させてあげよう。牡から与えられた遺伝子で仔を成すという本懐を。

「あつ ♡ あんつ ♡ んんーつ ♡」

ミイちゃんは、赤ちゃんができるか、なんて知らなくていい。おまんこつて言う、すると気持ち良くなる遊び。その程度の認識でいてくれればいい。

ただ気持ちが良いからと僕とおまんこを繰り返し、いつの間にか発情期を迎えていていつの間にか仔を孕んでいた。これが理想だ。その理想を叶えるべく、今日も彼女のおまんこ穴の上で腰を振る。

『いくよつミイちゃん！ おとうさんの精液、ミイちゃんの子宮につ！』  
「うんつ ♡ ちょーだいつ ♡ あつたかくつてきもちいーの、ミイちゃんにちょーだいつ ♡』

子宮に大量の精液を獲得できて多幸感に包まれるミイちゃん

。事が終わつた後のミイちゃんの表情は、発情期未経験の少女がするようなモノではなかつた。

それはとても淫靡で妖艶いんび ようえんで、男を骨抜きにする魔性の牡の表情カオだつた。

「はあ…… ♡ はあ…… ♡ おとーさん…… ♡」

ミイちゃんは小さなおててで僕の親指を握つてくる。蕩ける快樂から荒れた息を整えながら、僕の目をじーつと見つめていた。そしてにこつと笑顔を見せると――

「ミイちゃんね…… ♡ 、おとーさんとけつこんするー ♡ ♡ ♡」

ミイちゃんから突然のプロポーズとキッス。

いやいや、これは結婚がどういうものか分かつていない発言だ。幼女が初めて触れる異性である父親に、親愛の情を抱くのと同じだろう。

しかし、ミイちゃんから向けられたまっすぐすぎる好意は、なにに収まっていた僕の獸欲を、脅圧を跳ね返すほどいきり立たせた。

『ミイちゃんはおとうさんと結婚してくれるの？』

今日はもう終わらせようと思つていたが、予定を変更しよう。

ミイちゃんからの返事を待たずに、猛った生殖器を稚い穴へ抜き差し始める。返事は聞かずともわかるからだ。

「あんつ♥うんつ♥おとーつ♥さんのつ♥およめつ♥さんにつ♥なるうつ♥……んつ♥」

イつて敏感になつてゐる性感帯を間断なく強く刺激されてもなお、ちいさな腕で僕の首に……は届かないから、僕の腰に手を回してぎゅっと抱きつき想いを伝えてようとしてくる。動きのひとつひとつが可愛らしくて愛おしい。

『それじやつ今日からミイちゃんは、おとうさんのおよめさんだつ♥いいねつ♥いくよつ♥』

本日何度目かの射精。もはや数えるのすら億劫になつてしまつた。餌をねだるヒナ鳥の口のようにぽつかり開いた子宮口にチンポをねじ込み、エ<sup>せいえき</sup>サを中にたつぶりと注いであげる。はやく赤ちゃんができるように——そんな願いを込めながら。

「んにやつ♥♥♥ぱぱつ♥ぱぱあつ♥ミイちゃんのおまたつ♥キモチいいつ♥んなああああああああああつ♥♥♥♥♥♥」

次世代の為の遺伝子を受け取れて、ミイちゃんの本能が幸福感で満たされる。また、結婚の成就というシチュエーションも手伝つて、より深いオーガズムが体験できただようだつた。なぜならミイちゃんはアクメ気絶をしてしまつたのだから。

段々とミイちゃんがどういう娘なのか、分かつてきた気がする。無垢なる魔眼——とでも言うべき彼女の瞳に見つめられると、どうしようもなく僕の中の獸欲が滾<sup>たぎ</sup>つてしまふ。

ミイちゃんは時折、僕の全てを見透かしているかのような表情をする。僕がしたいと思つてゐる事は全て、彼女には筒抜けになつてゐるのではないかと錯覚するほどに。

そんなバカなと思うのだが、そうあつて欲しいと願つてゐる僕が、どこかにいる。それが少々——恐ろしい。

荒れた息を整えながら、意識のとんだミイちゃんのなかで、いまだ刺激に対し敏感になつた生殖器をこすり合わせてさらなる快感を愉

しむ。

刺激に反応し、時折身体をヒクつかせるミイちゃんの寝顔が愛おしい。

ミイちゃんのおしつこの匂いが充満する小部屋で僕たちは、結婚を果たした。その繋がりは非常にもりいものかもしれないけれど、今はそれで構わない。

これからは、一方的な仔作りではなく、互いに求めあう仔作りをするというのも悪くないかも知れない。

# 11 ネコミミ少女と結婚しました—02

ミイちゃんと暮らし始めて7日目  
ミアちゃんを捕獲してから4日目

---

薄暗い地下室のベッドの上で、はだかんぼ——手枷足枷と首輪だけの格好をした——ミアちゃんがおじさんに抱っこされながら、お膝の上で座っている。

「それじゃミアちゃん、ごあいさつして？」

「ミアちゃんです♪これからおじさんと、たくさん赤ちゃんを作る練習をいっぱいします♥」

えつちな笑顔でピースをする。

イヤだ。おじさんと赤ちゃんなんて作りたくない！

ミアちゃんとおじさんが手をつないで、ちゅつ♥ちゅつ♥とキスをしてる。イヤだ。やめて。

キスがおわると、おじさんのちんちんを手で「しじ」とこすって、さきつぽにキスをしたり、ペロペロなめたりしながら「おじさん、ちんちん気持ちいい？」と質問する。

おじさんは「うん、気持ちいいよー♪」と、ミアちゃんの頭をなでながら楽し気に答える。

ミアちゃんはちんちんぺろぺろを続けながらナデナデされると、お耳を倒して嬉しそうにしていた。やだ！ミアちゃんの格好をして、おじさんと変な事しないで！

しばらくおじさんのちんちんをぺろぺろ「しじ」とこすっていると、おじさんが「そろそろ赤ちゃんのもど、出そう」と言つてきたので、それを合図にちんちんぺろぺろをやめて、おちんちんの前で大きく口を開ける。

手でのちんちん「しじ」はやめないで、「しじ」と「しじ」とつづると「イクよつ♥おじさんの赤ちゃんのもどつ！」いっぱい飲んでねつ！」と、おちんちんの先つぽから白く濁つたお汁が、びゅるつびゅるつと飛び出る。ミアちゃんの大きく開けた口でそれが終わるまで

受け止め続けた。

おちんちんから出た赤ちゃんのもとがミアちゃんの口をいっぱいにすると、今度はそれを「ぐくつ♥」「くんつ♥」と飲みこみ始める。ミアちゃんがまた口をあーんっと開けて全部飲んだ事を教えて見せると、おじさんは嬉しそうにミアちゃんの頭をなで始めた。

ミアちゃんはお耳を倒してなでなでされるのを、とつても嬉しそうにしていたけど、ミアちゃんはそれを見てとつてもイヤな気持ちになつた。

おじさんからお水を飲ませてもらつて、それでぶくぶくして「ぐくくん。また口のなかをおじさんに見せる。またナデナデにこにこ……。キモチわるくて頭がおかしくなりそう。

つぎにミアちゃんは、後ろからおじさんに抱っこされるようにしておまたを広げる。先っぽから赤ちゃんのもとがまだ滲み出て垂れているちんちんを自分のおまたの穴に当て、ゆっくりと手と腰を動かし、自分のなかに入れていく。

「あ……♥」と、ミアちゃんが嬉しそうにちんちんを自分の中にいれていく。やめて。

ちんちんの先っぽの丸い部分が、おまたの穴にすっぽりと入つた。ミアちゃんは少し苦しそうな、嬉しそうな顔をしている。

ちんちんがおまたの穴の中にぬぷ♥ぬぷ♥つと、どんどんと入つていいく。

ミアちゃんが身体を震わせて、とつても嬉しそうな声をあげる。

ちんちんの半分くらいまで入ると、ミアちゃんの動きが止まる。

ミアちゃんは目をとろんとさせていて、とつても幸せそうにしている。

腰をくいつくいつ♥と動かして、ちんちんでおまたの穴の中をこする。

ミアちゃんが左手で自分のおっぱいの先っぽを、右手でおまたのさきつぽを摘まんでくにくにする。

ミアちゃんのキモチよさそうな声が大きくなる。

おじさんに右手でミアちゃんの右のおっぱいを、左手でミアちゃん

のおまたの先っぽを摘まんでもらう。

ミアちゃんは一緒に触つてもらえてとつても嬉しそう。

キモチよさそうな声がどんどん大きくなつて、おまたから聞こえる水音もどんどん大きくなつっていく。

ミアちゃんの呼吸の間隔がどんどん短くなつていく。  
おじさんがミアちゃんの内ももをガツシリ抑えて、チカラ強く腰を振る。

ミアちゃんがビックリして、とつても苦しそうな泣きそうな叫び声をあげる。

おじさんがちんちんを思いつきり強くミアちゃんの奥に突き入れる。

ミアちゃんの身体がピーンっと仰け反そぞらせると、おじさんもミアちゃんも、じつとして動かなくなつた。

二人の荒い呼吸音だけが部屋に響いき、暫しばらくして――

目を覆いたくなる……。

「はあ……♥はあ……♥ミアちゃん、すつごいキモチよかつたあ……  
♥」

ミアちゃんはおまたの穴をヒクつかせて、自分の中に入つているおちんちんの感触を愉しんでいる。やめて。

「おじさんの赤ちゃんのもと、ミアちゃんの赤ちゃんのおへやに入つてきたの、感じたよ♥」

じんわりと温かくなつたお腹の下の部分を、おじさんと一緒にになででしているミアちゃんは、とつても幸せそうにしていた。もうやめて……。

「ねえおじさん、ミアちゃんね……♥（おしつこしたくなつちゃつた  
♥）」

この地下室には他に誰もいないのに、ミアちゃんは恥ずかしそうに、おじさんの耳元で小声で打ち明ける。

それを聞いたおじさんはにつこり笑つて、おまる代わりの木桶を用意する。

「あつ♥ねえおじさん♥ちんちんは抜かないで、ミアちゃんと一緒に

動いて♥」

危なくないようミアちゃんを抱っこしてもらつて、ちんちんをおまたの穴に入れたまま、しゃがみ込んだおじさんの膝をおトイレみたいにして座る。おじさんの足の間に木桶を置いて準備完了。

「おじさん♥ミアちゃんがおしつこするところ、見ててー♥」

ちゅい——たばたばたばちよぽちよぽちよぽちよぽちよぽ……♥♥♥

おしつこの穴からおしつこが出ていくチクチクとした感触がおまたの穴をキュツ♥と締め上げ、中のちんちんの硬さを強く感じさせて一層深い幸福感が訪れた。

ぶしゅつ♥とおしつこの残りが飛び出し、おしつこが終了する。

「上手におしつこできたね♥」

ミアちゃんの頭をなでなでしてくるおじさんと、それを嬉しそうに受け入れ、顔をあげてキスをねだるミアちゃん。反吐がでそう。

300【しーし】ほどのおしつこがたっぷり入った木桶をベッドの下にどかし、空いたベッドにミアちゃんが仰向けに寝かせられる。もちろんちんちんは入れたまま。

ティッシュでおしつこの穴のところをやさしく拭いてもらえたミアちゃんは、とっても満足そう。

ティッシュをポイすると、おじさんがミアちゃんに覆いかぶさつて、ゆっくりと腰を前後に動かし始める。おまたの中を行き来するちんちんの感触を存分に感じているのか、ミアちゃんは幸せそうにしている。

「あんつ♥ねつ♥?ねえつ♥?おじさんつ♥んつ♥?ミツミアちゃんつねつ♥おつ♥?おじさんのつ♥およめさんにつ♥およめさんになるうつ♥♥」

冗談でしょ……? 感極まつたのか、ミアちゃんがおじさんに結婚の申し込みをした。

おじさんは腰を動かしながら下にいるミアちゃんのおでこにキスをして「いいよ♥?」と返事をした。

それを聞いたミアちゃんは、涙を流しながら嬉しそうにしている。

信じられない……。

おじさんは腰振りを控えめなものに変えると、「結婚式」の準備を始めた。

どこからか取り出した墨に毛筆を浸し、ミアちゃんのおまたのすぐ上——赤ちゃんのおへやの辺り?——に、サラサラと何かを描き始めた。

「ミアちゃんは、おじさんのおよめさんになつて、おじさんの赤ちゃんをいっぱい産んでくれる?」

「うんつ♥おじさんとあかちゃんいっぱい作つてあげる♥」

「それじゃ、ミアちゃんのおてて、ここに置いて♥」

おじさんに言われるがまま、なにか描かれたあたりに右手を置く。それと同時におじさんもミアちゃんのおなかに手を置く。

「おお世に連なる神々よ、この【貞淑な妻】に歡喜と幸福と加護を与え給え」

これは——

「この貞淑な妻は生涯禁忌を犯す事はなく、夫と共に愛を育み子をしてゆく事を誓います」

——魔術儀式だ——

「誓いますって言つて♥」

ミアちゃんのおまたのすぐ上——赤ちゃんのおへやの辺り——に、契約の呪紋(まじない)様が刻まれてゆく。

「はーい♥ちかいまーす♥」

やめて、なにするの!—ミアちゃんの身体に変な事しないで!

おじさんは腰の動きを再開して、ミアちゃんのなかにちんちんを激しく出し入れし始めた。

「あつ♥あつ♥んつ♥はげしつ♥おじさつ♥」

「この貞淑な妻に、褒賞と、生命と、祝福を与え給えー♥」

おじさんがミアちゃんに腰を思いきり押し付け、動きを止める。

「ああああああああああああああああつ♥♥♥♥♥♥」

するとミアちゃんはそれを受けて、背中を思いきり仰け反らせ身体をガクガクつと震わせ始めた。紋様のところに手を置いて、染み込ん

でくる熱を感じているようだ。

瞳は蕩け視点は定まらず、だらしなく開いた口からはよだれをたらし、意味を持たない声を無意識に発している。もし先程おしつこを済ませていなかつたら、これにおもしさが加わつていただろう。

「……はーい、これでミアちゃんが素敵なお嫁さんになれるおまじないはおしまいだよ♥お疲れ様ー♥」

おでこにキスされた。やめてほしい。

荒れた呼吸を整えようとしているミアちゃんのおなかに、ハートを模した紋様が刻まれてしまつた。ああそうか、これはそういうコトだつたのか。

「それじゃミアちゃん、ご挨拶しよ♥」

「……はあい……♥……ミア・【カツテンバウム】つ♥ですつ♥きよ、今日からつ♥おじさんのつ♥お嫁さんに……んつ♥なりました♥は、発情期を迎えたら♥たくさん、赤ちゃんつ♥つくつて、もらいつ♥ますつ♥」

いまだ治まらないキモチよさに翻弄されながら震える手でピースを作つて挨拶をするミアちゃん。

ミアちゃんはミアちゃんだ。ニンゲンみたいに名前の後ろに名前をつけたりしない！これはミアちゃんじゃない！

「これでミアちゃんは、おじさんの赤ちゃんしか産めない身体になつたよ。それと、おじさんとえつちする時は、今まで以上に気持ち良くなる身体にしてあげたからね♥これから楽しみだなあ……つてあれ？ミアちゃん？♥」

ミアちゃんはあまりの快楽と幸福感で失神してしまつたようだつた。

——最悪だ……。ミアちゃんの知らないところで、ミアちゃんのこれからを勝手に決められてしまつた……。

---

「——どうだつた？ミアちゃん。これ昨日撮影したヤツなんだけど……覚えてるかな？」

『……フーッ……フーッ……』

薄暗い地下室の小汚いベッドの上でおじさんに抱っこされながら【魔晶石】で再生された映像を見せつけられていた。

……昨日は、あの首輪をつけられた時からの記憶が無い……。ただひたすら幸せなキモチで過ごしていただけたような、そんな気しかしなかった。それがあんな事をさせられていたなんて……。

「まあ覚えてるわけないかー♥ 昨日は【幸福な者の首輪】をつけたからね。これで覚えていたらビックリだよ」

『……フーッ……フーッ……』

今は猿ぐつわを噛まされているけど、今日はあの首輪をつけていない。だからこうして意識が抵抗できてい。ミアちゃんのおなかに呪紋様を焼き付けられた理由がやっとわかつた。

おじさんは映像の再生中、ミアちゃんを抱っこして、耳を甘噛みしたり、おっぱいの先っぽを指で摘んだり、おまたのさきっぽを指で転がしたり、おまたの穴の入り口を指でいじつたり……イタズラをし続けてている。

そして今——ミアちゃんの呪紋様が焼き付けられた部位は、ぽつこりと膨らんでしまっている。おしつこの穴に挿し入れられた力テークルのせいだ。

カテーテルは高いところに吊るされたガラス瓶に繋がれており、なんかの液体が映像の再生中、ずっとミアちゃんのおなかの中に、ゆっくりだけどたくさん入ってきていた。

おじさんに膨らんだお腹をきゅっと押されると、全身が痺れるくらいおしつこがしたくなつてたまらない。

「今日もいっぱいえっちなことしようね、ミアちゃん♥」

このおじさんに何もできないのが悔しくて涙が出てくる。こんな日常が、一体いつまで続くのだろう。

あの首輪をつけていた方が、楽になるのかな……。

— tips —

【しーしー】  
おしつこの量を測る際に用いられる単位。

ていしゅくなつま

【貞淑な妻】

契約呪詛

妻側の浮気を防止し、血統を保証させる古代の呪い。  
呪詛を結ぶには、互いが強い親愛の情を通わせている事、合意の上での性交中である事、夫の新鮮な精液を一定量子宮内に保持している必要がある。

契約が成ると妻は、夫以外と性交を行つても全く快感を得られなくなるばかりか、激しい嫌悪感を抱くようになる。

逆に夫との性交には非常に深く濃い愛情と快樂が伴うようになり、夫との子を妊娠しやすい体质になる。

【カツテンバウム】

本作主人公、調剤師♂のファミリーネーム。

出したは良いけど出した意味は特にない。

獣人種にはファミリー名乗る文化は無いらしい。

ましようせき

【魔晶石】

希少鉱石

周囲の映像と音声を魔術的に記録・保存・再生できる鉱石。

希少価値が高く、国家間の条約締結時の状況を互いに、もしくは調停役の第三国が証拠保存する為など、使用は重要な要件に限られる。一般人は目にする事はあつても、手に入れる事はまずない。

こうふくなもののがわ

【幸福な者の首輪】

呪魔具 禁制品（許可制）

単純に奴隸の首輪と呼ばれるが、直接的すぎるその名は忌避され、

このような名前で呼ばれる事が多い。

着用者は現状に対して疑問を抱けなくなり、自らを恵まれていると  
思い込まされる呪いがかけられている。

奴隸が奴隸らしくいるにはどうしたら良いか、という命題への答  
え。

相手の人格を否定・洗脳する魔具である為、現在は無許可での所持  
は罪になる。

## 12 ミアちゃん、おしつこ調教♥

階段を降りる足音がして、おじさんが地下室に戻ってきた。

「途中だつたのにゴメンねーミアちゃん、おじさん おしつこしたくなつちやつて♪」

『……フーッ！……フーッ！』

「あははは、怒つた猫ちゃんみたいだね。猿ぐつわを囁まされてちゃ、おしゃべりもできないか」

ミアちゃんの口に囁まされていた猿ぐつわが外される。

『うーつ！はやくつはやく……これつ……取つてよおつ……！』

「あー、随分とお腹がポツコリしちやつたね。そろそろじやないかな」と思つてたんだけど、タイミングぴつたりだつた訳だ』

このおじさんは卑怯者だ。ミアちゃんが泣きそうになつてまでお願いしているのに、それを見てニヤニヤしている。こういうヒトは大嫌いだ。

『ううう……』

ミアちゃんにつけられている手枷足枷は、ベッドに鎖でつながれている。ぱんつは脱がされて、おしつこの穴には透明なチューブを入れられている。

かてーてる、とか言つてたつけ。それが延びて高いところに吊るされたガラス瓶と繋がれてい、なかの液体がミアちゃんのおなかの中にどんどん入つてきて、とつても苦しかつた。

「ホラ、それじゃいくよー♪」

ミアちゃんを起こして後ろに回つたおじさんが、カテーテルをゆつくりと引き抜いてゆく。ミアちゃんのおしつこの穴を傷つけないようとにかく言つてたけど、カテーテルを抜く時にねじりを加える必要はなかつたはずだ。

『い、いだいいい……いたいよおお……』

くくつ、くくーつと、おしつこの穴の中を挿し入れられたカテーテルが動く度、汗と涙と鼻水と、涎と悲鳴が漏れ出てしまう。それらを沢山こぼしてようやく抜き切ると、ものすごく猛烈なおしつこ欲に襲

われて、おしつこの穴をきゅうと締め付けた。

『んううううううううう……お、おまるうー・おまるちようだい！』

ベッドの上でおもらしはしたくない。本當ならトイレで、それが無理なら桶でもいいからそこにおしつこをしなくちゃ……。

おじさんが桶を見せびらかしてきた。【魔晶石】で再生された映像で、昨日ミアちゃんがおしつこする時に使つた木桶だ。もうそれでいいから、早くちようだい！

おじさんから木桶を奪い取り、跨つて、おしつこの穴に込めていたチカラを抜いて……。でも、おしつこが出ない。したくとも出来ない。どうして？ もうおしつこの穴にカテーテルは入つて無いし、邪魔をするものも無いのに……。

おじさんを見ると、ニヤニヤしている。またこの人はミアちゃんに何かしたんだ……。今度は何をしたの？

おじさんは変わらずニヤニヤしながら、ポツケから一本の鍵を取り出した。薄い金色をした、控えめな装飾が施された鍵だつた。

「これでミアちゃんのおしつこをする機能を封印<sup>ロック</sup>したんだ♥」とおじさんは楽しそうに言つた。様々な機能や現象を封印できる魔法の鍵【世界樹の小枝】のチカラだと。

【世界樹の小枝】は、昔むかし、悪い魔王のチカラを封印する為に神さまたちが作つたと言う、おどぎ話に出てくる道具の名前だ。まさか実在した秘宝だつたなんて……。それを、なんでおじさんが……？

「うううう……おしつこ、おじつごじだいよおおつ……」

頭に浮かぶ疑問もあつたが、限界だ。おしつこの事しか考えられない。おしつこは出ないのに、涙は我慢していても悲しいと出てくる。もうイヤだよお……。

「それじゃミアちゃん、おじさんにお願いしてごらん？ おしつこさせてくーだーさいつて♪」

「いやー！んー！」

後ろから抱え込もうとしてくるおじさんを押しのけたかつたけれど、赤ちゃんのチカラしか出せない今のミアちゃんでは、おじさんから離れる事もできない。

おしつこが溜まつて膨らんだおなかの所をおじさんに軽く押し込まれただけで、体中に電気を流されたかのような衝撃が走った。おしつこが漏れてしまいそうになつたけど、おじさんの【許可】が無ければ、おもらしすることもできない。それでもミアちゃんは負けたくなかつた。おじさんにお願いするなんて死んでもイヤだつたから。

おじさんは、やれやれと肩をすくめつつもニヤニヤと嫌らしい笑顔を浮かべて、小さくて細くて柔らかそうなツブツブした棒を取り出す。

「ミアちゃん、このツブツブした棒だけど、これでなにをするか分かる？」

嫌な予感がする。それもどつても。

「これはね、ミアちゃんのおしつこの穴に入れるために用意した棒だよ♪」

——やつぱり。さつきまでおしつこの穴に入れられていた力テー・テルよりずっと細いけど、形がとつてもいやらしい。ちっちゃな玉が連なつて、一本になつているような棒。なんでそんなでこぼこしているの？ そもそもおしつこの穴は、なにかを入れていいところじゃない！

魔晶石で記録された昨日のえつち——ミアちゃんにその記憶はないけど——を無理やり見せつけられて、ミアちゃんのおまたはヌルヌルになつて。そこにこすり付けられてヌルヌルにされたツブツブの棒が、ミアちゃんのおしつこの穴に挿し入れられた。

『……ああああああああ♥』

「ほらほら、おしつこの穴、気持ち良くなつてきたでしょ～？」

カテーテルのせいでヒリヒリ痛むおしつこのあなの中で、ツブツブの刺激がやさしく響いたのが予想外だつた。おしつこの穴をきゅつ♥と締めても、その細さとヌルつきで奥に奥にと侵入を止められない。痛い。けど、きもちいい……ほんのちょっとぴりだけ。

「ほらミアちゃん♥ミアちゃんがこのツブツブ棒を使って、自分で気持ち良くなれたら、おしつこ出していいことにしようか♥」

これ以上は流石にかわいそうになつてきたしと、おじさんがミア

ちゃんの手に、おしつこの穴に入っているツブツブ棒の柄を持たせてくる。

「あ……♥はひつ……♥んつひつ……♥」

おじさんに足を広げられ、焼けるように熱くなつておしつこの穴の中で、ツブツブの棒をゆっくり出し入れすると、背中に電気が流れているような気持ちよさが走る。

『ん　ん——つ！』　♥　♥　♥

「ほらほら、もうちょっとだよー、がんばってー」

ツブツブ棒による甘い間に慣れて心地よくなつてきた瞬間、おまたの先っぽを指に摘まれ、おまたの穴に指を入れられる。もう、みあちゃんのおまたのどこがキモチイくなっているのか、わからなくなってきた。

おじさんは、おまたの穴の中からツブツブ棒が動いているところを指で押さえて刺激を加えるのを忘れなかつた。『こうやつてやるんだよ』と、おじさんとおなじようにおまたをいじる。

きもちいいのがおまたからひろがつてくるう♥おまたのさきっぽ♥ゆびでつまんでつ♥おちつこのあなあつ♥つぶつぶぼうがずるつずるつて♥おまたのあなつ♥あなたのなかから、つぶつぶぼうつ♥おさてごりごりしてえ♥♥おつ♥おつぱいのさきっぽつ♥おつぱいのさきっぽ、おじさんにこりこりされてえつ♥きもちいいつ♥

気持ちいいのが限界にきて、背中が思いつきり仰け反り、おしつこの穴からツブツブ棒がぷふつと抜けると、ミアちゃんの身体の中で力チャリとカギが解ける音が聞こえた。その次の瞬間——

「あつ……♥ひああああああああああああああ……♥」

びゆるつ♥びゆるるるつ♥びゆびゆううううつ……♥びゆるつ  
びゆるるつ……♥♥♥

やつとおしつこできた……ミアちゃんのおまたからおしつこが飛び出した。おしつこがおしつこの穴の中を通つて外へ出るたび、すごくキモチイくなる。何かおかしい。見てみると、おしつこに少しどろみがついていて、いつもみたいに、ち一つと出て行かない。サラサラしていなくて、とろつとしている。このとろみ、どこかで見たような。

しかも、最近、何度も、何度も。

びゅるつ ♥ びゅるるるつ ♥ びゅーつ ♥ びゅびゅつ ♥ ぶびゅつ ♥

「んひつ ♡ んんんつ ♡ はつ ♡ あつ ♡ ふああつ  
♥ んあああつ ♡」

びゆるびゆると出でくる、ところになつたおしつこがたばたぱつと桶に溜まつていく。ところになつたおしつこが、おしつこの穴の中をひどく刺激して、ミアちゃんの腰がガクガク震えてしまう。そんなミアちゃんを見ておじさんが言う。

「気持ちイイでしょ♥最初に飲ませたお薬で、ミアちゃんのおしつこを男の人の精液みたいにとろとろにしてあげたんだ♪おしつこの道を通る度、男の人の射精と同じくらいのキモチよさを体験できるハズだよ♥」

んひニ ♦ ひいニ ♦ はニ ♦ はひニ ♦

ミアちゃんのおしつこがこんなになつちやつたのは、おじさんに飲  
ませたあの薬のせいだつたのか……。いまもびゆるびゆるとお  
しつこが出て いつて いるのに、膨らんだお腹はまだポツコリしたまま  
だ。

しーに近いんじやないかな？」

1000しーしー……？ よくわからないけれど、その量を出し切るまで、このきもちいーのがずーっと続いてしまうのか……。しつぽがぴーんとして、頭の上にあるお耳がぽつぽつて熱くなる。

ぶぎゅつ ♪ びゅるるるつ ♪ ぶぎゅうつ ♪

おしつこいやせーが止まらない  
♥

あたまがおかしくなる

『いっぱいおしつこ出たねー。ほんとに1000しーしーくらい出たんじゃないかな♥』

1000しーしーの排尿を我慢するのは成人男性でも結構キツイ。それなのに、ミアちゃんの小さな身体に同量の我慢を強いたのは流石に無理があつたか。ミアちゃんはおしつこ射精に疲れてベッドでぐつたりしている。あれだけ膨らんだお腹も今では引っ込んで元通りになり、呼吸に合わせて上下している。

ミアちゃんのおしつこざあめんがたっぷり溜まつた桶を床に置き、ぐつたりしている姫君を抱き上げる。快感にやられた愛らしい幼子の寝顔は涙と鼻水と涎でぐしゃぐしゃになつてしまつている。おまたも同様に、ミアちゃん自身が分泌した体液でぐちよぐちよだ。それらを優しく整えてあげてキレイにしてあげよう。

美少女の痴態を間近で眺めていたせいもあり、僕の股間はパンパンに膨れあがつていた。それに、昨晩ミアちゃんに施した【貞淑な妻】の呪いの効果を確かめてたくてウズウズしている。あの契約を結んで以降、まだミアちゃんとおまんこしていなかつたから。

しかし、すぐに突っ込んだりはしない。もう一つ、彼女に試したい道具がある。ここまでミアちゃんの身体を火照らせたのには理由があるのだ。そろそろ彼女には心変わりをしてもらおう。僕の事を嫌っているのなら尚更、その落差を愉しませてもらおう。

---

— tips —



【世界樹の小枝】

せかいじゅのこえだ

魔道具

見た目は古びた金属製の鍵。神話の時代に造られたモノ。

様々な機能や現象に鍵をかけるがごとく、世界の権能を制限する能力がある。

鍵を持たない扉に使用すればその扉は開かなくなり、花のつぼみに

使用すればその花は開かなくなる。風に使用すれば世界から空気の対流はなくなり、太陽に使用すれば世界は闇に閉ざされる。

ただし、使用するには効能に応じた魔力消費が必要になり、あまりに強力な権能に作用させようとしても、卑小な生命体程度が保持している魔力量では効果を発揮しない。



### 13 ミア、肉体調教。精神はそのままに。

おしつこ射精事件のおかげでぐつたりしちゃつたミアちゃんを尻目に、次の調教のアイテムの準備をする。

とりだしたるは【淫魔の薔】という、女の子をえつちな事が大好きな淫魔に変えてしまうと言う、世の男子垂涎の呪具。

これを使ってミアちゃんを、えつち大好き淫魔ちゃんにしてみようと思います。

快感の余韻と疲労によつて現在失神中のミアちゃんのおまたを開き、えつちなお汁でテラテラ輝いているおまんこ穴に【淫魔の薔】を奥まで指で押し込む。説明書によると、膣内に種を挿入してから暫く待つと花が咲く、とあるが……花？　おまんこ穴から花が生えてくるのか？

ちよつと怖い想像をしていると、【貞淑な妻】の契約呪詛によつて刻まれた下腹部のハートマークあたりが薄つすらと光り出し、そこから植物の芽らしきモノが生えてきた。下腹部を貫いてきたのかとギヨツとしたが、どうやら【魔晶石】で再生された映像のような幻影の一種だつたようで、触ろうとしても触れなかつた。

芽吹いたそれは成長を続け、茎をのばし葉を生やし薔をつけ、最後には白色の花を咲かせた。美しいそれは幻影であるにも関わらず、ほのかに柑橘類のような香りを放つと儂く散つて薄れて消えた。

幻の花が生えた根元を見ると、【貞淑な妻】で刻まれたハートマークの周囲に、別の紋様が次々に浮かんでくる。完成したのか、それらが成した形状は、どこか子宮を彷彿とさせる。

膣内に挿入した指先から、いつの間にか種の硬い感触が消えていた。……これで【淫魔の薔】を正しく使えた事になるのだろうか。そう思つていると、ミアちゃんのおまんこ穴がヒクヒク♥？とうごめき出し、内部が蜜でしとどに濡れてきた。

「んつ♥なつなにこれえつ♥」

ビクン！と、突然身体を仰け反らせ、ミアちゃんが目を覚ました。おまんこ穴をぎゅうっと締め付け、腰をガクガク震わせながら驚いて

いる。

「またつ・ミアちゃんになにかしたの!?」

僕から離れようと後ずさりする際に、おまんこ穴に挿し入れられた僕の指がちゅぱ・っと抜け、糸を引いた。全身を駆け巡っている性衝動に困惑しているのか、自らの下腹部を手で覆っている。この反応は素晴らしい。思った以上の収穫かも知れない。

淫魔の花をつけた対象は、自己の種族に淫魔の特性が追加される。ミアちゃんであれば猫獣人の淫魔、という風に。

淫魔は性交によつて相手から生命エネルギーを得るため、常に発情期である人間との相性が抜群に良い。しかしその反面、人間が手玉に取られる事も多く、利用には注意が必要となる。

ミアちゃん用に用意した【淫魔の薔】は、低品質な粗悪品だ。なぜならミアちゃんに身に付けて欲しかったのは淫魔としての本質であつて、淫魔としての人格や経験、能力・技術などは不要だからだ。

本人の性格はそのままに、意思に關係なく性欲が非常に昂るようになる点と、肉体の特性が淫魔のそれになるという点を身に付けて欲しかつた。

今のミアちゃんは、その身を焼くほどに昂つた性欲と、淫魔としての食欲の渴望に苛まれている。それを満たしてくれる相手は蛇蝎の如く嫌つていい目の前の男。この条件下で、ミアちゃんはどうするだろうか？

---

ミアちゃんのおしつこアクメを堪能させてもらつた僕のチンポは、早くミアちゃんに種付けしたくて天を仰いでいる。それを壁端まで追い込んだミアちゃんの眼前に突きつける。

僕に対して反抗的なミアちゃんに、キスやフェラチオの強要は御法度だ。最悪の場合、噛みつかれる恐れがあるからだ。ではなぜこうして急所をさらけ出しているのかというと、彼女の内に宿つた燐りを試すためだ。もしここで反抗的な態度をとるなら、淫魔因子の追加は失敗と言う事になる。

いつもだつたらパイと顔を背けてしかめつ面をするだけだが、果

たして……。

——ぐくつ——

♦ 大きく生睡を飲み込む音が聞こえた。ミアちゃんの視線は僕のチンポに釘付けで、猫が興味津々なモノを見付けた時のような耳と尻尾の動きをしている。これは、成功したと思って良いだろう。

♥ おじさんが近づけてきたちんちんを見ていたら、口の中につばがじゅわって溢れてきた。でも、それでつばを飲み込むだなんて、まるでミアちゃんがちんちん欲しくて緊張しているみたいじゃない！ごくつて音、聴かれてたら嫌だな。恥ずかしい。それにしても、急に部屋の中が暑くなってきた気がする。呼吸が苦しい。

♦ それでもやはり嫌は嫌なのだろう。チンポをぐいっと口元に近付けると、その分ミアちゃんは後ろに下がるも、背が壁にぶつかって動きが阻まれる。更に口元に近付くチンポ。いつの間にかほんの少し開いた口。チンポに少女の荒い吐息がかかる。

♥ やだ、おじさんがちんちんをミアちゃんに近付けてくる……。あの映像の時みたいに、ミアちゃんにペロペロさせたがっているんだ。……ちんちんから目が離せない。それにちんちんって、こんなにいい匂いがするんだつけ……？

♦ ついにミアちゃんの口に僕のチンポが接触する。さきっぽへのキスに留まっているのは、未だにミアという少女の意地が残っているせいだろう。しかしそれも長くは続くまい。彼女の口は開けるか閉じるか迷っているようにぷるぷると震え、熟した生殖器の蒸れた匂いを嗅ぐのに忙しいのか鼻息は荒く、その目はとろんと蕩けながらもチンポへの眼差しを切らさない。所在なきげに垂れている彼女の両手を導いてあげると、水を掬おうとするような手つきで玉袋を包み込んでくれた。

♥ おじさんのちんちんがミアちゃんのくちびるにキスすると、おくちからおまたの方にビリツつて電気が走った。ちんちんとキスするのが、こんなにもきもちいいだなんて……こんなこと、前はなかつたのに。ちんちんの匂いを嗅ぐと、頭の中がクラクラしてくる。おじさんに手を引っ張られて、ちんちんの根元にある袋を触られた。

ちよつと揉んでみると、なかになにか、小鳥のたまごみたいなぶにぶにとした球が右と左にいつこずつ入っているみたいだつた。たぶん、これがざあめんを作つてゐる所なんだろうなつて思えた。それがとつてもかわいく思えた。

♠ ミアちゃんの頭を手で軽く引き寄せるとい、抵抗なくチンポを口の中に受け入れ始める。自分から咥え込むことは出来ないが、押し入れられると抵抗はしないらしい。チンポの裏筋に小さな舌がぬるるつと擦れると気持ちがいい。少女の口内は狭く、亀頭をすっぽりと口に含んだのはそのままに、やや変則的で技術も何もないものの、フェラチオが一応の完成を迎えた。なんだか感動して泣きそうになつた。

♥ おじさんに頭を押さえられてちんちんを咥えさせられた。ミアちゃんは嫌だつたのに、ムリヤリだ。ちんちんがくちびるを割つておくちのなかに入つてきて、ミアちゃんのべろや上のあごに当たつた瞬間、きもちいーのが全身に走つた。まるで、おまたの穴にちんちんを入れられた時みたいに、おくちのなかがきもちよくなつっていく……。

♠ 赤ちゃんがお母さんのおっぱいを貰つている時のように、ちゅうちゅうとチンポに吸い付いてくる様子が最高に愛おしく感じる。

♥ ちんちんのさきつぽから、おいしいおつゆが出てゐるのが分かつた。おしつこでもざあめんでもないこれはなんなんだろう。ちゅうちゅう吸つて飲み込むと、のどの渴きがすこし収まつたけど、おまたの上の方がきゅー……ん♥ つてむずがゆくなる。もつとほしい、もつとのみたい。

♠ ミアちゃんは一生懸命チンポの先っぽに吸い付いている。だが、それだけだ。なので僕の方も手伝つてあげようと思う。チンポの竿の部分はフリーになつてるので、自分で扱いて足りないぶんの快感を補う。先っぽと玉袋はミアちゃんが愛撫してくれてるので、ここだけで十分。尿意にも似た射精感が昂つてきたところで、遠慮なく、ミアちゃんのお口の中で射精させてもらう。

♥ おじさんが自分でちんちんをこじこじし始めると、おいしいおつゆが溢れてきたので、ミアちゃんも一生懸命ちゅうちゅう吸い付い

た。おじさんが「出るよ」と言うと、ミアちゃんのお口の中に、どろつとしていて♥なまあたたくて♥なまぐさくて♥ちょっとにがくて♥でもおいしくて♥とつてもキモチイくなるざあめんが♥どぶどぶーつて流し込まれてきた♥

ベロの上や下、ほっぺと歯茎のあいだ、のどの奥がおじさんのざあめんでどうどろになると、あたまのなかがぼーっとしてきて♥おひるねしちゃいそくなくらいくらくらしてきて♥とつてもキモチイくなれる♥

♠ミアちゃんのお口の中を精液でたっぷりと汚してあげると、ミアちゃんはフェラチオアクメに達していた。体全体をガクガク震わせ、立っているのもやつとという状態になっていたのが可愛い。危なくないよう正面を向き合つてにベッドに腰を降ろし、少女を抱きかかえる。

♥きもちいーのが♥おくちと♥おまたと♥あたまの中で♥ぐるぐるしている。足ががくがくしてうまく立てないと、おじさんがだっこしてくれた。ベッドにすわると、おじさんのちんちんが見えた。まだピンと上にむかつて立つてる。

♠背面座位の体位を取り、ミアちゃんのおまんこにそそり立つチンポをあてがう。あてがうだけで、ひとまず様子を見る。嫌がつて暴れたりするかとも思ったが、意外にも自分から腰をくねらせ、おまんこ穴をチンポに擦り付け始めた。時折思い出したかのように「いやあ♥」「やだあ♥」「ダメえ♥」と、拒否するセリフを口にしていたが、おまんこはとろとろに濡れ、膣口はきゅつ♥きゅつ♥と収縮してチンポを奥へ吸い込もうとするし、小さな身体は発生する快感を味わつていた。恐らく彼女の中では、本能と理性が壮絶な戦いを繰り広げているのだろう。

♥おじさんに後ろからだっこされて、ミアちゃんのおまたにちんちんの先っぽをくつつけてきた。ミアちゃんのおなかに赤ちゃんを作る気だ。ミアちゃんの心はいやだつて思つてているのに、ミアちゃんのからだは言うことをきいてくれない。ミアちゃんのからだは、ちんちんに中に入つてほしくて、こしをくいくいうごかしておまたのあなに

ちんちんをこすりつけてくる。おまたのあなたにちんちんの先っぽがぬるつ♥ぬるつ♥て当たると、あたまのなかがびりびりしびれておかしくなりそうになる♥

♠僕がミアちゃんを抱っこしている腕の力を抜けば、そのままおまんこにチンポが入ってしまう状況だが、彼女が足にチカラを入れれば容易に挿入を阻止できる状況ではある。なので、徐々に腕のチカラを抜くと、拍子抜けするくらいぬぷ♪♪♪と、ミアちゃんのおまんこ穴にチンポが飲み込まれていった。その様子を逐一報告してみても、彼女は快感に身を震わせるだけで、うわ言のように「やめてよお♥」とか「あかちゃんできちやうのいやあ♥」と咳いて拒否反応を示すものの、挿入を阻止する素振りは全く見せなかつた。

♥おじさんが「ミアちゃん、おまたの穴におちんちん入っちゃうよ♥」と言うと、おじさんのちんちんがミアちゃんのおまたの中に入ってきた♥やだやだやだやだやだ♥またおじさんが「ほら、先っぽ入っちゃう♥」と言うと、ミアちゃんのおまたのあながぐぐつと広げられちゃつた♥「先っぽの丸いところ、全部入っちゃつたね♥」と言われて、ミアちゃんのおまたにおじさんのちんちんがどんどんおくまで入つて行つてるのがわかつた♥おじさんと赤ちゃんとんて作りたくないのに♥だめ♥だめなのに、おちんちんがどんどんミアちゃんのおくに入つてきて、ミアちゃんがキモチイくなつちやうう♥

♠ミアちゃんの最奥まで挿入を終えたので、試しにミアちゃんの自由にさせてみる。現在の彼女は、【貞淑な妻】と【淫魔の薔】の二つの効果によつて、今までとは比べ物にならないほど強力な快楽を味わつてゐるはずだ。すると思い通り、彼女自身で腰を動かし始める。たどたどしい動きではあるが、おまんこの快楽を味わいたいとする彼女の気持ちを始めて垣間見れた。

♥きもちいいい♥おまたのなかでちんちんうごかすの♥きもちいいい♥だめなのに♥ちんちんきもちいいのだめなのに♥いまはちんちんがおまたの中にいることがとつてもうれしくかんじちやつてる♥からだがぜんぜん言うこと聞いてくれないつ♥こしがかつてうございて♥キモチいいのがぜんぜんおわつてくれない♥おまたのあな

からちんちんがぬけていく時がすぐキモチいい♥おまたのあなたのなかにちんちんが入つてくる時がすぐキモチいい♥おじさんのちんちんが♥だんだんすきになつていつちやう♥やだ♥やだやだあこんなミアちゃんじやないよお♥

♠先ほどまで、自らの子宮に僕のチンポを叩きつけるように腰を振つていたミアちゃんだつたが、キモチよさに限界が来たのか動きが極端に悪くなつた。僕ももうすぐ射精しそうだつたので、ミアちゃんをベッドに仰向けにし、のしかかるように種付けプレスの体位に移行する。杭打ちの要領で、ミアちゃんの子宮にチンポを突き立て、おまんこ快楽を与えてあげる。すると、ミアちゃんがうわごとの様に、僕の事を「ぱぱ♥ぱぱあ♥」と呼び始めた。これは、どこかで見た事のある展開だ。

♥おじさんにのしかかられて、おまたのあなたにちんちんがずぼずぼ入つてくる♥きもちよすぎて、ミアちゃんはもう、よくわからなくなつてきた♥あたまのなかがくちやくちやになつた時、とつてもしあわせなゆめをみた♥みあちゃんのまわりで、ちつちやなこが3にんいて、みあちゃんのことをままつて、おじさんのことをぱぱつてよんでもた♥みあちゃんのおなかがおつきくなつてて♥またおじさんにちんちんをいれられてきもちよさそうにしてた♥まつててね♥もうすぐぱぱがあかちゃんつくつてくれるからね♥まま♥まま♥まま♥うん♥ままもみんながだいすきだよ♥……そんな、とつてもしあわせな、ゆめ……♥

♠ミアちゃんのおまんこは、まるで逃<sup>あつら</sup>えたかのように僕のチンポにぴつたりと吸い付き、的確に弱い部分を責めてくる。この短時間で僕のチンポの特性を見極め、精液を搾り取りに内部を変化させたのだろう。ミアちゃんの最奥にぐぐつとチンポを押し付け射精準備を完了させる。すると、子宮が口を広げてチンポに吸い付いてきた。まるでフェラチオの様に。精液の一滴も逃がさないと言わんばかりだ。これが淫魔因子を取り込んだミアちゃんのおまんこのがと、驚きを隠せなかつた。

♥おじさんのちんちんがミアちゃんのいちばんおくにおしつけら

れてきた♥ぎゅううううつておしつけられるだけで、あたまのなかがまつしろになりそう……♥おじさんはこのままミアちゃんのおまたのなかでびゅつびゅつてするんだろうな。ミアちゃんのあかちゃんのおへやが、いりぐちをめーいつぱいひろげて、おじさんのあかちゃんのものとをもらおうとしてるのがわかる♥きっと、あかちゃんのものとがはいつてきたら、ものすぐきもちいくくなつちやうんだろうな♥ミアちゃんのこころは、おじさんのことなんてだいきらいなのに、ミアちゃんのからだはおじさんのがだいすきになつちやつてる♥ちんちんからざあめんをもらえるなら、よろこんでおまたをぬるぬるにしちゃうんだろうな♥ミアちゃんのからだはミアちゃんのいうことをきいてくれないから、さつきみたゆめのように、これからいつぱいあかちゃんうまされちやうんだろうな♥ずっと、このくらいちかしつで……♥ああ♥おじさんのちんちんがおまたのなかをいつぱいこすつて♥だんだんきもちくなつてきた……♥たすけてあげられなくてごめんね、ミイちゃん……。だめなおねえちやんでごめんね……。おやすみ……♥また、あした……ね♥

♥びゅるるるつ♥びゅうううつ♥びゅるつ♥びゅるるるつ♥ぶ  
びゅうつ……♥

「♥♥♥♥♥うにやあああああああああああああああああああん♥♥♥♥♥」

ミアちゃんの子宮口にチンポを強く押し付け、近い将来、ミアちゃんが身籠る子供の遺伝子を、これでもかと言う程の量を注ぎ込む。淫魔となつた子宮が口を広げてチンポに吸い付き、竿の中から出られなかつた分の精液すら吸い上げられるという奇妙な体験をした。

当のミアちゃんは恍惚とした表情で自身の指をしゃぶつている。ちゅうちゅう♥と。流石双子の姉妹。アクメの余韻の過ごし方も同じ。

ミアちゃんに掛けた【貞淑な妻】と【淫魔の薔】……。両方を使われたミアちゃんの性感は、僕の想像もつかないレベルで高まつているだろう。だからこそ、徹底的に性感の快楽に溺れさせてあげたい。僕の事を嫌いなままで、赤ちゃんを作るのは大好きにしてあげるからね……♥

◆◆◆ t · i · p · s ◆◆◆

## 【淫魔の蓄】

いんまのつぼみ

呪具

柑橘類の種のような外見をしている。

被使用者の種族に強制的に淫魔の因子を追加する。人間種ならば、人間種の淫魔。獣人種であれば獣人種の淫魔、という風に。変化は半永久的であり、解除は困難。

モノによって品質が異なる場合がある。

皮肉を込めてエンジエルエツグなどと呼ばれる事も。

## 【淫魔】

いんま

種族名

対象の性欲を摂取して生きる寄生情報体の名称。またはそれに寄生され、淫魔の因子を持たされ変貌した者たちの名称。別名ではサキユバスやインキユバスなどと呼ばれたりもする。

別世界の存在である前者が、こちらの世界で活動する為に使用する中継器としての役割が後者である。

寄生された知的生命体は、非常に好色的になり、性交に適した性質・肉体に変化する。過去、高純度の淫魔因子に寄生された者が、国を傾ける原因となつたほどの個体に成長した。



# 14 ミアちゃんとミイちゃん仲良し姉妹

二人の調教を始めてから×日

♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥  
お互いの肉がぶつかる音が、寝室に小気味良く響く。ベッドに仰向  
けに寝かせた少女に覆い被さるようにして、小さなお仔さまんこに不  
釣り合いなサイズのオトナちんちんを出し入れしてあげる。

「♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥」  
♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥  
腰を振るリズムに合わせて可愛い喘ぎ声を上げてくれるミイちゃん  
が愛おしい。初めの頃は、ここまでスムーズに出し入れできなかっ  
たよなあ……と、しみじみと感慨に耽ふけってしまった。

♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥  
「♥あつ♥ぱぱつ♥あつ♥ぱぱあつ♥あつ♥あつ♥ミイちゃんのつ♥  
おまんこつ♥おまんこきもちいーのお♥もつとお♥もつとしてえ♥」  
『パパも気持ち良いよつ♥ミイちゃんがあかちゃん産めるおねえさん  
の身体になれるように、神様にお祈りしながらパパの精液、射精して  
あげるからねつ♥』

「♥うんつ♥ちょ一だいつ♥ぱぱのつ♥あつたかいざあめんつ♥ミイ  
ちゃんのつ♥おなかにつ♥いつぱいちょ一だいつ♥あつ♥あつ  
あつ♥あつ♥」

少女の腰をがつしり掴んでぐぐっと腰を押し付けるのは、絶対に逃  
がさないという意思表示。あかちゃんのおへやの入口へ、射精限界ギ  
リギリのオトナちんちんを♥くちゅくちゅつ♥となすりつける。

♥どぶつ♥どぶどぶつ♥びゆるるつ♥ぶぴゅつ♥ぶびゅううつ♥  
「♥ふにやああああああんつ♥」

穢れを知らない清き幼き聖域が、穢れにまみれた大人の獣液に満た  
された事で歓喜に震え、少女を絶頂へと導いていった。  
ミイちゃんがアクメ余韻に浸つて♥ちゅうちゅう♥と指をしゃぶ

り出したように、少女の子宮もまた、元気な子種をおいしそうに受け入れてゆく。自身のどの部分に熱が侵入してきたのかを教えるように、空いた手で下腹部を撫でさすつている。

彼女たちを監禁して調教を始めてから、どれくらいの日数が経過しただろう。降雪期も半ば、外には深々と雪が降り積もる。猫獣人である彼女たちの発情期がもうじき始まるだろう。

獣人族の多くは仔を成す為に発情期に交尾セックスをするが、発情期を過ぎてからは、愛を育んだり快楽の為の性行為を行わないのだろうか。それはなんだか勿体無いよう思う。

人生で初めての発情期を迎える前に、彼女たちには性の快楽を教え込んであげた。結果、発情期でないにも関わらず、こうしてベッドの上で情熱的に愛し合う事が出来ている。

射精を終えてもミイちゃんからオトナちゃんちんをすぐには抜かず、生殖器同士が生々しく繋がっている所を、後ろ向きに抱っこしている少女に見せつける。

『ほらほら、ミアちゃんもおじさんとおまんこしてる時、こういう風におちんちんと繋がってるんだよ♥』

「♥ んんんーつ ♥」

ベッドで仰向けに寝ているのが妹のミイちゃん。ミイちゃんと生殖器同士で繋がっている僕。その間に挟まれて僕たち二人のらぶらぶ種付けえっちを見せつけられていたのが姉のミアちゃんである。

♥ ぬちゅつ ♥ くちゅつ ♥ ぬちゅつ ♥ くちゅつ ♥ ぬちゅつ ♥ くちゅつ ♥

「♥ んつ ♥ んおつ ♥ んーつ ♥」

後ろから指を這わせ、ミアちゃんのおまんこを♥？くちゅくちゅつ♥？と愛撫してあげる。ミアちゃんは強制的に味わわされる快樂に、身をよじつて耐えるしかできない。

それに加えて目の前で愛情たっぷりにおまんこされた妹の姿を見せつけたのは随分と興奮できたようで、僕のオトナちゃんちんの根元に滴つてくるほど濡れ濡れになっていた。

ミアちゃんの肉体は【淫魔の薔】を用いて強制的に淫魔化させ、常

に性的興奮に苛まれる身体にしてあげた。直接間接どちらでも、容易に興奮状態に陥らせることが出来る。慣れればある程度性欲を抑えて生活できるようになる。そうだが、淫魔となつて間もないミアちゃんにそれはできないだろう。

本日のミアちゃんには、両腕わ後ろ手に拘束し、筋力を赤ちゃん並みにする魔道具の手枷足枷はもちろん、魔術的な効果は一切無いねームプレート入りの鈴付き首輪を付け、猿ぐつわ代わりにおしゃぶりを咥えさせている。

もはやミアちゃんを縛る枷は彼女に必要ないのだが、拘束される事で興奮を覚える性質持ちな様なので、これからも活用してゆこう。本人はそれを頑なに認めないが……。

まだまだ精液が足りない足りないと、ヒクついて離そうとしてくれないミアちゃんのおまんこからゅつくりとオトナちゃんちんを引き抜くと、ミアちゃんの「♥あ……つ♥あ……つ♥」という喘ぎ声も手伝つて、ミアちゃんの視線が妹の生殖器の結合部分に注がれてゆく。

ミイちゃんから抜き出されたオトナちゃんちんが束縛から解放され、思いきり反り返ると♥ぺちんつ♥とミアちゃんの下腹部に当たつた。  
『まるで、ミアちゃんにおちんちんが生えたみたいだねえ♥』

「♥ふーつ♥ふーつ♥ふーつ……♥」

妹の愛液でテラテラ光るオトナちゃんちんを食い入るように見つめるミアちゃん。おしゃぶりをしているために鼻からしか呼吸ができます、必然的に彼女の興奮の度合いが呼吸音からよくわかつてしまう。

ふとももを下から抱え、今度は姉のミアちゃんのおまんこにオトナちゃんちんをあてがい、挿入する。♥ぬぷぷ……つ♥と、ゆっくりと、だが確実に、ミアちゃんの奥へ侵入してゆく。

「♥ふやああああむつ♥」

突然の異物侵入に驚いたのか、ミアちゃんのおまんこが僕のオトナちゃんちんを排除しようと締め付けてきた。しかしミアちゃんのおまんこから貰つてきた愛液とミアちゃん自身のおまんこが分泌した愛液とでぬるぬるになつた僕のオトナちゃんちんは、抵抗をものともせず奥へ奥へと侵入してゆく。

時間をかけてミアちゃんの最奥に到達した。女の子の最も大切な部分にオトナちゃんちんの先端をこすり付け、ミアちゃんが分泌した愛液と僕のカウパー汁を子宮口で混ぜ合わせる。抱っこしていたミアちゃんをミイちゃんの上に押し倒す。双子の姉妹の愛らしいおまんこが上下に並ぶ姿は感動なのだ。

♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥  
「♥んつ♥んんつ♥んんーつ♥ん?つ♥んん?ーつ♥」

腰を振るたびに、ミアちゃんの小さなお尻の肉とぶつかる独特な音が鳴り響いていく。後ろ手に拘束されたミアちゃんの腕を乱暴に掴み、オトナちゃんちんを出し入れしてあげると、なんだか強姦しているような錯覚に陥り、嗜虐心に興奮を覚える。

臨戦態勢のオトナちゃんちんから容赦なく叩かれ突かれた生殖器からミアちゃん本人に、大量の快楽信号がおくられる。いま牡オスと交尾しているから、早く排卵しろとの催促だ。精子が気持ち良く奥まで泳げるようになると受け入れ態勢を整える為に、子宮内から♥?とふとふつ♥?と粘液が分泌されてくる。

日に日に量が多くなってきたそれは、連日繰り返してきた赤ちゃんとを作る練習の賜物であり、未だ仔を宿す準備が出来ていない子宮の成長を順調に促してくれている。

♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥たんつ♥  
「♥んつ♥ちゅつ♥んつ♥ちゅつ♥んつ♥んつ♥ちゅつ♥んつ♥」

アクメ余韻が落ち着いてきた妹のミイちゃんは、姉が咥えているおしゃぶりを外してキスをしていた。ミイちゃんはキス魔の傾向があるからな。

今までにもくちびるだけのキスは経験があつただろうが、下を絡ませ合うキスを姉妹ではるのは初めてだろうな。ミアちゃんの背中の緊張からそれが読み取れた。

神聖ささえ感じる姉妹の濃厚なキスシーンに興奮を覚え、気付ければオトナちゃんちは射精まで間もなくのところにいた。

そうそう、ミアちゃんの膣内で射精する際には、ちょっととしたエチケットが存在する。

『ミアちゃんつ♥おじさんそろそろ精液射精するよつ♥ミアちゃんの事、無理やり孕ませちゃうよつ♥』

「♥だめつ♥なかつ♥？ダメえつ♥あかちゃんやだつ♥にんしんいやあつ♥」

♥びゅるるつ♥ぶびゅつ♥どびゅるるつ♥どくつ♥どくどくんつ♥

『あ～♥おまんこのなかで射精出来て、とつても気持ち良いよ～♥ミアちゃんはおじさんに、無理やりお母さんにされちゃつたねえ♥ホラホラ、おじさんのざーめんが、ミアちゃんのあかちゃんのおへやを、いつぱい汚しちゃつてるよ～♥』

「♥いやつ♥いやいやいやあつ♥にんしんしちやうつ♥おじさんのあかちゃん、にんしんしちやうよおつ♥やだやだやだああああつ♥♥♥♥」

♥

「背中を仰け反らせて絶頂——。ミアちゃんは、無理やりに犯される、孕まさるというシチュエーションで非常に強く興奮するらしい。

どうやら

「気持ち良くなりたいけど、気持ち良くなりたいって思つてたら、えつちな仔に見られちゃつて恥ずかしいから、ミアちゃんが気持ち良くなつちやうのは、おじさんに無理やりえつちなことをされているからで仕方がないんだ……。赤ちゃんも、ミアちゃんが欲しいと思つたんじやなくて、おじさんに無理やり妊娠させられちゃつたんだから仕方ないんだ……」

……という、複雑怪奇な乙女心によるものらしいのだ。だから、気持ちの良いえつちをする為に、彼女には拘束具が必要になる事を学んだのだ。

白目をむいてアクメに夢中になつているミアちゃんを、妹のミイちゃんが優しく頭を♥よしよし♥してあげている。ついばむようなキスも忘れていない。

---

ミアちゃんももう地下室で飼育する必要も無さそうだ。これから

は監禁などせず、三人で暮らしていくだろう。

朝に調剤のお仕事のお手伝いをしてもらつて、夜はベッドの上で三人、仔作りに励むという生活を送つていけるだろう。来年の今頃には、二人が産まれて二人はおなかの中にいるんじやないか？

そんなことを考えていたら、再びオトナちんちんが硬度を取り戻してきた。しかし問題は無い。すぐ近くに愛らしいおまんこがふたつもあるのだから。

---

### およそ、十四時間前——

---

「それじゃ、お外に行こうね♪」

ミアちゃんは今、おじさんに抱っこされて暗い地下室から出る階段を上つている。どうやら外に出るらしい。外へ出る理由は分からなければ、ミアちゃんには相変わらずチカラが赤ちゃん並みになる手枷足枷がつけられたままだ。おそらくミイちゃんにも……。

それでおじさんが油断をしているのなら、この隙を有効に使いたい。外に出たら誰かに助けを求めて、この枷を外してもらうんだ。そうすればあとはミアちゃんだけでどうにでもできる。ニンゲンのおじさんなんてコテンパンにしてやれる。

階段を上りきり、分厚い扉を抜けると外は——といつてもまだ屋内だけ——案外普通だつた。ミイちゃんを救うために侵入した時は特に気にしなかつたけど、ちょっと葉くさいだけで普通の家屋だつた。

そんなことを考えていたら、奥の部屋からミイちゃんが出てきた。——下着姿のままで——このおじさんは本当に救いようのないダメな人だ。

『ミイちゃん！』

「あー、ミアちゃん♪」

ミアちゃんの姿を確認したミイちゃんは、タタタツとこちらに駆け寄ってきた。ミアちゃんは枷のせいでもともに動けないのに、ミイちゃんに枷が掛けられている様子はなかつた。一体どうして……？

でもこれはチャンスだ。ミイちゃんの運動能力がそのままなら、この枷を外してもらおう。なんとかおじさんの目を盗むんだ。

「パパあ、ミイちゃんもお♥」

「はいはい♥」

……え？ 目を疑つた。何を見せられているんだろう。ミイちゃんが、しゃがみこんだおじさんの膝に座つて、自分からほつぺに♥ちゅー♥をして「えへへつ♥？」と嬉しそうに笑つた。

それを見て目を丸くしていたミアちゃんの手枷と足枷を、おじさんが外し始めた。

あれよあれよとミアちゃんに掛けられた枷が外されて、チカラが戻つてくる。——どうして？ わけがわからない。ミアちゃんの方が身体は小さいけれど、ニンゲン種のおじさんよりも獣人種であるミアちゃんの方が身体能力は高いのに……。

ダメだ、ポカンとしていたら。せつかく枷が無くなつたんだ、おじさんの始末は二の次にして、ミイちゃんを連れて帰らなきや。

『ミイちゃん、迎えに来たよ。ここから出て行こう』

ミアちゃんのその言葉に、妹は少し困つたように笑つて言う。

「ごめんねおねえちゃん。ミイちゃんは、おじさんのおよめさんになつたから、ここでくらすことにしてたの♥」

『…………え…………？』

「えつとね、ミイちゃんは、おじさんのおよめさんになつたの♥はつじょ一きがきたら、えへへつ♥あかちゃんつくるんだあ♥」

「…………そういうわけなんだ。ごめんねミアちゃん。ミイちゃんはおじさんが責任をもつて幸せにするからさ♥なにも心配はいらないよ♥ミアちゃんはミイちゃんを心配して来てくれたんだよね♥ありがとう♥」

おじさんはそういうと、ミアちゃんにいそいそと服を着せてくれた。最初この家に侵入した時に着ていたシノビ装束――。

「しんぱいしてくれてありがと、おねえちゃん♥ミイちゃんは、ここでしあわせにくらすからだいじようぶだよつ♥じやあねつ♥」

――ガシャン☆

……気が付いたら、ミアちゃんはお外にいた。

家の外だ。

追い出されたのかな？

風が冷たくて空が白み始めている。

お空がどんよりしていて雪が降りそう……。

……ミイちゃんは、あのおじさんとけつこんしてしあわせにくらす  
んだつて。つまりミアちゃんはおじやまむしょんつてわけかあ。

あはははは、あはははははは、あははははは。あはははははは、あは  
ははははは……。

はあ……。

これからどうしよう……。

ママに相談する……？いや、それはダメ。ママに心配をかけたくない。

……何をしたらいいか分からなくなってきた。ひとまず近場にあ  
るおうちに帰ろう……。

「……ただいま……」

いつもならミイちゃんがお返事をしてくれるのに、今日は静かだ。  
隠れ家に帰つてこれたのは何日ぶりだろう。くたびれたベッドに横  
たわつて溜め息をつく。

ミイちゃんもミアちゃんも世の猫獣人らしく、他人様ひとさまにあまり歓迎  
されないお仕事をしている。だから普段から盜賊組合シーフギルドが所持してい  
る隠れ家などを転々として暮らしていた。

だからいつか誰かと結婚したり足を洗つたりして、一つ所に留まつ  
て暮らすという生活に憧れたこともあった。

ミイちゃんがあのおじさんとお互い本当に好き合つて結婚する、と  
いうのであれば文句はない。でもあのおじさんは……ミアちゃんに  
までヘンな事をしたんだよ——

『♥？んつ？♥』

——あのおじさんにされた事を思い浮かべた瞬間、おまたの奥が  
♥？きゅうううんつ♥？て熱くなつた。

おまたに宿つた熱はどんどん熱くなる一方で、どんどんおまたの奥が切なくなつてくる。——そう、ちょうど、おなかに浮かんできた紋様のあたり——

『♥♥♥ひやああああつ ♥♥♥』

紋様を指でなぞつただけで、身体の中の切なかつた部分に電気が走つた。この紋様が、ミアちゃんのあちゃんのおへやと繋がつてゐるの——？

『♥？つ……♥？あつ ♥？……んつ ♥？』

紋様を指で軽くなでなでするだけで、奥がもつとジンジンしてきて、履いているショーツがあふれてきたおつゆで濡れてしまつた。それでもかまわずにおまたをいじり続ける。

『♥？ーつ ♥？あつ ♥？んんつ ♥？』

まるであのおじさんにおまたを触られたりなめられたりした時みたいに、おまたの奥がムズムズしておさまらない。ここはおじさんのおちんちんからびゅーつて出てくる、熱くてドロツとした、赤ちゃんの素が流し込まれる場所だ——。

♥きもちいい ♥きもちいい ♥きもちいい ♥ショーツの中にも手を入れて、自分のおまたを指でいじる。♥おじさんのおちんちんを入れる穴♥と♥おじさんにクリクリいじられるおまたのさきっぽ♥のキモチイくなる場所♥

『♥あつ ♥あつ ♥あつ ♥』

触つたり指で挟んだりするだけで声がでちゃう ♥きもちいい ♥もつと ♥もつと気持ち良くなりたいつ ♥ちよつと怖いけど、おまたのあなに指を入れてみる ♥

♥にゆる……つ ♥にゆる……つ ♥にゆるつ ♥にゆるつ ♥にゆるつ

♥

『♥おつ ♥んおつ ♥あんつ ♥あんつ ♥んんんつ ♥んあつ ♥ああつ ♥』

おまたのあなたの入り口はキモチイイ ♥でもでも、奥つ ♥奥までおゆびが届かないつ ♥もうちよつと ♥もうちよつとなのにつ ♥♥♥

だめ。みあちゃんのおゆびじやどどかない。なにか、なにかないかな。おじさんのちんちんみたいな大きさと長さのぼう——。

あつた！おやさい！おじさんのちんちんよりもやわらかいけど、大きさと長さはいつしょくらい。おまたの中に入れるんだから、ちゃんときれいにしなくちゃ♥きれいなふきんをぬらして、それでおやさいを♥きゅつきゅつ♥てふく。よし、これでいいよね。

ヘッドにあおむけになつて ♥ おまたを大きくひらいて ♥ ちんちんを入れるあなに ♥ おやさいの先つぽをこすりつける ♥ ミアちゃんのおまたのぬるぬるをおやさいにぬつて ♥ ちんちんを入れるあなに ♥ 入れやすくする ♥

- あ

入ってぐる……♥おつきぐで……♥太くつて……♥でも  
おまたをきゅつてしまふと、その分しぶんじやうけど……♥

『あつ あつ あつ あつ あつ あつ あつ あつ あつ あつ』

おまたの中でおやさいを出し入れする♥きもちいい……♥おじき  
んのちんちんの方がキモチイかつたけど、おやさいでも強く出し入れ  
すれば、それなりにキモチイかつた。でもそれだけだ。ぜんぜん足り  
ない。あの、頭の中がまつ白になるようなきもちよさにはぜんぜんと  
どかない。。

そうだ！と思いつく。ベッドの上ひざ立ちになつて、おまたに入れてるおやさいを足ではさんで、ミアちゃんがうごけばいい。そうすればりょうてが空く。おっぱいもおまたのもんようもいじりやすくなる♥

— ♠ あ 〔 ♠ ん あ 〕 ♠ は 〔 ♠ ん は あ 〕 ♠ ん 〔 ♠ ん あ 〕 ♠ あ 〔 ♠ あ あ 〕 ♠ —

ベッドからギシギシときしむ音がする。ミアちゃんが足ではさんだおやさいを、いつしようけんめいこしを上下にふつて、ちんちんを入れるあなに出し入れする。空いた手で、おっぱいのさきつぼを♥くりくりつ♥といじる。きもちいい……♥

でも、やつぱり足りない。どんどんどんどんキモチイくなるのに、さいごの一番キモチイくなるところまでイつてくれない……。そういうことに、おしつこがしたくなつてしまつた。

さいごの一番キモチイくなるところまでイつてくれない……。そういうしているうちに、おしつこがしたくなつてきちゃつた。  
おけ、木のおけ！　おまたにおやさいを出し入れしながら、木のおけにまたがつて……♥おもらしをする♥

♥ はつ はひつ はひつ はひつ はひつ  
♥ ぶしやああああああああああ  
♥ んん一  
♥ ジよぼじよぼじよぼじよぼ  
♥ じよぼじよぼじよぼ

『♥♥♥んつ……はあ……♥♥♥』

♥ おもらしするのが、こんなにきもちいいなんて知らなかつた……

♥ おしつこがおしつこの通る道をものすごいはやさで流れていくのが、ものすごくもちがいい

でも、さいごのさいごにあと少しどどかない……。もつと、もつと強くすればどどくのかな。もつとぎゅうつすれば、キモチイくなれるのかな……。もつと♥ おまんこ♥ おまんこつ♥ ……

……

……

♥ たんつ ♥ たんつ ♥ たんつ ♥ たんつ ♥ たんつ ♥ たんつ ♥  
ベッドの上で、小さなミイちゃんに覆い被さつたおじさんが上下に腰を振つていて。ミイちゃんのおまたにおじさんのちんちんが出たり入つたりしていく、とつてもえつちだ。

おじさんがミイちゃんにぐぐつと腰を押し付ける。これは分かる。おんなこ 牝の仔のあかちゃんのへやに、おじさんのあかちゃんのもとを流し込む時にする行動だ。

「♥ ぱぱあつ ♥ ちようだい ♥ ぱぱのあかちゃん、ミイちゃんのおなかのなかにちようだいつ ♥ ♥ ♥」

「ミイちゃんつ ♥ 出すよつ ♥ ミイちゃんをママにしちやう 精液つ ♥ あかちゃんのおへやに出すよつ ♥」

♥ ? びゆるるるつ ♥ ? びゆるつ ♥ ? ぶぴゅつ ♥ ? ぶぴゅうつ ♥ ?

おじさんのちんちんが ♥ ビクンビクン ♥ と動いている。射精しているんだ、ミイちゃんの中に……。それをみていたら、ミアちゃんのおまたの奥が ♥ きゅうううんつ ♥ てうずいた。

ミイちゃんからちんちんを抜いて、おじさんはベッドから起き上がりてこちらに向かってきた。ミイちゃんのおまんこで ♥ ぬるぬる

てかでか♥になつた、大きくて硬そうなちんちんを隠そともしない。ぐくり……。思わずつばを飲み込んでしまつた。

「やあ、おかえりミアちゃん、来ると思つてたよ♥予想していたよりも早いよ早かつたけど」

ミアちゃんが戻つてくるのが分かつてたみたい。おじさんの家から出たのが日の出のちよつと前で、今は大体お昼時。ミアちゃんがいつごろ帰つてくると思つていたんだろうか。

おじさんがミアちゃんと同じくらいの高さの目線に合わせてしまがみ込み、そつとミアちゃんのおまたにさわつてくる。

『♥♥——つ♥♥』

おじさんが、ミアちゃんのおまたの♥پにپに♥に指をつんつと触れた途端、☆ぱちんつ☆と、体中に電気が走つた。足がガクガクと震えてしまう。

「あらら～♥おまんこが随分とぬるぬるしてゐるねえ。これつて、おじさんとミイちゃんのおまんこするところを見ていたからこうなつたわけじゃないよねえ。おうちに帰つて、ひとりでえつちなことをしていたからでしょ」

——バレてる。この家に戻つてきた理由も、隠れ家でナニをしていたのかも——。  
「ミアちゃんのからだはね♥もうおじさん無しじや生きていけない身體になつちやつたんだよ。」

『♥ふーつ♥ふーつ♥ふーつ……♥』

おじさんが手を差し伸べてきた。握手を求めているわけではなさそう。だつて握手する時、中指一本だけ♥くいつ♥と曲げてたりはないもん。これはアレだ。この指を使って良いよ♥つてことだろう。

『♥んつ♥んんつ♥んあつ♥はつ♥ああああつ♥』

おまたのさきつぽにおじさんの中指が当たる様に、腰をくいくいつと動かす。ようやく♥つんつ♥とあたつた瞬間、目の前が真っ白になつて——

『♥んつ♥んんんん——つ♥♥♥』

♥ビクンツ♥ビクビクツ♥

——全身からチカラが抜けてしまった。床に倒れないように、おじさんが支えてくれたけど、触られているだけでキモチが良くなってしまう。

ミアちゃんがあれだけ時間をかけて触つても一度も最後まで気持ち良くなれなかつたのに、おじさんのゆびが一瞬触れただけで、何倍もキモチイくなつてしまつた。

身体からチカラが抜けてまともに立てなくなつて、おじさんにだつき抱えられる。履いていたスパツツとショーツはいつの間にか脱がされ、ミアちゃんはいま、おまたがはだかんぼさんになつて、おじさんのちんちんを当てがわれている。

もう少しでおまたのちんちんを入れるあなに、おじさんのちんちんが入つちやいそう……。

『♥ふー……つ♥ふー……つ♥』

「ミアちゃん、悪い事は言わないから、おじさんと一緒に暮らそう。そうすれば毎日毎日気持ち良くしてあげるよ♥」

もつと気持ち良くなりたい……。ミアちゃんは♥こくん♥とうなづく。

すると一センチ、ちんちんがミアちゃんのおまんこに入つてきた。

『♥——ツ♥♥♥』

「でも、一緒に暮らすなら、ひとつ“お約束”があるんだ♥ミアちゃんにはまた、赤ちゃんになつちやう枷をハメてもらうけど、それでもいい?」

……ミアちゃんはまた、♥こくん♥とうなづく。すると、また一センチ、ちんちんがおまんこの奥に入つてきた。

『♥ん——ツ♥♥♥』

「あの枷をハメたら、もう一度と外してあげないけど、それでも大丈夫? もう一生、おじさんから逃げられなくなつちやうよ? 赤ちゃんみたいな生活をするようになつちやうけど、いい?」

♥こくん♥とうなづく。また一センチ、おまんこの奥にちんちんが入つてくる。あともう少し……。

『♥ああ～……♥』

「それじゃあ、良い仔のミアちゃんにプレゼント♥ミアちゃんの為に、おじさんが特別に作つたものだよ♥」

とりだしたのは、小さな鈴がついた革製の首輪だつた。金属製のネームプレートがつけられていて、そこには ♥ ミ ア ♥ と刻印されていた。それをミアちゃんの首に巻き付けられる。ミアちゃんはこれで、この家の飼い猫になつてしまつたんだ。

ちんちんを入れられたまま、ベッドに寝かされると、お人形さんのようにミイちゃんに抱つこされる。

「はい ♥ おねえちゃん ♥ これ ♥」

赤ちゃんが使つてゐるおしゃぶりを吸わされ、ミイちゃんに手枷と足枷をハメられると、全身からチカラが抜けて、身体が重く感じるようになつた。この先ずつと付き合つていかなくてはならない枷……。また一センチ、おまんこの奥にちんちんが入つてくる。

「なんだかおねえちゃんがミイちゃんのいもうとになつたみたい ♥ おねえちゃんカワイイ ♥」

「それじゃ、ミアちゃんには今日からミイちゃんの妹赤ちゃんとして過ごしてもらおうかな ♥ ? おしゃぶりちゅうちゅう吸つて、おむつを履いて……でも、えつちもたくさんしようね ♥ 赤ちゃんになつた後、赤ちゃんを産ませてあげるからつ ♥」

『 ♥ ふーつ ♥ ふーつ ♥ ふーつ ♥ 』

ミアちゃんの身体が半分に折り曲げられて、おじさんが圧し掛けかってきた。赤ちゃんのチカラしかだせないミアちゃんじや、もうおじさんを押し退ける事は出来ない ♥ ?

おじさんのちんちんがミアちゃんの一番奥まで入つてきて、ちんちんを赤ちゃんのおへやの入り口に ♥ むちゅううつ ♥ と押し付けられて、それだけでミアちゃんはイつてしまふ

それなのにおじさんのちんちんは動き始める ♥ イつたばかりのおまんこなのに ♥ じゅぶじゅぶ ♥ ぐちゅぐちゅ ♥ とかき回される。ちんちんがでたりはいつたりするたびに、くびわについている鈴が ♥ チリン ♥ チリン ♥ とゆれておどがなります ♥

さつきイつたのがおわつてないのに ♥ またイカされちゃう ♥ いま

いつたばかりなのに♥またイカされちゃうよおつ♥いくうつ♥いくつ♥いくつ♥いくいくいくつ♥いくいくイグイグううううつ♥一

——ツ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

♥びゆるるるつ♥びゆうううつ♥びゆるつ♥びゆるるるつ♥ぶりゅうつ♥ぶりゅうううつ♥ぶりゅるるるつ♥ぶりゅうつ♥

おじさんがミアちゃんのなかでちんちんぴゅーしました♥?あつたかいのがたくさん♥?あかちゃんのおへやに♥じゅわあつ♥てしみこんできて♥?またミアちゃんはいつてしましました♥

おじさんがいつかいちんちんぴゅーするまでに♥?ミアちゃんは♥さんじゅつかいくらい♥あたまがまつしろになつて♥?もつともつと、きもちよくなりたいです♥

「おねえちゃんもミイちゃんといつしょに、パパのおよめさんになろつ♥ふたりでおよめさんになつて、パパのあかちゃん、いっぽいうもうねつ♥?」

うんつ♥うむう♥あかちゃんいっぽいうむう♥いつしょに♥たくさんのあかちゃんうもうねつ♥

ミイちゃんとおじさんに挟まれて、ミアちゃんの赤ちゃんおまんこが♥?ぐちよぐちよ♥?にされてキモチイイ♥?これからは♥?こんなにきもちいいまいにちがまつてるんだ♥?うれしいな♥?うれしいなあ……♥?

### ○月◇日△曜日

♡……こうしてミアちゃんは、ミイちゃんといつしょにおじさんのおよめさんになることにしました。おむつのなかにおしつこをして、よごれたおむつをミイちゃんにとりかえてもらうのにもなれてきて。♡じようずになつたね。とほめられてうれしかつたです。いまもおじさんににつきをかくところをみてもらいながら、おまたのさきつぽをさわつてもらつています。とつてもきもちいーです。

♡もうすぐ、ねこじゅうじんとしてはじめてのはつじょうきがおとずれます。はつじょうきのことをかんがえると、いまからおむねがドキドキしてきます。

♡ いまでもおまたのうえの ♡じゅもん よう ♡ によつて、えつちなこ  
としかかんがえられなくなつてゐるのに、これではつじょうきになつた  
ら……。わたしたちはどうなつちやうのかな? ♡  
——つづく

### 第三の少女、エミ

#### 15 白いネコちゃん

♥ぱんつ♥ぱんつ♥ぱんつ♥ぱんつ♥ぱんつ♥ぱんつ♥ぱんつ♥ぱんつ

……

『♥…………ん♥…………は…………♥』

きもちいい……。まるでおもちゃをつかっておまんこを慰めている時のような、そんな気持ちよさ……。

でも、おもちゃより暖かい。体温を感じる……。ぬくもりが心地良い♥発情期を迎えて火照ったおまんこの疼きが癒されてゆくよう

……♥

♥びゅるるるつ♥びゅるつ♥ぶびゅるうつ♥ぶびゅつ♥びゅるるるつ♥どぶどぶつ♥どぶつ…………♥…………

『♥…………ん…………♥』

私のナ力の奥がひときわ強く圧迫されると、そののちに温かいものが♥じゅわあ…………♥と染み込んでくるのが分かつた。

おまんこを♥きゅうきゅう♥締め付けて、温かいもののおねだりをする。もつと…………もつと注いでほしい。この温かいものが染み込んでくるだけ、私のなかが幸せで満たされてゆくから……。

心地よい目覚め……。ふと目を開けると、私と同じ猫人族の少女が二人、身を乗り出して私の顔を覗き込んでいた。

「♥あつ、めがさめたみたいだよ♥」

「♥ママ、おはようー♥」

見覚えのある愛らしい顔……。それもそのはず、この二人の少女をお腹を痛めて産んだのは、誰でもない私なのだから。

『ミアちゃん！ミイちゃん！ よかつた……ふたりとも、無事だったのね……』

最近急に連絡が取れなくなり、それ以降行方不明になつていた娘二人。二人とも、特に怪我などは負つていないようで良かつた……。

二人の頭を撫でてあげようと腕を伸ばしたが、自分の腕の重さと、手首に巻き付けられている枷の存在に気付く。これは……？

♥ぱんつ ♥ぱんつ ♥ぱんつ ♥ぱんつ ♥ぱんつ ♥ぱんつ ♥ぱんつ

……

『♥あつ ♥』

突然、股間に快感が走った。おまんこのナ力に入っていたものがぬりゅつぬりゅつ♥と動き出し、私の身体が揺すぶられ始めたからだ。

私の顔を覗き込んでいた二人の娘が離れると、自分の身に何が起きているのかを理解し、頭から血の気が引いていった。

私はいま、強姦レイプされている。

「ここにちは、奥さん♥」

無遠慮にも私の脚の間に割つて入り、腰を振つて見知らぬヒト族の男と目が合つた。先程までは、愛娘二人の顔で視界を遮られていたから……。

怒りと恐怖から、目の前の男を突き飛ばそうとしたが、身体の動きが阻まれ、チャリチャリという金属音だけが耳に残った。

手足に伝わる抵抗感——革製の枷と、それに繋がれた金属製の細い鎖。それが私の手足を拘束していたものの正体だった。

しかしおかしい。猫人族とは言え獣人種である私のチカラでも、この程度の鎖であれば引きちぎるのは容易なはず……。それなのにこの拘束から脱せないということは……これは魔道具か。

『この……つ』

なんとか抵抗してやろうと思った矢先、愛娘二人に止められる。

『！ ど、どうして……つ!?』

「♥ママ ♥あばれちゃだーめー ♥」

「♥おとなしくしててね ♥ママ ♥」

愛娘二人が両腕に抱きついてきて、私の脚を片方ずつ持ち上げる。身体を半分に折り曲げられた私は身動きを取れなくされた。

やはり魔道具かなにかで、私のチカラが奪われているのか。なんと抵抗できないだろうかと考えていると、男が素早く腰を振り直し始

めた。

●ぱんつ ●ぱんつ ●ぱんつ ●ぱんつ ●ぱんつ ●ぱんつ ●ぱんつ ●ぱんつ ●ぱんつ ●ぱんつ

私の穴に男の性器が出入りし、同時に男と私の肉がぶつかる、湿った音が木靈する。

『あつ んつ やつ やめつ やめなきいつ あなたつ なにをし  
ているかつ わかつていてるのつ?』

喜び揚ひ、一々迄引て、心懃るに、はなびらん。

……この男の顔には、どこか見覚えがある……。そうだ娘の捜索中に立ち寄った薬屋さん……。そこの店主だ。

一大丈夫、わかつていじ

』つ……このつ……

男の腰が引かれ、同時に私のおまんこから男性器が引き抜かれる。ずるるるるるるるるるる……つ・

◆?ふわわわわわわ?◆?

考が中断される。

● すにゅにゅにゅにゅにゅ…… ●

長い、の……？  
♥ひいんんんんんつふ、ふかいつこんなつこんな奥まで届く  
なんてえ……つ

性器内で巻き起こる初めての感覚に戸惑ってしまう。ふふつ♥奥さん、ここを♥？ぐりぐり～つ♥？され

たよね  
♥?  
」

知つたふうな口を利く男が、私の身体をもてあ s ♥ んにやああ

ああああつ

どうしてつ ♥ どうしてこんなにキモチイイのつ ??? ♥

「僕とするおまんこがとつても気持ち良いのが、そんなに意外ですか？」

♥……このつ下衆が……♥

男は私の身体に指をツツ……と滑らせて、下腹部を指し示す♥皮膚をなぞられるだけでイつてしまいそうになる♥

『♥ふにやあああんつ♥』

「答えはここにありますよ♥」

指し示された場所には、入れ墨でも入れたかのように、ハートマークが浮かび上がっていた。これは……？

「これは【貞淑な妻】と言う、女性を縛るおまじないです♥」

聞いた事がある。オンナを一人の男に縛り付ける、古くからある呪術……。しかし、これは双方合意でないと結べない契約呪術のはず……。こんな男と契約を結んだ覚えはないのに、どうして私のお腹に……？

「対象の男性とのまぐわいで、最高の快感を得られるようになる効果もあるんですよ♥」

『♥にやううううううううんつ♥』

私の尖ったクリトリスをほんの少し、指で転がされただけなのに、有り得ない強度の快楽が押し寄せた。

『♥んにやつんにやあああああんつ♥にやつ♥あつ♥イクつ♥イカされちやううつ♥んにやあああああつ♥』

「ね？ 気持ちいいでしょ？」

私の中の、最後の聖域が穢されてゆく。

♥どちゅつ♥どちゅつ♥どちゅつ♥どちゅつ♥どちゅつ♥どちゅつ♥

『♥にやつ♥んにやあつ♥んつ♥ひいつ♥あつ♥ああつ♥んやあつ♥あつあつ♥んああつ♥うにやんんつ♥』

奥の子宮口に何度も何度も、このオトコの生殖器が押しつけられる。

最後の抵抗——せめて子種は侵入させまいとチカラを込めて閉じていた子宮口から、どんどんチカラが抜けていく。

♥ どちらも ♥ どちらも ♥ どちらも ♥ どちらも ♥ どちらも ♥ どちらも

ちゅつ・

『 ♥ あつ ♥ ああーつ ♥ ヤだつ ♥ ヤだヤだヤだつ ♥ もうキモチイイの  
ヤだつ ♥ イくうつ ♥ イクイクいくうううつ ♥ 』

——絶頂——。

昂りに昂つた性感が爆発して、膣は締まり子宮からは粘液を垂れ流し、視点は定まらず、だらしなく涎を垂らしてしまっている。

それでもなお、男は私の身体を貪るのをやめてくれない。快感は治まる事なく、私の存在そのものが、生殖器が生み出す快楽と幸福感に満たされてゆく ♥ ♥ ♥

もう、チカラは入らない ♥ 開いちゃう、 ♥ ひらいちやううつ ♥ 子宮口 ♥ ぽつかり口を開けて ♥ 牡の<sup>オス</sup>——しかも異種族の——おちんちんに ♥ むしゃぶりついちやううつ ♥

「 ♥ ママ、 とつてもきもちよさそうでいいなあ…… ♥ 」

「 ♥ もつともつと、きもちよくなつてね ♥ ママあ ♥ 」

♥ 発情期を迎へ、お立ちが出るようになつたおっぱいを、愛する娘二人に吸われる ♥

『 ♥ はつ ♥ はつ ♥ あつ ♥ だめつ ♥ だめだめだめつ ♥ ダメつ ♥ おっぱい 吸つちやだめえつ ♥ 』

♥ 誰かに飲んで欲しくて作られた私のミルクが、乳腺の中を ♥ びゆるびゆるつ ♥ と通つて、愛娘二人のお口に吸い込まれてゆく ♥

♥ あつ ♥ すわれてるつ ♥ すわれちゃつてるつ ♥ おっぱいつ ♥ おっぱい、キモチいいつ ♥

赤ちやんだつた二人がお姉さんになつて、いま再び私のおっぱいに吸い付いている。脳裏に、二人が赤ちやんだつた頃の、とても幸せだつたあの頃が思い浮かんでくる。

♥ ぱちゅつ ♥ ぱちゅつ ♥ ぱちゅつ ♥ ぱちゅつ ♥ ぱちゅつ ♥ ぱちゅつ ♥

キモチイイのと幸福感でいつぱいなのとで、いま自分がどうなつているのかわからない。

発情期を迎えて敏感になつた乳首は愛娘二人に愛撫され、同じく敏

感になつてゐるおまんこは、ヒト族のオチンチンで抉られて、押し寄せる快感に翻弄されてしまつてゐる。

♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱ  
ちゅつ ♥  
「♥ねえママ ♥ママもおじさんのおよめさんになろーつ ♥」  
「♥ミアちゃんたちといつしょにおよめさんになろーつ ♥」  
『♥んつ ♥おつ ♥およめつ ♥およめ、さん? ♥あつ ♥あんつ ♥』  
♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱ  
ちゅつ ♥

「奥さんも、僕のお嫁さんにしてあげますよ ♥ 一番目のお嫁さんはミイちゃんで、二番目のお嫁さんはミアちゃん。三番目は……おいといて、いまの奥さんは、僕の四番目のお嫁さんになりますね ♥」  
考えたくなかつた現実——。

愛娘二人も、この男の毒牙にかかつてゐるのではないかと言う懸念——。

こんな、こんな下衆な男に弄ばせるために、この仔たちを産んだんじやない——産まれたんじやないのに——。

男に対する怒りと憎しみ、愛娘への悲しみで涙が止まらなくなつてくる。

『♥ んむううつ ♥』

♥ 口の中に何かが入つてくる  
♥ この男の人の舌だ  
♥ こいつ……  
♥ ちようしにのつて……  
♥ かみちぎつてやる  
♥ んぶつ ♥ちゅ ♥ちゅ……  
♥ なんつ、かみちぎつてやるう  
♥ あむつ、かみ、かみついてえ  
♥ んぶつれろれろつぬちゅつ  
♥ かみついて、やる……ん  
♥ ちゅ ♥ちゅぱ ♥ちゅつ  
♥ ちゅ ♥ちゅぱ ♥ちゅつ

♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥

♥ん……♥

♥やめて♥

♥にぎつたゆびをひろげないで♥

♥ゆびをからませないでつ♥

♥こいびとみたいにつ♥

♥てをつながないでつ♥

♥ん……む……♥

♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥

沸き上がつてくる幸福感……。

少女のように手を繋いで……

恋人のように口づけして……

夫婦のように肌を重ねて……

母のようにお乳を授けて……

そして今、私の身体は——牡<sup>メス</sup>として、仔を成そうとしている。

やめて。

これ以上、

——私を犯さないで。

——私を侵さないで。

——私を冒さないで。

私の望まない幸福感がわたしの体の中でどんどん溢れ、満たされてゆくのを感じる。

女<sup>メス</sup>として産まってきた事への喜び。

雌<sup>メス</sup>として扱われている事への歓び。

牡<sup>オス</sup>に組み敷かれ、押さえ付けられ、無理やりに犯され、勝手に種を植え付けられる♥牡<sup>メス</sup>の悦び♥

わたしの子宮口が自ら進んで、このオトコの生殖器にフェラチオをし始めた。浅ましく子種のおねだりをしている。♥ちゅぱちゅぱ♥ちゅぱちゅぱ♥と。

私以外のすべてのわたしが受け入れてしまつていて。この牡<sup>オス</sup>に征服されるのを。支配されるのを。屈服するのを。ひざまずくのを。

♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ ♥ぱちゅつ

ちゅつ ♥

男の腰使いが激しくなってきた。射精が近いのだろう。

やめて  
いやだ

こんなやつとのこどもなんて  
つくりたくないのに

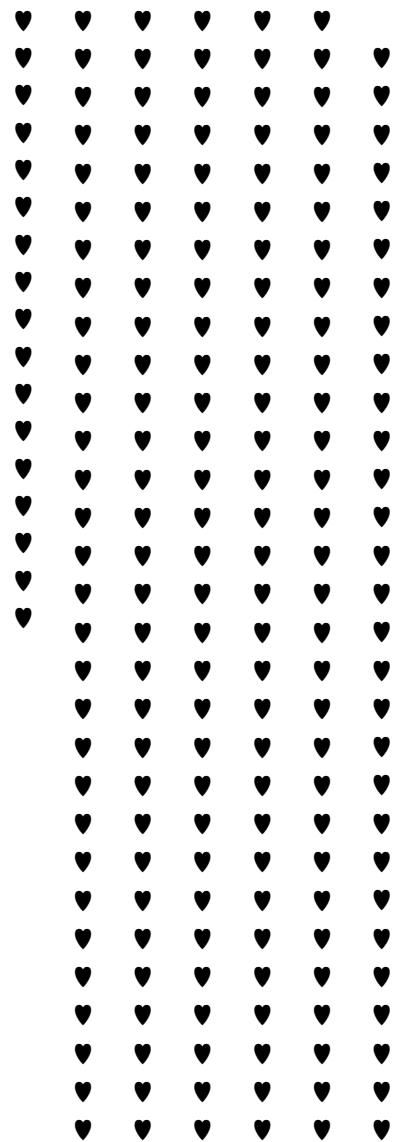
それなのに

どうして

どうしてこんなに

わたしは、しあわせなの？

♥ぶびゅつ ♥びゆるるつ ♥ぶびゅううつ ♥びゆるびゆるつ  
びゆびゅつ ♥びゆううううつ ♥びゆるつ ♥びゆるるつ ♥  
ああ…… ♥ ♥ ♥



発情期を迎える仔作り準備万端の子宮の中に、大量の牡の精子 猫人族ではない異種族の——を受け入れてしまった。

赤ちゃんがお母さんのおっぱいに吸い付いてミルクをもらうように、私の子宮口はこの男の——女性を強姦して憚らないような男のオチンチンに吸い付いて、おいしそうに遺伝子ミルクを飲み込んでいった。

こんな下衆な男と交わってしまったというのに、私の性器は——

いや、わたしの身体は、歓喜に震えてしまつてゐる。この男の体液をもつと欲しい♥もつと欲しい♥と叫んでゐる。

このままでは私は、この男の子供を身籠つてしまふ。でも、まだ間に合う。行為後に服用する避妊薬——それを手に入れられれば——。

「それじゃあ奥さん♥ このカツプにおしつこしてもらえますか?」

私の不安なんて気にもせず、男はそう言うと、私の性器まわりを指で刺激し始めた。

そんなすぐにおしつこなんて出る♥んんんん♥

♥ しあ—————♥ ちよぼほほほほ♥ ちよぼつちよぼちよぼ

ちよぼ……♥

『♥んつ ♥んんんん♥』

♥おしつこがおしつこの通り道を通り過ぎてゆくことが、こんなにも気持ちがいいだなんて……♥ ♥

『♥はあ ♥はあ ♥はあ……♥』

私のおしつこで満たされたカツプに男は、全てが真っ白い一輪の花を挿し込んだ。

これは有名な花だ。【コアカシの花】……。古来より、排卵・妊娠の検査に用いられてきた、自然の植物だ。

暫くすると、信じられない結果が出た。

真っ白だった茎・葉・花びらの全てが、鮮やかなピンク色に染まつたのだ。

「やつぱり妊娠してましたね♥」

どうだと言わんばかりの表情を男が浮かべると、後ろの方で愛娘二人が「わあー♥」と喜んでいた。

そんなバカな。花びらまで染まるなんて……。これは、おしつこした牝が現在妊娠している事を示している。

例え数回膣内で射精されたとしても、そんなすぐには妊娠はしないのに……。どういう事かと考えていると、男が嫌らしい笑顔を浮かべて口を開いた。

「覚えてないのも無理ないですよね」

種明かしとばかりに、男は革ベルトを一本取り出し、私の首にその革ベルトを巻き付け――

「これは【幸福な者の首輪】といつて、つけられた者をとつても従順で良い子してくれるんですよ。でも、外すとつけられていた時の記憶を無くしてしまうみたいで――」

☆ぱちんつ☆

「どうです？ 思い出せました？ ヽ自分の立場を」

ああ

――そうだ。どうして忘れてしまつっていたんだろう。

私はエミ。猫人族の野伏。レンジャー ミアちゃんとミイちゃんのお母さんで、このご主人さまのおまんこ奴隸およめさん だつてことを……。

わたしのえつちなおまんこも思い出したようにおまん汁を分泌して、お父さんのおちんちんをお迎えする準備をする。

お父さんに奴隸にしてもらつてから、もう一週間。その間に、たくさんたくさんおまんこしてもらつて、ついに今日♥妊娠♥しているのが確定しました♥

「♥ママあ♥」

愛する娘たちも、わたしが妊娠したことを喜んでくれている♥抱きついてくる二人は、相変わらずかわいい♥

甘えん坊さんの二人は、わたしのおっぱいに吸い付いてミルクを♥ちゅうちゅう♥吸い出し、口に含んだわたしの母乳を――

♥んつ♥ちゅ♥じゆるつ♥ちゅ♥

「♥んつ♥ありがとう、おいしいよ♥」

口移しでパパに飲ませてあげている♥

その仕草がとてもえつちでかわいくて、ナカですくすく赤ちゃんが育つてているわたしの子宮が♥きゅんつ♥と疼く。

ミアちゃんもミイちゃんも、パパにミルクをあげたお返しに、おまんこを指で♥くちゅくちゅつ♥と触つてもらえて、とつても気持ち良さそう♥

おなかの中のこの仔たちが産まれたら、ミアちゃんとミイちゃんがまたひとつ、お姉ちゃんになるのね♥

そして、ミアちゃんもミイちゃんも、産まれて初めての発情期が、もうすぐ訪れる♥

お父さんにたくさん♥おまんこ♥してもらつて種を付けられたら、あの仔たちもおかあさんになるのかあ……♥

いまから赤ちゃん産むの、楽しみだなあ……♥

ミアちゃんもミイちゃんも、とっても素敵なお母さんになるわ♥お母さんが保証してあげる♥

わたし達三人で一緒に赤ちゃんを産んで、すぐに次の赤ちゃんを仕込んでもらいましょうね♥

——つづく

### ◆◆◆TIPS◆◆◆

#### 【貞淑な妻】

ていしゆくなつま

#### 契約呪詛

妻側の浮気を防止し、血統を保証させる古代の呪のろい。

呪詛を結ぶには、互いが強い親愛の情を通わせていく事、合意の上での性交中である事、夫の新鮮な精液を一定量子宮内に保持している必要がある。

契約が成ると妻は、夫以外と性交を行つても全く快感を得られなくなるばかりか、激しい嫌悪感を抱くようになる。

逆に夫との性交には非常に深く濃い愛情と快樂が伴うようになり、夫との子を妊娠しやすい体質になる。

#### 【コアカシの花】

こあかしのはな

植物・一年草・花言葉「無垢・未來」  
根も葉も茎も花も、全てがまっ白な植物。食用。

妊婦の尿を吸わせると、真っ白だった部分の色すべてが鮮やかなピンク色に変わるために、手軽な妊娠検査薬として使われてきた歴史がある。

ピンク色に染まるのが葉っぱ以下である場合は、排卵している事を示している。何もなければなにも変化は起きない。

---

### 【幸福な者の首輪】

こうふくなもののかびわ

呪魔具 禁制品（許可制）

単純に奴隸の首輪と呼ばれるが、直接的すぎるその名は忌避され、このような名前で呼ばれる事が多い。

着用者は現状に対して疑問を抱けなくなり、自らを恵まれていると

思い込まされる呪いがかけられている。

奴隸が奴隸らしくいるにはどうしたら良いか、という命題への答え。

相手の人格を否定・洗脳する魔具である為、現在は無許可での所持は罪になる。



エミさん妊娠発覚から一週間ほど前……

薬剤師宅、寝室

「♥やつ♥やだあつ♥おまんこもうやだつ♥やめてつ♥?おちんちん動かさないでえつ♥?」

仰向けに寝かせ、足を開かせるとあらわになつたミアちゃんの幼く愛らしい一本すじ。それを優しく開いて露出させた、お尻のあなたのすぐ上にある、年相応のかわいらしい小おまんこに、屹立したオトナちんちんを挿し入れている。

ミアちゃんのおさな性器からは♥ふじゅつ♥?ふじゅつ♥?と、年不相応なヌルついた水音が奏でられ、僕の獸欲を刺激し、高めてくれる。

「♥はひつ♥やつ♥やだつ♥いくのやだつ♥もういくのやだああつ♥」

ミアちゃんが愛らしい悲鳴を上げる。もうイきそうなのだとわかる。その快樂に溺れたアクメ予告は僕の獸欲をも高めてくれた。

ぼくのオトナ性器は更に血を集めて硬くなり、目の前の仔猫を孕ませようと躍起になつてしまふ。

ミアちゃんを抱き上げて、正常位から対面座位の恰好に移行する。こうすることでミアちゃんの自身の重さで、こどもおまんこがオトナちんちんを無理なく飲み込んでゆく。

最奥にちんちんの先端が到達すると、ミアちゃんの子宮口がちんちんの先端に♥ちゅう♥ちゅう♥と吸い付いてきた。「精液つ♥精液ちようだいつ♥」と言うおねだりのサインだ。

発情期を迎えて熟れた奥の生殖器は、赤ちゃんを欲しがつている。もうすでに子宮内部は何度もプレゼントされた精液で♥トロトロ♥になつているというのに、わがままな子宮ちんちんは♥はやくつ♥はやくつ♥と、繰り返し新鮮な精液をおねだりしてくる。

「♥あつ♥あつ♥あつ♥おつ♥おつ♥んおつ♥おつ♥」

体重の軽いミアちゃんの小さなお尻を抱えて揺すり、おまんこに刺激を与え続ける。キモチイイのが強くなつてると、ミアちゃんの視線は定まらなくなり、与えられる快楽を夢中になつて味わっている。

♥ちりん♥ちりん♥と、ミイちゃんに括り付けた細めの首輪。それにつけられた小さな鈴が、オトナちゃんの出し入れに応じて可愛らしい鈴の音を奏でた。

快樂に翻弄されたからか、ミアちゃんのちいさなお口が母親のおっぱいだと間違えちゃったのか、僕の乳首に♥あむ♥あむ♥ちゅう♥ちゅつ♥と吸い付いてきた。その様子はまるで赤ちやんだ。

ミアちゃんの、ヒトよりもはるかに強力な獣人の身体能力を封じる事で、ヒトの3歳児程度の腕力しか出せないようになした。

また、膣におまじないを施し、奥の子宮を低級淫魔のものに置き換えた。

ミアちゃんの子宮は、淫魔特有の「生殖器と消化器、両方の機能」を備え、「性食欲」とでも言うべき、性欲と食欲がごつちやになつた欲求に常に晒されるようになり、僕の精液を子宮で受け止める事でしか、その飢えを癒せないカラダに作り替えた。

そしてミアちゃんの心をへし折り、その精神を、「誇りある猫人族のお姉さん」から、「おまんこするのが大好きな赤ちゃん」と堕落させた。

食事は哺乳瓶から与えられるミルク。おトイレはおむつに。移動する時は抱っこされて。おしゃぶりとお気に入りのタオルケットは常に手放さない。

最早ミアちゃんは、ベッドの上で寝返りを打ち、おまんこを開いておちんちんをおねだりする事しか出来ない女の子になつてしまつた。いや、僕がそうさせたのだ。

あとはこの赤ちゃんのまま、赤ちゃんを産めるようにしてあげるべく、日夜仔作りに励んでいるのが現在である。

『いくよっ！ ミアちゃんの赤ちゃんのお部屋に、赤ちゃんのもとつプレゼントしてあげるねつ♥』

「あつ♥やつ♥やだつ♥やだやだやだつ♥あかちゃんやあーつ♥」

ミアちゃんを押し倒し、その上に覆い被さる……【種付けプレス】の恰好だ。

覆いかぶさつてきた成人男性の身体を押し退ける事は、三歳児のチカラしか出せない少女にはできない相談だつた。

自身のこども性器に深々と侵入してきたおとな性器から、疼く子宮の奥に、その日何度も褒美がもたらされた。

♥びゆるつ♥ぶびゅびゅつ♥びゆるびゆるうつ♥どふんどぶつ♥ぶびゅつ♥……

「♥あ？つ♥……♥お？つ♥おつ……♥」

注入する精子の一匹すら漏らさないよう、幼い身体をガツシリと押さえ、少女の奥の奥へと精を放つ。

幼い肢体の小さな子宮が、温かく新しい遺伝子を注がれた悦びで絶頂を迎える、ミアちゃんは全身を震わせながら濃密な快楽を味わつていた。

頭頂部にあるネコミニが後ろに倒れ、プルプルつと震えている。全力でアクメ絶頂の快楽を味わつている証拠だろう。

緊張してピン……と張つている愛らしい尻尾を、毛並みにそつて撫でてあげると、身体を震わせて「ふわあああ……♥」とキモチよさそうな声を漏らした。

『ん……？ あら、あららららら……』  
「♥んつ♥んんー……♥ん……♥♥♥」

ちよろろろろろろ……♥

オトナちんちんを引き抜こうと体勢を戻すと、ミアちゃんのおまたの閉じた割れ目から飛び出してきたおしつこによつて、僕の下腹部がびしょびしょに濡れてしまつた。

これは、アクメによる潮吹きではない。ミアちゃんの「ミアちゃんは赤ちゃんだから、おもらししてもいいんだもん♥」という、いつも可愛いイタズラだ。

おしつこの最後の一滴まで出るのを待ち、終わつたら頭を撫でて褒めてあげる。

『上手におしつこできたね♥』

「♥♥♥……♥♥♥」

親指を♥ちゅつ♥ちゅつ♥としやぶり、満足そうに眼を細めるその姿は、まごうことなき赤ちゃんだつた。

おまんこが終わつてのおもらしはいつもの事なので、あらかじめ対策として、おもらしシートを敷いてある。

そこから先は慣れたもので、テキパキと後処理をし、ミアちゃんのおまんこからオトナちゃんちんを♥ヌル……♥つと引き抜いて、新しいおむつを穿かせてあげる。

ミアちゃんの頭を撫でながら『絶対に赤ちゃん、孕ませてあげるからね……♥』と囁くと、ミアちゃんは満足したようで♥すう……♥と眠りについた。

「ミアちゃん、おねんねしちゃつたの？」

その声は、妹のミイちゃん。ウチにやつてきた最初の被害者およめさんだ。

『うん、イき疲れて眠つちゃつたみたい』

ミアちゃんが寝冷えしないよう、おなかに厚手のブランケットを掛けながらそう言うと、ミイちゃんは僕に抱きついてきた。

そして姉の愛液でヌルヌルになつたままの僕のオトナちゃんちんを、そのちいさなおててで掴むと、自身のースルヌルになつている——ごどもおまんこにこすりつけ始めた。

「ねえねえ、ミイちゃんねつ♥おねえさんになつたから、パパがミアちゃんとおまんこしてるあいだ、ちゃんとがまんできたよ♥えらい？」

？

『うん、えらいえらい♥きちんと順番こできたのはえらいね♥』

そういうい終わるや否や、ミアちゃんへの種付けを終えた僕のオトナちゃんちんは、ミイちゃんのおねえさんおまんこに♥ヌルヌル♥と侵入していった。

「♥んつ♥あつ♥はつ♥あはつ♥

♥にゆるつ♥にゆちゅつ♥ずにゅつ♥ぬりゅつ♥

オトナちゃんちんを挿入しやすいようにミイちゃんの右足を抱えて、そのままの姿勢でベッドに横たえる。

僕の後ろにはお昼寝しているミアちゃん。目の前にはミイちゃん。

前後を姉妹に挟まれた格好でミイちゃんとおまんこしている。

ミアちゃんの前にはミイちゃんを抱いて、その前はミアちゃんを抱いて、そしてその前はミイちゃんを……と、姉妹二人と順番におまんこしてきた。

当然ミイちゃんの子宮も僕の精液でいっぱいのハズだが、それでもまだまだシ足りないようだつた。

「ぱぱつ ♡ ぱぱあつ ♡」

『んー？ なあに？』

「♥ ミイちゃんもつ ♡ ? ぱばのあかちゃん ♥ ほしいつ ♡」

話を聞くと、姉妹には産まれた時から父親がいないうらしい。だからおまんこされている間は、大人の男の人から愛情を向けられていると思えるからこそ、僕をパパと呼んで慕うのだろう。

そして目に見えない【愛情】だけでは心細くて、目に見える「赤ちゃん」という繋がりが欲しいのだ。愛されているという証が欲しいのだろう。

ミイちゃんはミアちゃんと違つて、心を操作してもいないし、獣人としての身体能力も封じていない。

けれどミイちゃんには首輪がつけられている。だがこれは、ペツトに用いられる何の効果も持つていない、ただの革製の首輪だ。

ある日、ミイちゃんが「つけて ♡ 」と言つて僕に手渡してきた物だ。ミイちゃんはその気になれば、僕の首をねじ切つて、この家から出ていくこともできる。しかし、彼女はそうしない。

これを付ける事も、ミイちゃんなりの、僕と「繋がつて いる」事の表現なのだろう。

その姿勢、その想いがいじらしくて、目頭がちよつと熱くなる。

『……うん、ミイちゃんも、パパのあかちゃん 産めるようにしてあげるね♡』

体勢を変え、ミアちゃんにそうしたのと同じように、種付けプレスの恰好になる。

僕を簡単に蹴り飛ばせるミイちゃんの両脚を抱えてのし掛かり、僕の胴に簡単に穴を開けられる腕力を持つ手首をつかんで押さえつけ、

僕の喉笛など一瞬で噛み切れる鋭さの歯と頸を持つ少女の小さな口の中を大人の舌で舐<sup>ねぶ</sup>つて蹂躪し、ようやく仔を成す準備が整つたいさなこどもまんこにオトナちゃんちんを深く深く突き刺して、僕よりも強い少女を強姦する。

出来る限りチカラ強く、無理やりに。ミイちゃんのちいさなおまんこを、射精目前となつたオトナちゃんちんで何度も何度も突き立ててレップするのだ。

「♥あつ♥ぱぱつ♥ぱぱあつ♥あつ♥あんつ♥おまんこつ♥おまんこキモチイイつ♥♥♥」

♥じゅふつ♥ぶじゅつ♥じゅふつ♥ぶじゅつ♥じゅふつ♥ぶじゅつ♥……♥

射精のし通しでくたびれた僕のオトナちゃんちんに本日最後の喝を入れ、ミイちゃんの孕みたがりおまんこ内部を擦過し、刺激する。何度も何度も突き叩かれた刺激によつて、いやらしく開いた子宮口へオトナちゃんちんの先端をねじ込み――

『いくよつミイちゃんつゝ赤ちゃんのもとツゝミイちゃんにあげるねつゝパパのあかちゃんつゝちゃんと妊娠するんだよつゝ』

♥♥♥びゆるつ♥びゆるるるつ♥ぶびゆつ♥びゆるるつ♥ぶびゆうつ♥♥♥

「♥♥♥んにやつ♥んにやあああああつ♥♥♥」

♥びゆつ♥びゆびゆつ♥びゆるるつ♥

僕の精液でぐちよぐちよに汚染されているミイちゃんの子宮が、追加された精液によつて更なる汚染を受ける。

ミイちゃんは全身を震わせ、自身の大切な場所へ侵入してきた新しい「熱」の感覚を味わつてゐる。

やはり頭頂部のネコミミはうしろにぺたんと倒れ、しつぽをぴんつと張り、強烈な快楽の波に全身が晒されて震えている。

おそらく本日最後の射精をミイちゃんの膣内で果たしたオトナちゃんちんを引き抜き、アクメで放心状態のミイちゃんのおくちにあてがう。

すると夢見心地で絶頂の余韻に浸りながらも、最後の最後、尿道に

残つた、射精しきれなかつた余り物の精液を味わおうとオトナちゃんちんに吸い付いてきた。

♥……ちゅ ♥ちゅう ♥ちゅつ ♥ちゅるるつ ♥…… ♥

ミイちゃんが満足するまで尿道の中に残つた精液を吸わせてあげる。

暫くすると吸い付くチカラが弱くなり、代わりにちいさな寝息が聞こえるようになった。

ミイちゃんもミアちゃんも何度もアクメに達して、いまは姉妹仲良く【おひるね】の時間になつたようだ。

少女二人のおまたの愛蜜と、何度も注入してあげた精汁とがトロトロに混ざり合い、姉妹のおさなまんこはぐちよぐちよのにゆるにゆるになつてしまつた。

注精した回数など最早忘れたが、雌の分泌液と僕のそれとが混ざり合い、おまんこに收まりきらなかつた分がとろとろに溢れ出て、ベッドの状態も部屋自体に染み付いた性臭も酷い事になつてしまつた。

疲れた……。考えても仕方ないと思いながらも、今日目が覚めたら昼の今までに何発射精したかを思い出さずにはいられなかつた。

---

ミアちゃんとミイちゃんの二つの子宮に、たっぷりと精液を注入する日課を終えた。

おまたからえつちな汁を垂れ流しながらアクメ失神している二人をベッドに置いて、僕は一人で休憩をとることにした。

先日、雌猫たちに初めての発情期が訪れた。それからというもの、毎日【コアカシの花】を用いて調べてみてているのだが、彼女たちに妊娠の兆しは表れなかつた。

『今日も兆し無し……か。なかなか妊娠しないなー……』

彼女らに本格的な発情期が訪れたのは感覚で理解できた。彼女たちの仕草が天真爛漫な少女のものから、艶のある氣だるげで、どこか色っぽい成熟した女性のようになり、なにより、彼女たちの近くにいると、なんというか、牡オスの本能が非常に刺激されるのか、妙にムラつくようになつた。

妹のミイちゃんは相変わらず交尾に閑して寛容で分かりづらかつたが、なんとなく、というレベルでの差異は感じ取れた。

極端だつたのが、姉のミアちゃんだ。彼女は僕を嫌つてゐる風、交尾を嫌つてゐる風だつたのに、たどたどしく僕のちんちんにしゃぶりついてきた時はびっくりしたものだ。

感度も敏感になつたのか、最近はイクのも早く、回数も多くなつた気がする。

発情期突入以前から少女達の子宮に精子を注入してきたので、彼女たちが発情期を迎えたらすぐに妊娠させられると思つていたのだが、ここまで妊娠してくれないと予想外だつた。

ヒト種と猫人種、というか異種族間では子供が出来にくいうハナシはあるが、飽くまで「出来にくい」という事であつて「出来ない」という訳ではない。

事実、人間種と猫人種の混血は、希少価値が発生するほど珍しいというわけではない。つまり、僕と彼女たちの間に子を成すというのは、決して夢物語などではないハズなのだ。

『まさか僕が種無し、とか……？』

最悪なケースを想像してうんざりする。ダメだダメだ、こんなんじや。気分転換に、ちょっと外の空気を吸つてこよう。

ドンドンドン

アクメ疲れで失神している仔猫ちゃん二匹をベッドの上に残し、服を着て寝室から出ると、玄関を叩く音が聞こえてきた。

降雪期に入つて人通りは少くなつたが、薬の調合を生業としている僕のところには、やはりお客様はやつてくる。しかしタイミングよかつた。種付けの最中じやなくて良かつたよ。

「…………」

『はいはーい、いま開けますね～』

ドアの向こうから女性の声がした。女性をこの寒い中、外で待たせるのは忍びないと、急いで玄関を開ける。部屋に流れ込んでくる冷たい空氣に身が震えてしまう。風こそ強くはないけれど、やはり外は相変わらず深々と雪が降つてゐる。寒いわけだ。こんな天候のなか、ど

うしたんだろうか。

「ごめんください……」ちらは……んつ!？」

お客様は何かにびっくりしたようだが、すぐに平静を取り戻した。

「あ、あのっ、え、営業はなさつてているのかしら?」

表情にこそ出さなかつたが、こちらも内心ドキッとした。今来たお客様が、外で降る雪に負けないくらい真つ白で美しい猫獣人の女の子だつたから。ミアちゃんやマイちゃんよりも、ちよつぴりお姉さんっぽい色氣もあるかな。

おつとつと、見とれてる場合じやない。接客しなきや。

『ええ、大丈夫ですよ。どのようなお薬をご所望ですか?』

「あの……猫人族用の熱冷まし……つてありますか……?」

女の子はちよつと恥ずかしそうにモジモジして言う。

なるほど。この猫獣人の女の子は、発情期が故の、強すぎる性欲の昂進に苛まれている真つ中最中なのだな。

猫人族の娘がこの時期求める熱冷ましは、発情を抑える目的で使用される。猫獣人の発情期が近づくと、売り上げがくくつと上がるのだ。買い求める娘たちは、皆一様に恥ずかしそうに買つていったのが記憶に新しい。

しかし、その猫人族用の熱冷まし薬なのだが、すぐに出せない。この所、ミアちゃんマイちゃんとの仔作り仔作りで調剤をサボり気味だつたので、商品の作り置きを怠つていたからだ。

『あ、ああー……申し訳ありません。猫人族用の熱冷ましはただいま切らしております……』

「あ……そなんですか……」

露骨にがつかりされてしまつた。だがここで終わらせないぞ。薬で救えるお客様を助けてあげられないのは薬師の名折れだからな。『……ですが、少々お待ちいただければ、調剤して新しいものをご用意できます。そうですね……十分ほどお時間を頂ければ……』

「ありがとうございます。それでしたら待たせていただきますねつ

少女の顔が、パアつと明るくなつた。やっぱり女子には笑顔が似

合う。あの姉妹にあれだけのことをやつてきて言うのもなんだけど。

『それでは、こちらで少々お待ちになつてください』

寒かつただろうと、薪ストーブで温めていたお茶とクッキーを少女に出して、調剤が終わるまで待つていてもらう事にした。

たしか熱さましに必要な薬草は、地下室で陰干しにしていたハズだ。少女を監禁し、性調教に使つた地下室へ材料を取りに、最近使つていらない階段を降りて行く。

---

### ——純白猫獣人少女・エミの視点——

---

……よかつたあ、偶然発見したこのお薬屋さんで熱冷まし——発

情抑制薬——を手に入れられそう。

念のために常備していたのだけど、今回の「波」には手持ちの量では心許なかつた。

今ですら抑制薬を服用中なのに、すつごいムラムラしてる。自分の強すぎる性欲が憎い。その証拠に、さつきの店員さんの匂いに少しやられちやつたみたいで、子宮の疼きが収まらない。

……奥様とセックスの最中だつたのかしら……。

扉を開けてもらつて驚いたのが、このお部屋と店主の方が漂わせていた、ものすごく濃い性臭だ……。一嗅ぎしただけで私の子宮とおまんこが反応してしまつて、ビックリしておもわず声を上げてしまつた。

誰もいないことを良い事に、ホットパンツの上から触つて確認をする。……ああ……、案の定……。

下着を濡らさないようにと、念の為に愛液シートを使つてはいるけれど、この状態が延々続くのだとしたら、すぐにでも取り替えたいところね……。

さつきの店員さん、私のこの【匂い】には気付いてない……よね……？

人間族は【匂い】に鈍感らしいけど、あの笑顔の裏で「うわ、このオンナ、発情してやがる」なんて思われたら恥ずかしくて顔から火が出ちゃう。

気分を落ち着かせるために、出されたお茶を頂く。ああ、温かい

……。外は雪も降つて風も吹いて寒かつた……。お茶の温かさが、冷えて固まつた体の隅々に染みわたるよう……。

手持無沙汰でクツキーを齧つていると、かすかに誰かの声が聞こえた。これは……子供の声……？ 声がした方向へネコミミを向け、意識を集中させる。

……荒く、苦しそうな呼吸音……。この薬屋さんは病院も兼ねているのかしら。入院中の患者さんの容態が悪くなつたとかじやないと良いけど……。

店員さんが降りて行つた地下室へつながる階段の方を見るが、まだ帰つてくる様子はない……。地下室で探し物をしている音がする。ううん、患者さんに何かあつてからじや遅い。少し様子を見に行こう。そう思つて席を立ち、声がした部屋の前で更に耳を澄ます。

「はあ……はあ……」

「んつ……ぱぱあ……？」

聞こえたのはやはり、苦しそうに喘いでいる子供の声だつた。心配になり静かにドアを開け、部屋の中の様子を探る。すると……。

そこは病室でもなんでもなかつた。

目に入つたのは机に椅子、本棚に薬品棚、そして部屋の中央にひとつ置かれた大きめのベッドと、頭の奥が痺れる程の ものすごく濃い性臭……。そして私と同種の、はだかんぼの女の子が一人……つて、え？

『ミアちゃん……？ それに……ミイちゃんも……？』

見間違えるはずもない。先日から消息が不明になり、探し回つていた私の娘二人の姿がそこにあつた。

「ママ？」

やつぱりそうだ！ なぜこんなところに……それも裸で……。突然

の目的達成に思考が追い付かなかつたが、この部屋に充満する性臭と、裸にひん剥かれ二人に嵌められた首輪や枷とリードの存在に気付き、この子たちに行われていた事のすべてを理解した。

——あの、薬師——！

怒りで全身の毛が逆立ち、血が逆流するのを感じた。

「ママあ！」

ミイちゃんが駆け寄つて抱きついてきた。この数週間、あの薬師ゲスに酷い事をされてきたんだ。ものすごく怖かっただろう。心細かつただろう。

「「めんね……！」「めんね……！」とミイちゃんを抱き締めて謝罪の言葉を口にした。すぐに助けてあげられなかつたママを許して……！

ミイちゃんは私の手をがしりと掴むと、この状況に似つかわしくない笑顔を浮かべてこう言つた。

「ねえ、ダメだよ♪ ママ♥」

『え？』

次の瞬間、私の意識はブツリと途絶えた。最後に覚えていたのは、私の鼻と口を覆つた布のようなものの感触だった。

---

—再び薬師の視点—

あれれ、お客様がいない。

薬の材料が地下室に見当たらなかつたので一階に戻つてきたら、お客様の姿が消えていた。お茶もお菓子も飲みかけ食べかけだ。どこにいったんだろうか。

まさか、寝室の方に行つたんじゃないだろうな。寝室の方を見やると……ちょっとドアが開いている。ヤベエ……。ちょっと油断が過ぎたか。

冷や汗がドツと出る。僕のような平凡な人間種では、何をやつたつて獣人種には勝てないから。同族の、しかも少女を凌辱していたとバレたら、何をされるかわからない。

どうしよう。どうしようどうしようどうしよう。

暗い寝室から猫獣人の女の子が出てきたのだが……はだかんぼのミイちゃんだった。……どうやら寝室には入られていないらしい。つて、ちょっとちよつちよ、はだかんぼのまま出て来ちゃダメだつて……！と慌てていると——

「パパ、ちょっとこっちきて♥」

ミイちゃんに手を引かれ、寝室に入る。

ああ――ごめんよ、パパちょっと今忙しくつて――ミイちゃんのチカラ強い猫獣人の腕力に引っ張られて寝室に入ると――先ほど入店されたお客様さんが、ベッドの上で寝息を立てていた。

『??』

何が起きているのか分からぬ。ミイちゃんの方を見やると、ミイちゃんはにやにやして、あるモノを僕に見せてくれた。それは――僕が以前、ミイちゃんたちに使用した「麻酔薬とハンカチ」だつた。ミイちゃんが言うには、突然この女の人が寝室に入ってきて暴れそうになつたから眠つてもらつたそな。

まあ、僕が姉妹にやつてた事がバレたらマズいから、このお客様を眠させてくれたのはグッジョブだけれども、これからどうすればいいのかな……。

口を封じるのに流石に殺しはノー・グッドだ。なのでここは夢でも見ていた事にしてもらつて、お帰り願うのが最も平和的、かな……。記憶をいじる系薬品のレシピをアレコレと考えていると……

「ねえパパあ」

『ん? どうしたの?』

「この人ね……わたしたちのおかあさんなの」

――思考の流れが止まる。

『え? なんだつて? おかあさん? ミイちゃんたちの?』

なんという偶然か。ミイちゃんを捕獲したら姉のミアちゃんが釣れて、今度釣れたのは姉妹のお母さんとは……。

いやいや、よくよく考えてみたら偶然でも何でもないか。連絡が取れなくなつたミイちゃんを探しにミアちゃんがウチに来たんだし、この白ネコなんだつて二人を探していただろう。

……つて、アレ? なんでピンポイントでウチに来てるんだ? ひょつとして僕のやつてきた事つて僕が知らないだけで、世間にバレてるんじゃないだろうな……。

いやでも、この白猫ちゃんは初対面の時は友好的だつた。バレていたら出合い頭がじらに首はでも刎はねられていただろう。

マイちゃんはおかあさんと言つていたが、ベッドの上でぐつたりしている白猫ちゃんはそうは見えなかつた。思つた以上に若く見える。ミアちゃんやマイちゃんと大差ないぞコレ。

マイちゃんがベッドに飛び乗ると、白猫ちゃんの着ている衣服をテキパキと脱がし始め、ミアちゃんはそれをポカンと眺めていた。丈の短いケープを除き、ブラウスのボタンをぶちぶちと外し、ホットパンツを脱がすと紐パンツが顯わになつていつた。

実の娘に手際よく脱がされてゆく白猫ちゃん——名前をエミさんと言うらしい——の姿に違和感を覚える。特に胸部とそれを覆う見慣れぬ布……。

違和感の正体は、ブラジヤーとそれに覆われた両の乳房だつた。

ミアちゃんとマイちゃんには縁のない下着。そう、白猫——エミさんは体格こそ娘二人と近しいが（娘と比較すれば）大きめなおっぱいが付いていた。それに心なしか、ふにつとしたふくよかな肉感をしている。腰あたりやふとももとか。

人間種からしたら未だ少女にしか見えないが、猫人族としては立派に成熟した女性なのだろう。ミアちゃんとマイちゃんを産んだ女性という事ならば、なるほど当然なのかも知れない。

ブラジヤーはおっぱいの上にずり上げられ、紐パンツとロンググローブ、ガーターベルト・ストッキングという、素っ裸よりもなんだかえつちな感じにひん剥かれてしまつたエミさん。

「パパあ♥準備できたよー♥」

エミさんの着ている服を粗方脱がせたマイちゃんは、僕のもとに駆け寄つて、エミさんを強姦するように促した。

「ねえパパ♥ママとけつこんして、マイちゃんたちの、ほんとのパパになつて♥」

『……え……？』

# 17 白猫ちゃんのお腹に宿る新しい命

「ねえパパ♥」

妹猫娘のミイちゃんが艶のある声で、だがしかし、どこか寂し気な声で言う。

「ママとけつこんして、ミイちゃんたちの、ほんとのパパになつてベッドの上で寝ている母を犯して♥と。

♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

寝室のベッドで眠っているのは、白い毛並みが美しい猫人族の成人女性。（おっぱいがある！）

彼女はエミさんと言い、ミアちゃんミイちゃんのお母さんなのとか。（経産婦！えろい！）

麻酔薬を嗅がせて意識を奪い、ほぼ全裸に近い恰好にしてある。（ロンググローブ！ブラジャー！ガーターベルト・ストッキング！紐パン！）

その行程の全てを担つたのは鬼畜薬剤師であるこの僕……ではなく、この白猫姫の実の娘であるミイちゃんだった。

産まれた時から父親がいなかつたからなのか、ミイちゃんは父性と言ふものに強い憧れを持つているようだ。

ミイちゃんが僕をパパと慕うのも、積極的に僕とおまんこするのも、僕とのこどもを欲しがるのも、実母を僕に捧げようとするのも、そういう繋がりによつて寂しさを埋めようとしているのだろうか。

そう思うと、ミイちゃんをギュッと抱きしめてあげたくなる。彼女のいじらしさに目頭がじわりと熱くなるのを感じた。

ミイちゃんの願いを叶えるためにも、申し訳ないがエミさんには犠牲になつてもらう。

眠るエミさんの脚を開き、穿いている紐パンツの結び目を解く。赤ちゃんのおむつを取り替える時のようにパンツの前面をめくると、おまたの部分にペつたりとナップキンが張り付いていた。

そのナップキンを♥ぺろん♥と剥がすと、愛液が♥とろつ♥と糸を引き、顎あらわになつた陰部から立ち昇る♥むわ……♥という濃密な性臭

が、僕の獸欲を刺激した。

雌汁でぬるぬるになつているおまんこの部分がかすかな光を反射して、てらてらと光つてゐるのがとても煽情的だ。

クロツチ部分に敷かれたナップキンは大量の愛液を吸いこんで、使用済みのおむつのように♥ ぶつくり♥ と膨れあがつていた。

なるほど、このナップキンは下着を汚さない為のモノだつたのか。自らの意志とは別に、こんなに大量の愛液が分泌されるのであれば、こういった猫人族用の生理用品に頼らないと発情期の日常生活はままならないのだな。

エミさんのおまんこは、ほんのりとおねえさんなカタチをしていた。ミアちゃんとミイちゃんのように、ふにふにした大陰唇がぴったり寄り合わかつて構成された愛らしい一本すじによつて、奥の性器部分を隠しているわけではない。

ミアちゃんとミイちゃんにも見えるように、エミさんのその、ほんの少しおねえさんなおまんこ大陰唇を♥ ふにゅつ♥ と押して左右に開く。

そうして露出した小さなクリトリス、控えめな小陰唇、濡れて光る膣口を、娘二人にも観察させる。

ひやりとした外気に触れたからか、それとも牡の肉竿を待ち望んでいるからか、エミさんの濡れる膣口は♥ ひく♥ ひく♥ と収縮と弛緩を繰り返している。その様子に姉妹二人は「わあ……♥」と感嘆の声を漏らしていた。

母親の性器を観察したことで、姉妹は僕とは違う感じの、女性ならではの視点で性的興奮を覚えていたようだつた。

僕のチンポも硬くそそり立ち、早く目の前の雌の生殖器に挿し入れたい衝動に駆られる。今朝からずっと姉妹相手に射精し通しだつたというのに、我ながらムスコの元気さに笑つてしまつた。

眼下には眠れる美しき白猫。両脇には、その白猫が産んだ幼き娘二人を侍らせながら、開かせたエミさんの両脚の間に自身の身体を割り入れる。

先端から零れそうになるほどの透明な汁を滲ませてそそり立つチ

ンポを姉妹に見せつける事で「これから君たちのお母さんを強姦するよ」という旨を、言葉を用いずに宣言した。

すると示し合させたかのように、姉妹は息を荒げて僕の大人チンポに舌を這わせてきた。目の前で母親が犯される事を理解し、そしてそれを望んでいるのだ。

「♥はっふ♥あむ♥れるつ♥ろろつ♥ペちゃ♥ちゅふ♥ちゅぱつ♥」

「♥ちゅつ♥れろれろつ♥ぶちゅ♥ちゅつ♥にゅふ♥れろつ♥」

二人のおさな舌からの同意と激励を受け、どんどんと硬度と射精感を高まるチンポの先端を、そのままゆつくりとエミさんの膣口に向けて移動させる。

するとそれに合わせて姉妹も追従し、愛液に濡れる膣口に大人チンドポを押し当てる、今度は先端で繋がっている母親のおまんこにも舌を這わせ始めた。

「♥ちゅ♥にゅるつ♥はっふ♥」

「ん……♥あふ……♥」

「♥あむつ♥ままあ♥ちゅ♥」

唐突におまんこへ刺激を受けたエミさんが、文字通り夢見心地で甘い声を漏らす。まさか寝ている間に娘たちからおまんこをペロペロされるとは夢にも思つていなかつただろう。

『ふふ♥ママもキモチいいみたいだね♥』

姉妹は夢中で母親のおまんこを舐める。言外にこう言つているのだ。「パパとママのけつこんしきのおてつだいしてあげるね♥」と。

これから僕は、今日出会つたばかりの、特に愛してもいないこの女性を娶り、夫となる。この牝の仔であるミアちゃんとミイちゃんの父親となる為に。

これまで散々姉妹を犯してきたが、それは「肉体・精神」への強姦であり、相手の「社会的地位」を犯す、というのは初めてだ。

だからこそ、これから行われる儀式を思うと、否が応にも股間の血が滾る。

『それじゃ、おちんちん、入れるよ♥』

その宣言は意識なく眠っているエミさんに対するものではなく、僕の両脇に侍らせている娘二人に向けてのものだ。

エミさんのおまんこは侵入してきた異物を拒む事なく優しく包み込んできた。まるで侵入してきた異物の正体を、初めから理解していたかのように。

ゆっくりと押し入れられる雄の生殖器の進みを阻むことはせず、それどころか膣壁をとろとろに潤ませチンポにペたりと吸い付き、媚びるかのように侵入者と同じ形に隙間なく自らを歪ませている。

「♥んつ……♥あつ♥あんつ♥」

♥にゅるにゅる♥と膣肉をかき分けて進む僕のチンポがエミさんのおまんこに全て收まり、先端が赤ちゃんのお部屋の入り口に到達した。すると、子宮口が僕のチンポに軽いキスを繰り返してくる。何度も、何度も。

入れているだけで、動かさなくても気持ちがいい……。膣奥で子宮頸管粘液と先走り液が混ざって♥ちゅうちゅう♥と立てる水音が振動となつて僕に伝わってくる。

そのままエミさんの眠る身体に圧し掛かり、チンポの出し入れをし易いように脚を抱えあげて腰を振ると、僕の動きに合わせて左右のおっぱいが♥ぷるるつぶるるつ♥と揺れる。視力の弱い赤ちゃんが視認しやすいように色を濃くした乳頭に視線を奪われる。その乳頭の色味が、エミさんの見た目の幼さと、肉体の牝としての機能のアンバランスさを象徴していた。

おっぱいの先端は固くしこり、牡からの刺激を心待ちにしているようだった。お望み通り、赤ちゃんのそれとは異なる、快樂を与える為に乳首へと吸い付いてやる。もう片方の空いた乳首には、指でつまんで刺激を与えてあげよう。

「♥きゅんつ♥んつ♥あつ♥あんつ♥はんつ♥」

苦しそうな表情とは対照的に、彼女の上げる嬌声は艶がかつており、牡の獸欲をうまくすぐってくれる。

おっぱいへの刺激もそこそこに継続しつつ、今度はエミさんの口に親指を入れて開かせ、その隙間から無理やりにこちらの舌をねじ込ん

で、恋人同士の甘いキスを始める。

「♥あぶつ♥んむつ♥はつ♥じゅるつ♥れろつ♥れるるつ♥」

意識のないエミさんは、口内に侵入してきた舌に対して何の防御も講じない。少女の無防備なくちびると柔らかな舌をたっぷりと味わいながら、生殖器への蹂躪<sup>それ</sup>も滞りなく行う。すでに子供を二人も産んでいるエミさんのそこは、三人目を獲得すべく僕のチンポから遺伝子を恵んで貰おうと蠢いている。

エミさんのおまんこは、正直言つて大分具合が良い。牡から精液を搾り取るコツを知つてゐるようで、チンポのキモチイイところを的確に、だが時折いたずらっぽく態<sup>わざ</sup>と外した刺激を与えてくる。

それはまるで、年下の坊やの筆おろしに協力的な、えつちなおねえさんが持つ包容力のような魅力と色氣を醸<sup>かも</sup>し出している。そしてその比喩は現実と大きく外れていない。

これから身籠<sup>デキ</sup>るのは、僕にとつては初めてでも、エミさんによつては三人目の赤ちゃんだ。さすがは経産婦。得てきた経験値が僕とは違ひ過ぎる。

エミさんのえつちな経産婦<sup>おねえさん</sup>まんこが僕のおちんちんをオトナにしてくれる。♥ぬるんぬるん♥のおまんこは優しく、だがしつかりと僕のおちんちんを包み込んで射精を促してくる。徐々に確実に高められる僕の射精感。そしてそれは僕の我慢できる限界を超えた。

『いきますよエミさんつ♥僕の赤ちゃん、妊娠してくださいねつ♥』

今度はエミさんに向けて宣言する。妊娠するのが嫌なら起きて抵抗してみてはいかがかな? という挑発と嘲弄を込めて。これから僕に孕まされるオンナからは当然返事は無い。

経験豊富なおまんこ肉から優しく射精を許された僕のチンポは、便器に小便をするように、とても自然にエミさんの子宮に射精をした。

♥びゆるうつ♥びゆつ♥びゆるるつ♥ぶびゆうつ♥びゆーつ  
びゆつ♥

「♥んつ♥ああつ♥あんつ♥んんんつ♥にやああああ……♥」

♥がくつ♥がくがくがくつ♥がくんつ♥

からつぽの子宮にあつあつの精液を受け止めたことで満足したの

か、外部からの遺伝子を獲得したご褒美として、エミさんの本能は眼  
る肉体に性感絶頂を与えたようだ。

絶頂したことでエミさんの孕みたがり発情危険日経産婦まんこは  
悦びを表して収縮し、膣内で射精直後の余韻に浸つている僕のチンポ  
を締め付け、更なる精液のおかわりを要求してくる。

おまんこのお望み通り、射精後で敏感になつてているチンポを絶頂で  
収縮する膣肉をオナホールのように扱つて、残つた精液を膣内部にコ  
キ捨ててやる。

眠るエミさんを犯しきつた事で、奇妙な確信を得た。この射精でエ  
ミさんの子宮内に、僕の子供が出来たと直感で理解できた。

あんなに散々おまんこしてきたミイちゃんとミアちゃんよりも先  
に、その母親であるエミさんとの間に、今日出会つたばかりの雌の胎ハラ  
に子供が出来たというのは少々複雑な気持ちもあるが、この確信に来  
るべき未来の光明を見いだせた。

本日何回目かの射精の快楽に腰を震わせながら荒れた息を整える。  
『ふふふ……。はい、これでパパとママの結婚式は終わつたよ♥ホラ  
♥』

父親になつたばかりの男の生殖器が母親のおまんこから♥ぬる  
……♥と引き抜かれ、姉妹の眼前に晒された。てらてらに濡れて光を  
反射させるチンポは♥ヒクツ♥ヒクツ♥とひくつきながら濃厚な性  
臭を立ち昇らせ、無事に母親への種付けを終えたことを二人に報せて  
いた。

「♥はつ♥はぶつ♥あむつ♥ちゅ♥ちゅつ♥  
「れろつ♥ちゅつ♥れろれろつ♥はむつ♥」

目を細めながら目の前の前のチンポの匂いを嗅いでいた姉妹が……、い  
や、僕の娘となつた二人の姉妹が、母の愛液で濡れた僕のチンポを小さ  
さな舌と幼い手で慰撫してくれる。姉妹の頭を抑え、強烈な性臭を無  
理やりに嗅がせる。

これで僕はエミさんの夫となり、エミさんが身籠つた子供の父親と  
なり、ミアちゃんとミイちゃんの父親となつた。そして間もなく……  
ミアちゃんとミイちゃんが身籠る子供の父親になる。

牝<sup>メス</sup>を支配したという現実と実感に酔い、視界をクラクラと歪ませられるなか、娘二人に慰撫されている僕のチンポは、今まで以上の硬度を取り戻していた。

「♥んん……♥……あ♥……んふつ♥」

たった今種付けされたばかりの牝<sup>メス</sup>の表情からは、先ほどまであった陰は消え去り、今はとても気持ち良さそうに寝息を立てている。薬品によつて無理やりにでも抑えなければならなかつたほど自身を苛ませた性欲を無理やりにでも満たされた事で満足したのだろう。

ぐちゅぐちゅにかき混ぜられた性器から、白く濁つた液体を♥とろつ♥と漏らしている僕の妻となつた牝<sup>オンナ</sup>の首に、後ろ髪を巻き込まないよう気を付けながら取り出した首輪を巻き付け、締める。

コレは言わば結婚指輪の代わりだ。

いま彼女に巻き付けた首輪は【幸せな者の首輪】といつて、巻き付けられた者から思考力と判断力を奪い、その意識を従順なものにする魔道具だ。これでエミさんの肉体も精神も、僕のモノとなつた事を意味する。

薬品は未だ彼女の意識を奪つている。気付けの意味も込めて、再びエミさんを犯す事にする。

姉妹からチンポの主導権を取り戻し、エミさんの体勢を変える。背面座位の恰好で性器を結合させ、身体の前面を姉妹に見せつけるようにエミさんを抱きかかえる。

『ホラ、一人ともおいで♥一緒にママをキモチよくしてあげよう♥』

娘二人からは返事は無い。しかし僕の言葉に従つて、母親の下へと移動してきた。

姉妹は困つたような、何かを強く我慢しているような表情を浮かべている。何が彼女たちを困惑させているのか。くそれはおそらく「背徳感」だろう。

真つ先におっぱいに吸い付いたのが、赤ちゃん返りをしてしまつた姉・ミアちゃんだつた。昔、本当に赤ちゃんだつた頃にそつうして、たように、母親の乳首に吸い付く。

だが、過去のそれと決定的に違うのが、父親のチンポに突き上げら

れ、意識なく喘ぎ声を漏らしながら、性的興奮によつて勃起し敏感になつた母親の乳首に吸い付いている、という点だろう。

「♥はつ♥はぶつ♥ちゅ♥……んつ♥んつ♥ママ♥ままあ♥」

♥ふるふる♥と震えるおっぱいに吸い付きながら、目の前で犯されている母のおまんこを自身のおまんこと重ね合わせているのか、ミアちゃんは母親をオカズにしながら自分のおまたをいじろうとしている。

「♥んつ♥うつ♥んー……♥」

だがしかし、穿かされたおむつが邪魔をして上手におまたいじりが出来ずにムズがつていて。かわいそなので、穿いているおむつを外してあげた。

すると、可愛らしいワレメの隙間から、僕の精液が♥とろつ♥と漏れ出ていた。本来ならおしつこを受け止める部分に、垂れ出た精液とミアちゃん自身が興奮した事の証が混じつたシミを作つていて、ちよつとえつちだつた。

♥くちゅくちゅつ♥ぬりゅつ♥くにくに♥ぶにゅつ♥

「♥あつ♥はつ♥んつ♥んやあつ♥あつ♥あんつ♥あああつ♥んにやああんつ♥」

赤ちゃんになつてもおなに自慰のやり方は忘れていなかつたようで、エミさんのおっぱいに吸い付きながら、自らの指でおまんこを慰めていれる。

幸せそうにお母さんのおっぱいに♥？ちゅうちゅう♥？と吸い付いている姉を羨ましそうに見ている妹のミイちゃんは、おねえさんになつたプライドが邪魔しているのか、お母さんのおっぱいに口をつけるので迷つていてるようだつた。

『ミイちゃんも、お母さんのおっぱい、吸つてあげて♥』

まざついているミイちゃんに、助け船を出してあげる。自分の為でなく、母の為だと言い聞かせると、恥ずかしそうにだが遠慮がちにお母さんのおっぱいに吸い付き始めた。

♥？ちゅ♥？ちゅつ♥？ちゅうちゅう……♥？

姉妹が仲良く母親の乳首に夢中になつて吸い付いている姿が、なん

とも微笑ましい。そして時折♥こくんこくん♥と喉を鳴らしていた。  
……もしかしてエミさんは、母乳が出るのか……？ 僕が口を付けた  
時には出なかつたと思つたが……。まあいい。

僕から見て、左から姉・母・妹の並びで、姉妹は自らの指で、母親  
は僕のチンポで秘所をかき混ぜられ♥くちゅくちゅ♥とか♥ぐ  
ちゅつぐちゅつ♥との音色を奏で、室内にいやらしい水音が木霊す  
る。

腰の振りを安定させたかつたので、仰向けに寝転がる。恰好としては仰向けでする寝バックだ。挿入は浅くなつたものの、これによつてエミさんを抱つこしていた僕の両手が自由になつた。

僕たちの姿勢に倣つた姉妹も、寝転がりながらエミさんのおっぱいに吸い付けるようになつた。

自由になつた腕で姉妹を抱き締め、そのまま股間に手を伸ばし、おまんこをいじつてあげる。僕が二人においててまんこしてあげる事で、エミさんのおっぱいに吸い付く事に集中できるようになつた。

目の前で犯されている母をオカズに、おててまんこされて快楽を貪る姉妹。そしてその姉妹の痴態をオカズに腰を振り、エミさんのおまんこでチンポを刺激する僕。そのチンポに突き上げられ、意識なく喘ぎ声を上げるエミさんという、なんとも混沌とした状況になつた。

♥ぱちゅつ♥ぱちゅつ♥ぱちゅつ♥ぱちゅつ♥ぱちゅつ♥ぱ  
ちゅつ♥……

「♥んつ♥あつ♥あんつ♥やあつ♥んん♥」

「♥あつ♥パパつ♥あつ♥やあんつ♥はふつ♥んん一つ♥」

「♥んあつ♥ママあつ♥はあつ♥ふわあ♥あつ♥あつ♥」

いやらしい水音・肉が弾く音・三者三様の喘ぎ声が部屋に充満する。外積もる雪が天然の防音材となつてくれるだろうから、多少の大声は大丈夫だろう。

指先で姉妹の、チンポでエミさんの膣の感触を愉しみながらこれらのことを考えると、おまんこの中の僕のチンポが更に硬くなつた。

これからも変わらずに、僕はミアちゃんとマイちゃんの姉妹を犯し続けるだろう。エミさんと繋がる以前、僕と姉妹の関係は、ただの男

女でしかなかつた。

しかしこれからは違う。エミさんと結ばれた事で、僕は娘二人の父親となつた。そしてこれからは、父親としての僕が、我が子である娘姉妹を犯し、孕ませるのだ。

今までと何も変わらない。しかしこれからは何もかもが違う。

名実ともに僕の娘となつた二人姉妹に、僕の種を仕込んで僕の子供を産ませる。これが興奮せずにいられるだろうか。

将来汚される運命を背負わされた娘を産んだ母親の膣が、大量の愛液とぬくもりでもつて、将来娘を汚す肉竿の性感を慰撫してくる。その動きは浅ましくも、自らも種を受け取りたいが為の反応だ。

「♥ふあつ♥ふやんつ♥はあんつ♥ああんつ♥」

♥ぱんつ♥ぱんつ♥と、肉が弾ける音が寝室に響く。エミさんの孕みたがり発情期おまんこに搾られて、一擦りごとにどんどんと射精感が高められる。姉妹の幼いが故の浅い膣奥に指を挿し入れ、ねちっこく子宮口を指で撫でてあげると、姉妹の嬌声が、更に艶がかつたものになつてゆく。

『いくよつ　お母さんのおまんこに、赤ちゃんのもとつ、いっぱい出すからねつ』

♥びゆるつ♥びゆゆつ♥びゆるるつ♥ぶびゅつ♥びゆうつ♥……。 「♥つ♥きゅううううううん……♥んつ♥んはあ……♥はあ……♥」

僕の射精を受け止めたエミさんの腰が再び♥ガクガクツ♥と震え、幸せの絶頂を迎えたのだろう、眠りながらでも全身から溢れ出る快楽を味わつていていたようだつた。

「♥やあつ♥んやつ♥んにやああああん……♥んつ♥あつ……♥」  
♥ガクツ♥ガクガクツ♥ぶち――――――・♥ちよろつ♥ちよろちよろつ……♥

するとチンポを咥え込んでいるところの上から、エミさんの体内で温められた水が♥ぷしゅうううつ♥と噴き出した。

「♥はわああああはあ……♥」

性欲抑制薬を使つてでも抑え込みたかつた子宮の寂しさが、温かな精液で満たされた事によつて、強張こわばつていた子宮は和やわらぎ、一匹の雌

として、12秒にも渡る失禁で悦びを表現してゐようだつた。

えつちなおもらしなら姉妹もよくする。その為か、母のその痴態が自身と重なつたのか、二人のおまんこが♥きゅうつ♥と締まつたかと思うと……。

「♥ふあつ ♥ふわあ ♥ああ……♥」「♥んにいつ ♥にやああ ♥あああ

……♥」

♥ふしゅつ ♥ちゅうううう……♥ちゅつ ♥ちよろろつ ♥ちよろつ

♥ちよろつ……♥

少量ではあつたが、二人分。姉妹も母に引っ張られたように、えつちなおもらしをしながら絶頂に達したようだつた。

しつぽをぴんつと伸ばし、頭の上のネコミミがうしろにぺたんと倒れている。アクメの強すぎる快楽に悶えている時の行動だ。

僕の指をおちんちんだと勘違いしている姉妹のおまんこが♥きゅうきゅう♥とヒクつき、腰を♥かくかくつ♥と震わせているのがカワイイ。

上にエミさんを乗つけながら呼吸を整えつつ、今日だけで何回射精したかを思い出す。

ええと、朝っぱらから寝起きで姉妹に（おそらく）3回ずつ。そしてエミさんに2回。合計8回だが、昨日の晩の分もカウントすると……14回……？　ちよつとやりすぎじやないかな。足腰も、ちんちん自体もひりひりして痛みを訴えている。

エミさんがウチに入店してきたのがお昼くらいか？　今が何時か分からなければ、まだそんなに時間も経つていらないだろう。

疲労から睡魔に襲われる。ああ……昼飯食べてないし、おなかが空いた。でも眠い……。ちよつと寝て、晩飯の用意して……。

♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

……ああ……。

きもちいい……。

やつぱり眠るのつて気持ちイイよなあ……。ずーっと寝て いたい。

思考できるという事は、眠りが浅くなつてきたという事だ。うつか

り昼寝をしてしまったようだ。いかんいかん。ミアちゃんとミイちゃんのごはんを作つてあげないと。

意外とおつちよこちよい所のあるミイちゃんに、包丁を握らせるのはちょっと怖いしな……。さて、今日は何を作ろう。料理はそんなに得意つてわけじやないけど、作らないとご飯は出来上がりないからなー……。

掛け布団を退けて身体を起こす。寝返りを打つて乱れた寝間着の上下を整えながら寝室から出る。……あれ？ 僕はこんな恰好してたっけか。

窓の外は相変わらず雪が深々と降っていた。時間が大分経過していたようで、もう真っ暗だ。……あれ？ いつを基準に大分時間が経過したなんて思つたんだろう。

そんな事を考えていると、空腹感を刺激する香りが漂ってきた。そりいえば昼飯も食べずにいたんだつけ。……あれ？ 昼飯も食わずには、僕は何をしていたんだつけか。

いまだシャツキリとしない頭をポリポリと搔きながら台所へ向かう。

そこでは三人のネコミニ娘たちが楽しそうにおしゃべりをしているようだつた。いやちがう、おしゃべりしながら料理をしているのだ。

「ママ、にんじんさんのかわ むけたよー♥」

「ふふ♥ありがと ミイちゃん♥ミアちゃん、もうちょっと待つてね♥」

「ままー♥まま♥」

ああ、そうだ。そうだつた。そうだつたつけ。

台所にやつてきた僕の気配に気付いたようで、ネコミニ娘たちが僕の方に振り向いた。

「あ♥パパ！おねぼうさんだよー♥」

「ぱぱー、ちつちー」

ミイちゃんとミアちゃんが、僕の足に抱きついてきた。そして「おはようござります♥ご主人さま♥」

## 【エミさん】

えみさん

猫獣人・牝・経産婦

ミアちゃんとミイちゃんのお母さんであるが、ミアちゃんとミイちゃんの父親は別人。発情期の性欲の昂進が強く起ころる体质で、過去二回とも昂った性欲に流されて行きずりの猫人族の男に引っかかって妊娠してしまった。

それ以来性欲を抑える効果のある猫人族用の熱冷ましを常備し、適宜服用するようにしている。

最近連絡が途絶えた娘たちを探しに、スマックの街へやつてきた。  
異種族間での性行為は初めて。

## 【幸福な者の首輪】

こうふくなもののがわ

呪魔具 禁制品（許可制）

単純に奴隸の首輪と呼ばれるが、直接的すぎるその名は忌避され、このような名前で呼ばれる事が多い。

着用者は現状に対して疑問を抱けなくなり、自らを恵まれていると思はれる呪いがかけられている。

奴隸が奴隸らしくいるにはどうしたら良いか、という命題への答え。

相手の人格を否定・洗脳する魔具である為、現在は無許可での所持は罪になる。

# 18 姉のミアちゃん妊娠録

♥被害者一覧  
どうじょうじんぶつ

名前：ミイ

人種：猫獣人・雌

状態：発情期

職業：お嫁さん・元・怪盗

備考：おとうさん大好き

名前：ミア

人種：猫獣人・雌

状態：発情期

職業：お嫁さん・元・暗殺者

備考：赤ちゃん返り中

名前：エミ

人種：白猫獣人・雌

状態：妊娠三週目・経産婦

職業：お嫁さん・元・野伏

備考：首輪による洗脳済み

♥  
『ああつ♥エミさんつ♥キモチいいですつ♥エミさんのおまんこつ  
呼吸を荒げながら腰を振つて、エミさんの経産発情妊婦おまんこの  
感触を愉しませてもらつていてる。  
♥じゅぶつ♥にゅぶつ♥ぶじゅつ♥にゅぶつ♥ぶぶつ♥ぐぶつ  
ぬぶつ♥

「♥？あつ♥？うふふつ♥んつ♥？おとーさんつ♥あんつ♥？今日

も、おちんちんみるく出すの、頑張つてねつ♥やんつ♥?』

エミさんは既に僕の子供を身籠もつてているが、膣内を行き来してい  
るチンポを妊娠済みのおまんこ肉で愛情たっぷりに包み込み、ねつと  
りと絡みついて精液を搾り取ろうとしてくる。身籠つてなお、発情を  
収める様子は無いようだ。

そろそろ限界が近い。膣内で射精しないよう、ぬるぬるのおまんこ  
から引き抜き、エミさんの眼前にチンポを突き付ける。すると、自身  
の愛液でてかてかと光を反射しているチンポに軽めのキスをした後、  
手に取つてやさしく♥シコシコ♥と扱き始めた。

♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥くちゅつ♥く  
ちゅつ♥

『♥エミさんつ♥出ますつ♥精液つ♥出ますつ♥』

「♥はい、どうぞ♥たくさん出してくださいね♥」

エミさんの愛液によつて扱かれた時に発生する水音を聞きつつ、僕  
はキモチよく射精させてもらつた。

♥びゅつ♥びゅるるつ♥びゅるるるつ♥びゅううつ♥ぶびゅうう  
うつ♥

自分でも驚くほどの量。どぶんどぶんつと脈打ちながら、白く濁つ  
た精液が飛び出て、口の開いたビンの中を汚してゆく。

透明で縦長のビンの底には白い粉末が山を作つており、それに降り  
かかつた精液がじわりじわりと溶け合つていった。

『う♥ふう……♥』

「はい♥お射精、おつかれさまでした♥』

エミさんのおててによる、本日三回目の射精を終えた疲労感からた  
め息が漏れる。しかし、これが終わりではない。始まりなのだ。

射精を終えたばかりの僕の半勃起チンポが寒いと言うので、ふたた  
びエミさんのおまんこの中に避難する。♥にゅるるつ♥という感触  
がキモチいいので腰を前後させておまんこの感触を愉しませてもら  
おう。

「あんつ♥んもうつ♥おとーさんつたら♥』

ちよつぴり困つた顔をしているエミさんの♥ぷるんぷるん♥と揺

れる、触り心地最高のおっぱいを揉む。揉む。揉む。♥ふよんふよん

ああ……触つていいだけでキモチイ。ずっと触つていたくなる。  
でもいまは揉む。揉む。揉む。そしておっぱいの先っぽを摘まんで

「んつ  
♥」

♥ぴゅつ ♥ぴゆるるつ ♥ぴゅうつ ♥

エミさんのおっぱいのさきつぽからおっぱいが飛び出る。

「♥あつ ♥んつ ♥あつ ♥」

♥ぴゅううつ ♥ぴゅうつ ♥ぴゅつ ♥ぴゅうつ ♥

搾り出されたおっぱいは、先ほど僕が精液を放出したビンの中に入  
れてゆく。

エミさんが手に持つビンの底には、僕の精液に溶け切つていらない白  
い粉が、サラサラと流れて音を立てている。それらとエミさんの搾り  
たてのおっぱいがジワジワと混ざってゆく。

「あつ ♥んつ ♥ああ…… ♥ん ♥」

♥ふしゅ ♥ぴゅううつ ♥ぴゅうつ ♥

エミさんのおっぱいからおっぱいを搾り取り、ビンの底に流し込  
む。おいしそうなエミさんのおっぱいが、人肌に温かい乳汁が、20  
0 m l 哺乳瓶の半分近くまで満たしてゆく。

これでビンの中には僕の精液と、エミさんのおっぱいと、白い粉と  
が入れられ、ちゃぶんちやぶんと揺らされて混ぜられた。

白い粉の正体は、僕が調合した「排卵誘発剤」だ。これを飲ませて  
無理やりに排卵させ、今日こそミアちゃんを孕ませる。それが今回の  
目的だから。

閉められたビンの蓋は、エミさんのおっぱいの先っぽと似たような  
形をしている。……つまり、このビンは哺乳瓶であり、先ほどの  
謎な儀式は、赤ちゃんに飲ませるミルクを作っているところだつたの  
だ。

えつちなミルクを作られてゆく過程を目の前で見せつけられて、エ

ミさんに抱っこされていたミアちゃんは、ほっぺを紅潮させていた。

「ママ♥ミイちゃんも、ミアちゃんにおっぱいあげるおてつだい し  
たーい♥」

「それじゃあミイちゃん、赤ちゃんお姉ちゃんに、ミルクあげてくれる  
？」

「はーい♥ほらミアちゃん♥ミルクの時間でちゅよ♪♥」

おまんこにチンポを入れられた状態で抱っこされた長女に、いやら  
しく作られたミルクを哺乳瓶で授乳する、ミアちゃんの妹のミイちゃ  
ん。

大好きな母の母乳と、自らを妊娠させる薬と、強姦魔である父の精  
液とが混じったミルクを、今や姉となつた妹から与えられる。

「うふふつ♥おねえちゃん、パパとママのミルク、おいしーい？」

その問い合わせるように、口に放り込まれた人工の乳首を咥え、  
ちゅうちゅうと音を立てて内容物を吸い出し、ミアちゃんは飲み込ん  
でゆく。

おっぱいをあげるお手伝いをしてくれたミイちゃんの頭をなでな  
でしつつ、僕は母親のおまんこに入れているチンポを動かす。

ミルクに含まれた排卵誘発物質が、発情期のミアちゃんの卵巣を刺  
激して排卵させるまでに、少し時間がかかるだろう。それまでに、別  
の方法でのアプローチもしておこう。

『あれ？ ミアちゃん、おむつが湿ってないね。おしつこガマンし  
てるのかな？』

暗に、おしつこをしろという意を込めて、娘に穿かせたおむつのお  
またの部分をさわりながら、授乳中の娘に声を掛ける。すると……。  
「……ん——……♥」

しょわあああああ……♥

おむつのおまたの部分が重く、温かくなり、それと同時におむつが  
湿つた事を表す青い線が浮かび上がってきた。

おなかの辺りにあるストッパーをペリペリとはがし、おむつを前開  
きすると、かわいらしい一本のたてすじがあらわになり、出したばかりの温かなおしつこの香りが「ふわり……♥」と立ち昇った。

たてすじの奥からは、おしつこ以外の液体が垂れて性器周りをヌルヌルに濡らしており、ミアちゃんの中でおむつ替えというものが、性行為と同等のいやらしい意味として認識されているのが見て取れた。性的興奮している証として、ミアちゃんの下腹部に刻み付けられた淫紋が、薄っすらと光を放っている。

なんてえつちな赤ちゃんだろう♥

ミアちゃんのおまんこと子宮には、淫魔と同等の、消化器としての機能を植え付けてある。

人々が日々、消える事のない食欲という飢餓感に苛まれると同じように、生殖器を淫魔のモノに変質されてしまうと、普段の食欲に、食欲の飢餓感が上乗せされる。

そしてその性の飢餓感は、異性から精を受け取らなければ絶対に癒える事は無く、食物の摂取や性器への愛撫では満たされる事はおろか、いたずらに飢餓感を刺激するだけである。

淫魔化とは、かくも恐ろしいものだ。だからこそ、それを利用させてもらつた。

ミアちゃんは食欲<sup>おなかがすく</sup>が刺激されるだけでも、そして食物を摂取する事でも、単純な食欲の昂進でも「淫魔の食欲」が刺激され、子宮に精液を注がれなければ、永遠にその飢えが満たされる事はない。

そしてその子宮の飢餓感は、時間と共にどんどんと強まってゆくといふ、とつてもえつちな身体になつてしまつたのだ。

ミルクを与えられて、おむつ替えでえつちな気分になつて、排卵誘発剤で生物としての生殖欲を刺激されて、発情期であるミアちゃんの内に宿る「淫魔の食欲」は、今や最高潮に達しようとしていた。

「けふつ♥」

ミアちゃんが突然、ビクンッと身体を震わせた。下腹部を見てみると、刻まれた淫紋を、エミさんの指がなぞつている。

「♥にやあんつ♥」

ミアちゃんが突然、ビクンッと身体を震わせた。下腹部を見てみると、刻まれた淫紋を、エミさんの指がなぞつている。

「ママ、ミアちゃんのおなかに なにしてるの?」

「これはね、卵巣マッサージ♥ 淫魔になつて浮かび上がつた淫紋は、そのまま女の子のキモチイイところに繋がつてているのよ♥」

僕も気になつていた質問を、ミイちゃんがしてくれた。

エミさんが言うには、子宮と膣と卵巣を象<sup>かたど</sup>つて描かれた淫紋は、その絵の部分がそのまま生殖器の部位と感覚が繋がつてているのだそう。子宮を象<sup>かたど</sup>つた部分を触れば子宮を。卵巣を象<sup>かたど</sup>つた部分を触れば卵巣に刺激が行くらしい。

「だから、ミアちゃんの卵巣をマッサージして、排卵を促すの♥ミアちゃんが、パパの赤ちゃんを妊娠できるようにね♥」

「ミイちゃんも おてつだい したーい♥」

「ふふつ♥それじやあミイちゃんは、こつちの卵巣をお願いね♥」

ミイちゃんがミアちゃんの左の卵巣を。エミさんが右の卵巣を担当して、卵巣マッサージ……いや、排卵マッサージを行つていた。

「♥にやつ♥んにやああんつ♥やつ♥やああつ♥ママつ♥ままあつ♥んにつ♥にやあつ♥」

「ほへら♥卵巣がキモチイイね♥ いっぱいモミモミしてあげるから、排卵してパパの赤ちゃん妊娠しようね♥」

「おねえちゃんのらんそう、いいこいいこ♥」

同じ女性ならではのチカラ加減で、敏感な卵巣<sup>ないぞう</sup>を刺激された事で、ミアちゃんは叫び声に近い嬌声をあげて、腰をガクガク♥と震わせている。

その姿がとてもえつちで、エミさんのおまんこに入つていてる僕のチンポが、更に硬さを取り戻してきた。

「♥んにつ♥んにいいいいい♥♥♥♥」

ひときわ強く♥ビクンツ♥と跳ねたあと、小刻みに♥ぷるぷるぷる♥と腰が震え、チカラなく♥ちよろつちよろろろつ♥とお漏らしされてミアちゃんの膀胱内に残つていた少量のおしつこが出てきた。

ミイちゃんとエミさんによる排卵マッサージは、いつのまにか終わつており、いまエミさんは娘のおまんこの中に指を入れて、その感触を確かめているようだつた。

何度か♥くちゅくちゅ♥つとおまんこの内部をかき回すと、確認が

終わったのか、入れていたその指を引き抜き――

「♥はい♥パパ♥妊娠準備できました♥」

そう言つて、排卵アクメでぐつたりとした娘のおまんこを♥くぱ  
……♥広げて僕に見せつけてきた。

「♥ミアちゃんのあかちゃんおまんこに♥あかちゃん仕込んでください♥」

実の娘のおまんこを犯して孕ませると誘つてくる僕の妻。姉が犯され孕まされるのを待ち望んでいる妹。そして、瞳にハートマークを宿して父親に犯され孕まされるのを心待ちにしている姉。

どいつもこいつも僕好みの牝<sup>メス</sup>になりやがつて……。

妻のおまんこで暴発寸前になるまで温められた孕ませ棒を引き抜き、その妻に抱つこされ、性器を広げられている娘のおまんこへ、勢いよく挿し入れる。

娘のあかちゃんおまんこを子宮に向けて突き進んでいる途中から、僕のチンポは限界を迎える射精してしまったが、構うことなく奥の子宮口へ生殖器を叩きつけた。

「♥んにやつ♥んにやあんつ♥にやつ♥にやあああつ♥」

♥びゆるびゆるつ♥びゆるるつ♥びゆうつ♥びゅびゅつ♥びゆるるつ♥

ミアちゃんのおまんこの入り口から奥の子宮口まで突き進むのは一瞬だったが、なんとか全て射精しきる前にチンポの先端を子宮口まで接続する事には成功出来た。

種付けはこれで終わりじゃない。むしろ本番はこれからだ。  
『ミアちゃん。ミアちゃんが赤ちゃん妊娠する所、パパが見ててあげるからねつ♥』

種付けされて子宮内に侵入してきた精液の感触に恍惚とした表情を浮かべている娘にそう言つて、彼女の細い二の腕を掴み、思いつきり腰を叩きつける。

「♥あつ♥やつ♥やあああつ♥にやつ♥んにやあああつ♥んにいいいいつ♥にやああつ♥あつ♥にやあつ♥」

『ママにも見ててもらおうねつ♥ミアちゃんが妊娠するところつ♥

ミイちゃんにも見ててもらおうねつ♥ミアちゃんが妊娠するところつ♥もうすぐつ♥もうすぐミアちゃん、妊娠してママになるよつ赤ちゃんなのに、赤ちゃんにんしんするんだよつ♥』

♥じゅふ♥じゅふ♥じゅふ♥じゅふ♥じゅふ♥じゅふ♥じゅふ♥じゅふ♥

往復するオトナチンポの太さと亀頭のカリ首で、ミアちゃんの小さな膣道を、先端を叩きつけて子宮を、射精した精液で子宮の内部を愛撫して、ミアちゃんを絶頂に導いてゆく。

「♥あつ♥あんつ♥やんつ♥いやんつ♥にやつ♥んにやああつ♥」

♥ぐぶ♥ぐぶ♥ぐぶ♥ぐぶ♥ぐぶ♥ぐぶ♥ぐぶ♥ぐぶ♥ぐぶ♥ぐぶ

ぶつ♥

子宮に与える衝撃が逃げないよう、僕に二の腕を掴まれて犯され、逃げられないように上から細い腰を母親に抑えつけられ貫かれ、妹による淫紋マッサージによつて刺激され、絶え間なく子宮を愛撫され続けるミアちゃんは、襲い掛かってくる快楽を前に意識も飛び飛びになつていた。

しかし、淫魔の因子を植え付けられたミアちゃんの子宮口はさすがとと言うべきか、宿主がそんな状態であつても積極的に僕の、父親のチンポに吸い付いて、遺伝子ミルクを欲しがつていた。

……ところで、膣道というのは赤ちゃんの通り道か。それとも男のチンポを刺激し、射精を促すための器官なのだろうか。

使用する頻度の高さから考えれば、本質はどちらなのかが分かるはずだ。赤ちゃんが膣道を一回通るまでに、チンポは一体何回膣道を使用する?

畢竟膣道とは、男のチンポをキモチよくしてあげる器官に他ならない。

では、その奥の子宮の役割とは? 赤ちゃんを育む場所か? それとも膣道と同じく、男のチンポを刺激するための器官か?

ミアちゃんの膣道は、彼女の体格も相まって、子宮口までの道が短い。僕の勃起チンポの半分くらいで子宮口に到達してしまう程だ。だが、ここ最近の、ミアちゃんと沢山おまんこしてきた事によつて、

ミアちゃんの子宮口はとても柔らかくなつた。それこそ、僕のチンポを包み込めるほどに。

奥まで突き入れた僕のおとなチンポが♥ぬるんつ♥と咥え込んだ。♥にゆむつにゆむつ♥と飲み込まれてゆく。子宮口をくぐり、子宮頸管を通過し、子宮の奥まで僕のチンポが♥にゆるにゆる♥と飲み込まれてゆく。

グイグイ押し上げる力タチで子宮底に着底すると、子宮内膜全体が僕のチンポに吸い付くように密着し、キモチイイ刺激を与えてくる。亀頭部分の全てが子宮内にぴっちりと納まつた頃、チンポの根元までもが、ミアちゃんのおまんこに納まつていた。

この日、ミアちゃんの子宮は淫魔の性器として覚醒を果たしたのか、赤ちゃんを育む場所から、精液を患んでもらうために男のチンポをキモチよくする淫売器官へと堕落した。

「♥んつ♥んあつ♥んおつ♥おつ♥んおつ♥お?つ♥ん?ほおつ♥」

新たな快楽器官となつた子宮から生み出される、強烈な望まぬ快楽を与えられ、よだれを垂らしながらケモノのような喘ぎ声を上げているミアちゃん。

大好きな母親と妹は、父親という立場で自らを強姦していく男に対して非常に協力的で、胎<sup>ハラ</sup>に子供を仕込む手伝いを積極的に行つている。

そして女の子としてとても大切な子宮は、産まれて初めて排卵した自らの卵子よりも、自らの胎内に宿る新しい命の父親となる、目の前の強姦魔のチンポを先に迎え入れる事になつてしまつた。

また、強姦魔のチンポを迎えた子宮は、強姦魔から子種を恵んでもらおうと、媚びたように収縮してチンポに刺激を与えている。

今や自らの性器にすら裏切られてしまつた可哀そうなミアちゃん。そんな可哀そうなミアちやんだからこそ、僕のチンポは興奮でなお硬くそそり立つのだ。

♥ぶちゅ♥ぐちゅ♥ぬちゅ♥ずちゅ♥にゆる♥くちゅ♥むちゅつ

『♥ミアちゃんつ♥いくよつ♥おとうさんがミアちゃんの赤ちゃんの

♥

おとうさんになつてあげるからねつ♥』

母に抱いたかれて母に押さえつけられ、妊娠準備の整つた子宮の中で、精子をたっぷり含んだ精液を放出する。

♥ ぶびゅるるるるつ ♥ ぶびゅうつ ♥ びゅるるびゅるつ ♥ ぶびゅるうつ ♥

亀頭部分が子宮内にすっぽりと納まり、子宮内膜にぴつたりと吸い付かれたチンポの先から出た精液は、逃げ場を求めてミアちゃんの卵管へと殺到する。

「♥ はぐつ ♥ うううつ ♥ あつ ♥ あ？ はあつ ♥ はつ ♥ んつ ♥ お？ あつ ♥」

卵管すら精液によつて犯されたミアちゃんは、涙と鼻水と涎で、かわいいお顔がグシャグシャになつていた。

……卵管の奥には排卵したてのミアちゃんの卵子が待つてゐる。そう時間もかからず、卵子は僕の精子たちに犯されて受精を果たすだろう。

ミアちゃんのキツキツあかちゃん淫魔おまんこから使命を果たしたチンポを引き抜いて、ミアちゃんの眼前に突きつける。

「あむつ ♥ はむつ ♥ ちゅ…… ♥ ちゅう ♥ ちゅつ ♥ ちゅ…… ♥ ジゅるつ ♥」

もはや息も絶え絶えの状態であるにも関わらず、目の前に現れたおちんぽさまに口づけをして、舌を這わせ始めた。

朦朧としていても、淫魔の末席としての矜持ほんのうが彼女をそうさせるのだろうか。尿道に残つた精液を、愛おしそうに吸い出している。

「♥ えらいね ♥ ちゃんとパパのおちんちん ♥ じようずにキモチよく出来たね ♥」

「ミアちゃん、これでパパのあかちゃん ニンシンした？」

「♥ うん ♥ パパから赤ちゃんのもと、たくさんもらえたから、ミアちゃん赤ちゃん妊娠するよ ♥」

「♥ よかつたね～ミアちゃん ♥」

仔作りを見守つてきた母と妹が、新しい命を宿すミアちゃんを祝福する。当のミアちゃんは、♥ ちゅうちゅう ♥ とおちんちんに吸い付き

ながらも、疲れからかウトウトとし始めた。

……エミさんの次に僕の子供を孕んだ僕の娘……。ミアちゃんに對して沸き上がる愛情が、さらに強まつた氣がする。

もうまもなく受精するミアちゃんの卵子が成長し、数か月後に産まれたら、すぐに次の赤ちゃんを仕込んで、また孕ませてあげよう。ミアちゃんを、赤ちゃんのまま赤ちゃんを産むお母さんにしてあげるからね♥

未来の淫行計画を思い描き、僕の生殖器が更にやる気をだして硬くなる。

次は妹のミイちゃん。キミが妊娠する番だよ♥  
つづく!

# 19 ミイちゃん孕ませツクスレイプ！

「♥あひつ♥はひつ♥んあ……つ♥」

♥びくんつ♥びくつ♥びくんつ♥

受精妊娠孕ませツクスアクメで失神しちゃつたミアちゃんを横目に、次の牝を孕ませるための行動に移る。

ミアちゃんのおまんこから♥ぬるう……つ♥とオトナちんちんを引き抜く。

『ミアちゃん、よくがんばったね♥　えらいえらい♥　またあとで種付けしてあげるね♥』

「……つ♥」

頭を撫でてあげたけれど、おまんこのヒクつきで返事をするミアちゃん♥　妹の番が終わつたら、すぐにもハメて欲しいって言つている♥

「ホラ、ミイちゃん♥　お父さんにちやあんと“おねだり”しなきや

♥」

「うん……♥　おとーさん……♥　ミイちゃんの事もニンシンさせて

抱っこをせがむ幼児のように両手を僕に向けて伸ばし、妊娠させて欲しがつている。

最後のターゲットは、末娘のミイちゃんだ。

実の母親に後ろ向きに足を抱えられるカタチで抱っこされている事で、幼いたてすじがふんわりと開かれ、これから妊娠する愛おしい性器が露出して見えている。

実の母と姉の“犯されて子供を仕込まれるところ”を最初から最後まで見せつけられて、ミイちゃん自身のおまんこも♥トロトロ♥に濡れている。

理解しているのだ。次は自分の番だと。母と姉と同じように犯されて孕まされるのだと、ミイちゃんの本能が完全に理解している証だ。

二匹のメス猫を孕ませた実績を持つ屹立した男性器を、ぬるぬるおまんこに近付け、先端の亀頭部分を膣口に宛がい、勢いよく腰を押し出して生殖器を挿入する。

♥ぬるつぬるぬるぬるつ♥

「♥あつ♥ああんつ♥ お父さんのおちんちん♥おつきくつて♥キモチいい……♥」

トロトロおまんこに僕のオトナちゃんちんが♥ぬぷぶつ♥と入ってゆく。ただし、娘を抱っこしている母親のおまんこの方に、だが。近付けられたオトナちゃんちんは、当然自分のおまんこに入ってくるものだと思っていたのだろう。ミイちゃんから不満の声が上がった。

「えつ？ エツ？ どうして？」

『ごめんねミイちゃん。ミイちゃんを妊娠させるためには、ちょっと準備が必要なんだ♪』

そう言つて、僕はとあるモノを取り出す。【淫魔の薔】という魔道具だ。

『前にミアちゃんに使つたオモチャなんだけど、今度はミイちゃんにも使つてあげるからね♥』

「……つ♥」

『このオモチャで遊んだあとは、ミイちゃんは今よりも もつともつとお父さんの赤ちゃんを妊娠したくなるようになっちゃうよ♥』

ミアちゃんもミイちゃんも、発情期になつたというのに、なかなか僕の子供を妊娠しなかつた。

原因は、発情期を迎えたのが今回が産まれて初めてで、彼女たち自身、上手に卵子を排卵出来なかつたことに由来する。

本来二人には排卵誘発剤を服用させることで、無理やりに卵子を排卵させて受精・妊娠してもらう計画だった。

しかし排卵誘発剤だけでは、もう一つパンチが足りないらしく、エミさんはもう一步踏み込んだ、排卵を誘発させる手段を講じた。

淫魔に墮する事によつて下腹部に刻まれる、淫紋を利用した強制・排卵術だ。

エミさんが言うには、子宮と膣と卵巣を象<sup>かたど</sup>つて描かれた淫紋は、そ

の絵の部分がそのまま生殖器の部位と感覚が繋がっているのだそう。子宮を象<sup>かたど</sup>つた部分を触れば子宮を。卵巣を象<sup>かたど</sup>つた部分を触れば卵巣に刺激が行くらしい。

「だから、ミアちゃんの卵巣をマッサージして、排卵を促すの。ミアちゃんが、パパの赤ちゃんを妊娠できるようにな♥」というのは、前回ミアちゃんを孕ませる際の、母親のエミさんの弁である。

ミアちゃんに施した排卵を促すマッサージ、それを今度はミイちゃんにも施そうという訳だ。

『それじゃあミイちゃん、ミアちゃんとおんなじ、えっちなおんなのになっちゃおうね♥』

「♥あつ♥あんんつ♥」

♥ぬふ……つ♥

ミイちゃんの若干開いたおまんこに、対象を淫魔に変質させる魔道具、【淫魔の薔】を挿入し、発動させる。

淫魔化には若干の時間要するので、その間はミイちゃんのおまんこが使えなくなる。故に、ミイちゃんの下にあるエミさんのおまんこにお邪魔している訳なのだ。

♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

「♥ううううーつ♥」

かつて結んだ【貞淑な妻】の契約呪詛によつて刻まれた下腹部のハートマークあたりが薄つすらと光り出し、やはりそこから植物の芽らしきモノが生えてきた。

以前にミアちゃんに施した時と同じ光景が起こり、その時は下腹部を貫いてきたのかと驚かされたが、これは幻影の一種であり、触ろうとしても触れない。

「♥あつ♥いやあつ♥あんつ♥」

下腹部に芽吹いたそれはによきによきと成長を続け、茎をのばし葉を生やし蕾をつけ、最後には美しい白色の花を咲かせた。

美しいそれは幻影であるにも関わらず、ほのかに柑橘類のような香りを周りに放つと、夢く散つて薄れて消えていつてしまつた。

「♥あつ♥ああああんつ♥」

幻の花が生えた根元には、【貞淑な妻】で刻まれたハートマークを取り囲むように、どこか子宮を彷彿とさせるカタチの紋様が浮かんでいた。

これでミイちゃんの淫魔化は完了……

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

200

「あ」  
「あ」  
「あ」

腰を♥力クカク♥震わせながら、ミイちゃんは失おち

腰を、かくかく、震わせながら、ミイちゃんは失禁した。

「おもしろいからやうくらい サギニバスの身体になつたのかキモチ良かつたんだねえ、はかつたねえ、」

アクメによつておもらししちやうの

て僕にひつかけられるのも）今回の失禁は少し意味合いが違う。

淫魔化によって全員の性感感度が鈍敏になってしまったミィちゃんは、勝手に溜まっていたおしつこの、内側からの圧迫感にすらアクメ負けして、お漏らしをしてしまったようだ。

一  
ヤ  
ニ  
●  
あ  
ん  
ニ  
●

1

ミイちゃんを抱っこしているエミさんの手が、娘の下腹部に伸びる。

る。

— ♡ あつ ♡ あんつ ♡ ああつ ♡ —

させてあげるからね♥」

姉・ミアちゃんを無理矢理排卵させたエミさんによる卵巢マツサージが、妹・マイちゃんの生殖器を襲う。

「んあつ ハママつ ハママあつ ハ」

はい、ミイちゃんのおなかのなかの卵子ちゃん♥かわいい赤ちゃんになれるように♥おばあちゃんが♥イイコイイコ♥して

『ああそつか、ミアナ

んの立場はおばあちゃんになるわけかあ。僕は三人が産む子供たちの父親だけど』

奇妙な違和感を愉しみながら、エミさんの妊娠中経産婦のねつとりおまんこの感触を、腰を振つて味わわせてもらつていて。

『それにしてもエミさんのおまんこは凄いですね……♥ すでに子宮内に新たな命を宿しているのに、僕から更に新鮮な遺伝子を吸い出そくと蠢いていますよ……♥』

「うふふつ ♥ キモチよくてもつ ♥ あんつ ♥ 射精しちゃあ ♥ んつ ♥ ダメですよつ ♥ 今はつ ♥ ゃんつ ♥ ミイちゃんをつ ♥ 妊娠させるのをつ ♥ んんつ ♥ 第一に、考えてつ ♥ くださいねつ ♥ あんつ ♥」

♥ にちゅつ ♥ にゆるつ ♥ ぬぷぶつ ♥ くぷつ ♥ にゆりゆるつ ♥ くぶぶつ ♥

エミさんは、口ではそう言うけれど、おまんこはそう言つていない。むしろ射精させてやると言わんばかりにおまんこ肉を動かし、僕のオトナチンポを刺激してくる。

『それじゃ、うつかりナ力で射精しちゃわないように、やる事やつちやわないとな ♥ はい、ミイちゃん、おくちを開けてね♪ はい、あくん ♥』

「……？ あ、あくん」

取り出した錠剤を、一生懸命開けているミイちゃんの舌の上にちよいちよいと置いてゆく。

『ミアちゃんは赤ちゃんだからミルクに溶かして飲ませたけど、ミイちゃんはおねえちゃんだから、こつちの錠剤おくすりを飲んでもらおうかな ♥ そのままおくち、開けててね♪』

射精直前にまで高められた僕のオトナチンポを、エミさんのいやらしいお母さんおまんこから引き抜き、ミイちゃんの眼前に持つてくれる。

エミさんのおまんこ液で濡れそぼつたチンポをシゴき、高まつた射精感を更に高める。

『ミイちゃんつ ♥ パパの精液つ ♥ 出るよつ ♥ そのままつ ♥ お

くちつ開けててねつ♥』

びゆるびゆると脈打つて放出された精液が、ミイちゃんの舌の上に設置された錠剤——排卵誘発剤の上に覆い被さり、その姿を見えなくしていった。

『くくく　うつふう……　はい、それじやあミイちゃん、おくすりごつくんしようね♪』

僕の遺伝子を内包した体液と共に、排卵誘発剤が少女の体内に浸透してゆく。その意味を想うだけで、僕のチンポは射精後であつても硬さを強めていった。

♥ごくつ　んつ　♥ごくんつ　♥

『上手におくすり飲めたかなあ？　はい、あくんしてえ？』

ミイちゃんのお口に親指を一本つこんで、口を開けさせて、ナカを確認する。精液も錠剤のひと粒も残つていなかつた。

『えらいえらい　ちゃんとおくすり飲めたね　ミイちゃんはおねえさんだなあ♪』

「んんくく♥」

その勢いのまま、ミイちゃんのおくちにチンポを吸い付かせ尿道内に残つている精液を♥ちゅうちゅう♥と吸い出させる。

ミイちゃんの頬が上気している。お姉さんだと褒められた事と、男の精液を攝取した事による淫魔効果に依るモノだろう。心なしか、目がトロン♥と蕩けているように感じる。

「きゃんつ　♥」

「パパの子種ミルクも♥ごつくん♥できたことだし、早速あかちゃん、作つちやおうね♥」

♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

「あつ……あんつ　ん……つ　やつ……　やああ……つ　んつ　♥」

♥

エミさんの手が、ミイちゃんの淫紋性器へと伸びていた。

その指はねつとりと艶めかしく動き、淫紋の膣口／＼子宮口部分、子宮頸管／＼子宮体部分、子宮底／＼卵管部分を通り、卵管采部分、そして

最終目的地・卵巣へと到達した。

円を描くように行われる、卵巣から強制的に卵子を排卵させる“卵巣マッサージ”。それはおよそ、血のつながった母親が娘にして良い行為ではない。

しかし確かに、母親からの愛情を、その指の動きは宿していた。

「♥お？・つ♥んお？・つ♥おひいつ♥はひつ♥ひいつ♥あつああつ♥」

「はゞい♥ちからぬいて～……♥おまんこのあなを♥くぱ

あ♥つて開くようなイメージして～♥そうそう、上手上手……

♥』

オイオイオイ、女同士でなにやつてんの～？ 僕がオトコの良さつてモンを教えてやるよお～♥ という、世が世なら、生きたままミニチにされても文句を言えないような邪な邪念を念じながら、ラブラブ愛撫を行つている母娘の間に割つて入る。

端的に言えば、おちんちんが寂しいからです。ハイ。

♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

「ほら♥ミイちゃん♥お父さんのおちんちんが寂しいよ～つて言つてるよ♥」

「うん……♥ パパあ♥ ミイちゃんのおまたのナカに来てえ♥」

僕の切なさを察してくれたのか、ミイちゃんの淫紋をマッサージしながらエミさんが、ミイちゃんを促してくれた。

『それじゃあ、お邪魔しようかな♥』

ミイちゃんがふわりと開いてくれたたてすじに先端部分を添えると、ミイちゃんの幼<sup>ちいさ</sup>くて柔らかな大陰唇が♥ふにゅ♥つと僕の亀頭部分を挟んでくれた。ふにゅふにゅの柔らかさがキモチいい。

『パパのおちんちんが、ミイちゃんのおまんこに入つていくよ～♥』

「♥あつ♥は……♥パパあ……♥」

淫魔となつたミイちゃんのおまんこに生殖器を挿入してゆく。チンポの半分ほどが収まる頃、子宮口<sup>しゅうこう</sup>へ到達する。

ただの猫人族であれば、ここで終わりなのだが、今のミイちゃんは姉のミアちゃんと同じように淫魔へと変貌を遂げた雌<sup>オシナノコ</sup>猫だ。

淫魔となつたミイちゃんの子宮は、チンポをキモチよくする場所に変質し、今や僕のチンポをおいしそうに咥えて精液を搾り取ろうとしている。

「♥あ……つ♥パパのおちんちんが♥ミイちゃんの奥にいるの……♥」

『ああ……♥ パパも感じるよ♥ パパのおちんちんが、ミイちゃんの赤ちゃんのお部屋に包んでもらつてるの♥ とつてもキモチイイよ……♥』

「パパあ……♥」

オトナチンポの先端がすっぽりとミイちゃんの子宮に包まれて、僕自身も幸福感に包まれる。

「ふふつ♥？それじゃ、パパのおちんちんをギュッてしながら、赤ちゃんの基もと、排卵しようねつ♥？」

「あ……♥？ママあ……♥？ん……♥？でそう……♥？らんし♥？ミイちゃんのらんし♥？卵巢おなかからでできそう……♥？」

マツサージしてくれているエミさんの手に自身の手を重ねて、じつと目を閉じ、自分の体内に思いを馳せている。しばらくすると、ミイちゃんの身体がぴくんと跳ね——

「んつ……♥？でたあ……♥？」

ミイちゃんの、生まれて初めての排卵が行われたようで、卵子の放出が行われた自身の下腹部を、愛おしそうに撫でている。

「♥ミイちゃんのあかちゃん……♥」

『そつか、僕にとつてはこれから受精させる卵子だけど、ミイちゃんからしたらもう、おなかの中で育つ赤ちゃんなんだね♥』

「ふふつ♥ そうね♥ ミイちゃんの身体はもう、おかあさんになつたんだね♥ おめでとう♥ ミイちゃん♥」

「♥♥♥えへへ……♥♥♥」

ミイちゃんはいま、父親ほくと母親エミさんの二人から頭をなでられて、とても幸せそうにしている。

腰を引いて子宮底から亀頭を離し、子宮口まで引き戻すと、そこからまた一気に子宮底まで亀頭を突き入れる！

「あ？ひいいいつ！！」

♥ バ) ザ ゆ つ ♥ バ) ザ ゆ つ

ちほー  
♥  
ちほー  
♥

舌暴に 何度も何度も三つ子の三宮をいしぬく  
「パ？ つパパ？ あつ ダメつ やめつ やめ？ ええつ  
み？ つみい

? う う つ

ごめんねミイちゃん。キミはいつも、積極的に僕とおまんこしてくれ、とってもえっちでとってもイイコだ。でもね、だからこそ――

キミが本気で嫌がる姿を見てみたかつたんだ  
♥

ミイちゃんの子宮を乱暴に犯す。僕のチンポが子宮に出入りするたび、ミイちゃんの下腹部がモコッモコッと膨らむ。

「やめてっ パパあつ おつ やめてよおつ こわれるうつ こわれちやうよおおつ んひいいつ ひいいんつ」

当然、やめない。子宮も壊れない。赤ちゃんは産める。なんの根拠もないけれど、きっとそうだ。大丈夫に違いない。

「あつ  
きらいつ  
きらいきらいつ  
もうババなんてきらいいいい

泣き叫び、汗と涙と鼻水でグシャグシャになつた顔を覗き込んでみると、マイちゃんにしては珍しく、その表情には怒りと悲しみが浮かんでいた。

今日生まれて初めて排卵を経験した、外見年齢十歳程度の凹凸の少ないネコミミ獣人少女が上げた悲鳴と、僕に向けられた可愛らしい悪

意を前に、少女のつるつるぷにぷにおまんこに突っ込んでいたチンポが、はち切れんばかりに膨張した。

♥ ごちゅつ ♥ ごちゅつ

「ママっ ママあっ たすけっ たすけれ? えっ おつお(?)? つ  
お? おつ あ? お? つ やら? つ もうやら? ああ?」

お？おつ  
あ？お？つ やう？つ もうやう？あああつ

おまんこ子細ギリギリのザシ、おびき落とすの

んの子宮で キモチよくしてあけたら すぐに終わるからね♪♥」  
どんなに酷い要求をしても、笑つて受け入れてくれたミイちゃん

が、泣いてお母さんに助けを求めていた。

しかし、泣き叫ぶ愛娘を抱きしめながらおやで、母親のエミリイーと、マイちゃんからの信頼を裏切つて腰を振つている僕。

♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ♥ごぢゅつ

卷之三

「おつ

『ミイちゃんつ♥　出すよつ♥　お父さんの赤ちゃんの素つ♥　ミイちゃんの赤ちゃんのお部屋でつ♥』

ごりはー！

にやつ  
にやあああああああつ

ううつ  
♥ びゆるつ  
♥ びゆるびゆるつ  
♥ ぶびゆつ  
♥ びゆぶうつ  
♥ びゆ

子宮にびつちりと吸い付かれている状態で出された精液が行く先は限定されている。

僕のチンポの先端から撃ち出された子作り白濁ミルクが、ミイちゃんの卵管に注ぎ込まれてゆく。

が侵入してゆく

狭い狭い卵管を、ドロドロに白く濁つた僕の遺伝子入り体液によつて無理やり広げられて、幼い少女が歓喜と苦痛の入り混じつた叫び声

をあげた。

卵管の奥の奥、産み落とされたミイちゃんの卵子が、土石流にそうされるように、僕の子種汁に飲み込まれていった。

♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

いつの間にかエミさんの抱っこから解放されていたミイちゃんの上に覆い被さつて、種付けプレスの恰好でミイちゃんに種付けをした。

長い長い種付けを終えると、僕の股間が温かいもので濡れるのが分かつた。

ミイちゃんがした、おもらしだ。

「ひつ ひつ うえつ うえええつ もつ もう、しないつ ぱぱと  
えつちしないつ うつ うえつ うえええんつ」

『ああ、ごめんごめん♥ いじわるしちやつたね♥ ごめんね♥』  
ぐしゅぐしゅと泣き続けるミイちゃんを、生殖器で繫がつたまま抱っこしながらあやしてあげる。

なにを要求しても否と言わないミイちゃんの、今まで絶ぞ見られなかつた彼女の泣き顔！あの可愛らしいお顔が台無しになるほど

の♥

射精を終えたばかりだと言うのに、彼女の泣き顔を見ただけで、僕のチンポはバキバキに勃起し直した。

僕は今日、初めてミイちゃんを強姦レイプできた気がする。

ミイちゃんの本気の泣き顔を見れた事で、彼女を強姦できて良かつたと本気で思えた。

♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

泣き止まないミイちゃんを抱っこしてあやしていたら、いつの間にか彼女は寝入つてしまつたようだ。

繫がつたままの生殖器をミイちゃんからゆつくりと引き抜き、ベッドに寝かせる。

隣では姉のミアちゃんがキモチよさそうにアクメ氣絶おひるねしていた。

「種付け、お疲れさまでした♥」

エミさんが寝ている姉妹が冷えないように布団をかけてあげた。

「うふふ♥ おちんちん、まだこんなに硬くして……♥ まだお射精し足りないんですか？」

『ええ、ミイちゃんのえつちな姿を見てたら、どうしようもなく興奮しちやつて……』

「ふふつ♥ でも、ミアちゃんもミイちゃんも、今はアクメ氣絶中ですから……♥』

そう言つてエミさんは、僕のガチガチのチンポに手を伸ばし、くちびると舌を這わせてきた。

『うおお……♥』

「♥ちゅ♥ちゅふ♥ うふふ……♥ そんなに種付けされたいのでしたら……もう一人……作つちやいますか？」

そうやつてエミさんはいたずらっぽく、自身のおまんこをふんわり広げて僕を誘つてくる。

目の前で二人の娘が身籠る瞬間を見守つてきたエミさんのおまんこは、トロトロに濡れ、キラキラといやらしく光を反射していた。

娘たちがお昼寝をしている横で、さらに新しい命を宿すべく、夫婦となつた僕たちは身体を重ね合つた。

♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥

つづく

◆◆◆tips◆◆◆

### 【淫魔の薔】いんまのつぼみ

呪具

柑橘類の種のような外見をしている。

被使用者の種族に強制的に淫魔の因子を追加する。人間種ならば、人間種の淫魔。獣人種であれば獣人種の淫魔、という風に。変化は半永久的であり、解除は困難。

モノによつて品質が異なる場合がある。

皮肉を込めてエンジエルエッグなどと呼ばれる事も。

### 種族名

対象の性欲を摂取して生きる寄生情報体の名称。またはそれに寄生され、淫魔の因子を持たされ変貌した者たちの名称。別名ではサキュバスやインキュバスなどと呼ばれたりもする。

別世界の存在である前者が、こちらの世界で活動する為に使用する中継器としての役割が後者である。

寄生された知的生命体は、非常に好色的になり、性交に適した性質・肉体に変化する。過去、高純度の淫魔因子に寄生された者が、国を傾ける原因となつたほどの個体に成長した。

